

博士論文 2023 年度

プロティノスにおける可感的世界の探求とその意義

慶應義塾大学大学院文学研究科

哲学・倫理学専攻 哲学分野

豊田泰淳

目次

凡例	3
序章	4
第一章：プロティノスによる『ティマイオス』篇解釈の一側面 — 「二重の自己展開活動理論」による制作者(δημιουργός)解釈—	8
序	8
第一節：プロティノス以前の『ティマイオス』解釈とその問題点	9
第二節：プロティノス自身の制作者像とその問題意識	12
第三節：DAT の諸規則とプロティノスにとっての利点	17
結	22
第二章：プロティノスの擬似質料・形相論	24
序	24
第一節：ペリパトス派的実体論の受容と変容	25
第二節：プロティノスにとっての可感的実体、実体性と性質の関係	29
第三節：ロゴスの導入、可知的世界と可感的界との連続	35
第四節：認識主体と可感的実体の関係、認識の変容	38
結	40
第三章：非物的なものから成る物体の世界 — プロティノスによる可感的事物の理解について、『エンネアデス』第 26 論攷(III.6)を中心に—	42
序	42
第一節：論攷概要とその主眼	43
第二節：質料の非受動性を巡るプロティノスの問題意識はどこにあるのか？	44
第三節：物体の大きさに関する問い	53
結	55
第四章：プロティノスにおける物体の問題 — 嵩(ὄγκος)と性質の関係に着目して—	57
序	57
第一節：嵩というあり方	58
第二節：物体性の問題	61
第三節：性質の量化	65
結	68
第五章：プロティノスにおける「何であるか(τί ἐστίν)」の探求	70
序	70
第一節：プロティノスのディアレクティケー	71

第二節：「何であるか」と「なぜ」の探求.....	77
第三節：「何であるか」の終極.....	81
結.....	86
第六章：プロティノスの「神に似ること」と「美になること」—徳(ἀρετή)と浄化(κάθαρσις) の関係に着目して—.....	87
序.....	87
第一節：神に似るための手立て.....	88
第二節：魂の浄化、及び徳と美の相違.....	93
第三節：美を介した類似の特性.....	98
結.....	101
結論.....	103
参考文献.....	105
初出一覧.....	109

凡例

プロティノスの原典テキストの引用に際して用いた各著作の底本は以下の通り。

Henry, P.& Schwyzer, H.-R. (1964), *Plotini Opera I* (Oxford Classical Texts), Oxford University Press.

Henry, P.& Schwyzer, H.-R. (1977), *Plotini Opera II* (Oxford Classical Texts), Oxford University Press.

Henry, P.& Schwyzer, H.-R. (1982), *Plotini Opera III* (Oxford Classical Texts), Oxford University Press.

なおこれらには、以下の媒体で発表されたテキスト修正案を適用している。

- ・上記第3巻所収の、第1,2巻に対する *addenda et corrigenda ad textum et apparatus lectionum*
- ・ Schwyzer, H.-R. (1987). *Corrigenda ad Plotini textum*, *Museum Helveticum* 44, 191-210.
- ・ Schwyzer, H.-R. (1992). *Textkritisches zu Plotin und zur Vita Plotini*. *Chercheurs de sagesse*, 346.

また『エンネアデス』各論攷の参照は、9(VI.9) 11,49-51 のように、「執筆順(論集番号.論攷番号) 章番号,行数」というかたちで行った。

序章

本稿の主眼は、紀元後3世紀にローマ帝国領内で活動した哲学者プロティノス(A.D.205-270)の思想から、特に可感的世界の探求としてまとめられる領域を取り上げ、その哲学的意義を評価することにある。プロティノスの哲学において、可感的世界を対象とする探求の価値はどこまで見積もられるべきだろうか。イデア的實在に優位性を与えるプラトン主義者にとって、可感的事物が相対的に劣ったものと見なされることは常である。また一者という超越原理からの発出を認めるプロティノスの場合、可感的事物の産出を承認したとしても、一者以外のあらゆるものが始原たる一者へと還元され得ると認める限りでは、可感的な諸物体をそれ自体として考察対象とする必要性は更に薄まるようにも思われる。事実、プロティノスの著作集『エンネアデス』の中で比較的自然学的・宇宙論的な題材を含む論攷が集中しているとされる¹第二・第三論集中の記述を確認すれば、確かに殆ど全ての論攷が可感的世界における現象を話題として取り上げている一方で、一まとまりの論攷においてその体系的な説明を行っているわけではないことが容易に納得されよう。少なくとも、ペリパトス派的な意味での「自然学」という独立した学問領域が構想されていたようには思われない。またプロティノスにとっての可感的事物とは、個人の魂が感覚を介して初めに、しかも否応なしに出会うものであるが、同時にそこに留まり続けることをよしとしない対象でもある²。その意味では、そこに体系的な説明を与えずとも、現世的なものを拒否せよという主旨の注意喚起をもって足ることとなりそうである。プロティノスの主たる関心は、やはり可感的事物の背後にある原理を捉えることにあり、その結果としての可知的世界への還帰に向けられていると言ってよいだろう。

それでは、プロティノスにとって可感的世界の探求は本質的に不要であり、最終的に還元される先である、可知的世界のあり方を知るのみで十分と思われたであろうか。研究史を概観すれば、この問いに肯定的に答える勢力は非常に強力であった。長らく新プラトン主義として括られる哲学は極端に現世拒否的な思想であると考えられ、例えば現代的プロティノス研究の先駆けとなるBréhierの概説書*La Philosophie de Plotin*(1928)においては、一者から魂までが上位の領域として区切られ、その下方に位置する物体・自然を扱う項目は

¹ 『プロティノス伝』24章におけるポルフェリオスの編集方針を参照。

² 例えば5(V.9) 1,1-6では、「あらゆる人間は、もとより知性に先立って感覚を用いるものとして生まれ、必然的にはじめのものとして可感的なものどもに直面するのだが、ある人々はこの世界の者として留まりつつ、これらはじめのものどもを通じて生き、またそれらを最後のものと考え、またそれらの内にある苦痛や快樂をそれぞれ悪、善と理解するので十分であるとも考えた」と述べ、可感的なものを全てとみなす人々に対する批判的な態度を明らかにしている。

設けられず³、またDörrieの*Porphyrios' Symmikta Zetemata*(1959)においても、プロティノスやポルフェリオスにとって物体や質料の領域に関わる話題は彼らの興味を引くものではなかったと結論付けられている。その後しばらくの間、こうした諸家の見解がプロティノス研究において主流かつ支配的なものとなったこと（延いては恐らくこうした態度が新プラトン主義研究全体を遅らせる要因の一つとなったこと）は事実として認めなければならない。

しかしながらその後、Wagner(1979)、Strange(1981)、Emilsson(1988)といった博士論文が相次いでプロティノスによる可感的世界の解釈を扱うようになり、1980年前後からは状況に変化が認められるようになる。中でも2006年にイタリアで開催されたワークショップ *Physics and Philosophy of Nature in Greek Neoplatonism* では、新プラトン主義的思想における「自然学」の扱い方について、その方向性が明確に打ち出された。すなわち新プラトン主義的思想においては、いわゆる「自然学」としてのPhysicsとより広範な領域一形而上学、神学、魂論などを含む自然哲学Philosophy of Natureという両側面は、互いに切り離すことの出来ないものであり、少なくとも以上の前提に立った上で「自然学」理論を再構成することには明らかな意義が認められるとの合意が形成されたのである。上のワークショップの成果を反映したChiaradonna&Trabattoni(2009)をはじめとして、2000年代以降にはこうした時流に乗った論集、単著がいくつか発表された。今や新プラトン主義的思想における「自然学」というトポスは、考察に値するものどころか、体系全体の理解に必要不可欠な地位を占めるものとなっている。

さて、上記の流れを踏まえて、プロティノスに対象を絞って彼の可感的世界に関わる探求の内実を概観することにしよう。本稿が着目したのは、可感的世界の探求という他学派と共通のトポスを利用した、プロティノスの対話的態度である。すなわち、プロティノスはプラトン主義にとってより根本的な高位原理のみを探求対象とし、その存在を前提として他学派への応答を行ったのではなく、むしろときに、万人が必然的に共有する可感的世界の事象を巡って議論し、論敵の不備を正確に指摘する中で自説の展開を目論見た、と想定するのである。この意味ではやはり、プロティノスの探求は、純粹な自然学的動機に基づくものとは言い難い。あくまで可感的世界の構造を正確に見定める中に、高位原理への足掛かりがあると主張するのである。

第一章では、プロティノスによる『ティマイオス』解釈の中から、特に制作者による世界制作神話を巡る論点を取り上げる。『ティマイオス』は、プラトン派に属する限り、可感的世界の考察を行う上での権威的テキストとなる。しかしながら、そこに描かれているような擬人的原理に基づく可感的世界の成立に関しては、プラトン派を含め批判的吟味の対象となった。プロティノスもまた無批判に『ティマイオス』の記述を受け入れることはなく、先行解釈との対話の結果として独自の制作者像を構築してゆくことになる。本章の目的は、プロティノスが彼自身に至るまでの制作者解釈を踏まえ提示した全く新しい制作

³ ただし、第二版以降には補遺として可感的世界に関する記述が追加される。

者像と、その制作者を原因として可感的世界が生み出される仕方を説明する理論として導入された「二重の自己展開活動理論」を検討し、その新奇性と意義を確認することにある。

第二章では、プロティノスが可感的事物を主題とし、当時恐らく優勢であったペリパトス派の実体論に対して行った批判を取り上げる。プロティノスがまず着手するのは、『カテゴリー論』と『形而上学』を根拠にペリパトス派が唱える実体の規定に関して、その根本的不備を指摘することである。その上でプロティノスは、自身の構想する可感的事物の構造を説明するのである。この説明にはペリパトス派と共有する質料・形相という語彙が用いられるが、もはやそれぞれの内実はペリパトス派のものとは完全に異なっている。本章では、プロティノスの可感的事物及び可感的世界の構造はこのいわば「擬似質料・形相論」によって成り立っているのであり、これによりペリパトス派の枠組みを解体し、独自の仕方で理解された質料・形相間の関わり合いに基づいて可感的世界の構造を捉え直すことに、プロティノス特有の高位原理への還帰、上昇というモチーフへの接続があり得るということが主張される。

第三章では、前章で紹介された「擬似質料・形相論」の構成要素から質料を取り上げ、プロティノスがそこに与えた独自の解釈を検討する。着目するのは、プロティノスが強調する質料の非受動性である。プロティノスの時代において、特定の事物が成立する以前の第一質料を導入することは、諸学派において一般的であった。特に同時代のペリパトス派による第一質料論と多くの共通点を持ちながら、プロティノスはそこに非受動性という更なる独自の特徴づけを認めることで、他学派からの差別化を図る。ただここでも、プロティノスの質料解釈は『ティマイオス』に忠実なものとは言えず、むしろペリパトス派の第一質料論に備わる不備を指摘した上で必然的に導き出される独自の理解として昇華された内実を持つものだということが判明する。

第四章では、前章で導入された質料の非受動性というあり方を認めるときに直面するアポリアを扱う。すなわち、プロティノスの言う非受動なる質料とは、一切の転化を受け入れられないものとして説明されるのだから、それ自体が物体となることはない。このように前提するとき、我々が日常的に経験、感覚する物体としてのあり方の根源はどこに求められるのか、という問題である。ここでの課題は、質料を物体の構成要素に含ませることなく、形相における三次元的延長の成立へと寄与させる仕方である。プロティノスはこの困難を解消し、アイデアを物体に対し先行させるプラトン派が必然的に直面する、非物体的な原因が物体を産出するとはいかなる事態か、という難問を解決する。

第五章では、ここまで解明してきたプロティノスにおける可感的世界の構造を基にし、物体・非物体あるいは可感的・可知的という相容れない二領域を跨ぐ上昇のプロセスを中心主題とする。プロティノスにおいても、この上昇の起点となるのは可感的世界であり、その探求の中に手掛かりを見つけなくてはならない。この上昇を支える営みとして、プロティノスはディアレクティケーへの言及を行う。哲学の出発点である「何であるか」とい

う問いを突き詰め、そう問うことの終極へと歩みを進めるとき、人は可感的世界の探求から可知的世界の探求へと足を踏み入れることになる。

第六章では、前章での言葉を介した上昇プロセスを別の角度から眺め、上昇を得るにあたって美の概念が果たす役割を検討する。プロティノスはこの上昇を「神に似ること」というプラトンのモチーフに重ねて説明することがあるが、この「似ること」の理解を発展させ、自己の変容というプロティノス独自の境地へと接続させる。その入り口は可感的美の構造を原因とともに正確に知ることであり、その意味でプロティノスによる可感的世界の考察は極めて重要な意義を持つ。加えてそこには、万人が参与し得る普遍的な営みとしての側面も同時に持たされることになる。

第一章

プロティノスによる『ティマイオス』篇解釈の一側面 —「二重の自己展開活動理論」による制作者(δημιουργός)解釈—

序

Rutten(1956)の研究以来、「二重の自己展開活動⁴理論(Double-Activity Theory=DAT)」としてまとめられる原因論は、プロティノスの思想、中でもその骨子たる発出論の図式を特徴づける重要な理論と見なされ、今日に至るまでその解釈を巡り研究者間で盛んな議論が行われている⁵。DATの如何なる点をもってプロティノスの革新性を見なすか、言い換えれば、プロティノスが彼以前のプラトン主義者との決別を図った点については様々な案が提出されてきたが、プロティノスが『ティマイオス』篇の世界制作神話を読み替え、DATを新たな原因論のモデルとして導入したとする Chiaradonna(2015)の提案は、中でも最も重要なものの一つに数えられよう⁶。つまり、プロティノスはプラトン主義者として可感界の生成という事態を認める一方で、『ティマイオス』が伝える制作者(δημιουργός)の手になる制作、という神話的説明を拒否し、そこにDATという説明項を与えたのだと想定される。ところで、『ティマイオス』における世界制作神話は、プラトン派以外の諸学派の間で極めて悪名高い説明として流布していたことが知られる。論敵らがこぞって槍玉に上げるのは、手足や道具を用いて制作を行う技術者に模された制作者像である。この批判に対しては、プロティノス以前にもプラトン主義者による応答、反論が既に存在していた。しかしながら、プロティノスはその内容を全面的に受け入れたわけではない。むしろ、論者の名を明示することはないものの、対立する論点を取り上げ、対話篇の解釈を争っていた形跡が確認される。つまり、この論争状況を受け、プロティノスは『ティマイオス』の記述を尊重しつつ、同時に彼以前のプラトン主義者による解釈の不備を是正した上で、論敵の批判を回避するためにDATという新たな原因論を構築する必要があったのだと考えられる。

以上の問題意識に基づき、本章の論述は以下の通り進められる。第一節にて、プロティノス以前から指摘され、またプロティノスも共有していた『ティマイオス』の神話描写に関わ

⁴ ἐνέργεια という語の翻訳については、色付けをしないためにエネルギーと音写する他、以下文脈に応じて現実態、働き、活動等と訳し分けるが、原語は同じものを指していると了解されたい。また、本章の中心主題であるプロティノス独自の用法に関しては、その哲学的含意を組み込んだ上で「自己展開活動」と訳すことにした。後述する通り、この訳語の選定作業自体も本章の論究対象である。

⁵ 例えば Rutten(1956), Lloyd(1990), Narbonne(2001), Emilsson(2007).

⁶ Chiaradonna(2015), 33.

る問題点を確認する。第二節では、第一節で指摘された問題点に関わるプロティノス自身の解釈案と、そこから確認されるプロティノスに独自と言える問題意識を指摘する。第三節では、『エンネアデス』第7論攷の記述を基に DAT の諸規則を整理した上で、その構想に影響を与えたと考えられるアリストテレスの議論との関係を明らかにし、『ティマイオス』解釈という文脈において、DAT がプロティノス以前の解釈の是正に貢献したと言える点を明確にする。これらの議論を踏まえ、プラトン主義の歴史において DAT が有する位置付けを再確認することが出来れば、本章の目的は達成されたことになる。

第一節：プロティノス以前の『ティマイオス』解釈とその問題点

『ティマイオス』において「ありそうな物語 (εἰκὼς μῦθος)」として語られる世界制作神話は、解釈の余地を多分に残したが故に、後代のプラトン主義者はその整合的な理解を巡る種々の主張を展開することになった。他方で、ペリパトス派、ストア派、エピクロス派は、この制作者による世界制作の図式を批判していることが知られる。この発展的及び批判的議論の双方において焦点となるのは、制作の過程に見出される人格的描写や、制作者と彼が参照する範型 (アイデア)、及び完成する作品との関係である。まずは問題となるテキストを確認したい。

さて、如何なる時も制作者は、常に同一であるものに目を向けつつその類のものを範型として用いるので、その (作品の) 形、力を仕上げる場合には、そのように完成されるものが全て立派なものとなるのは必然である。

οἴου μὲν οὖν ἂν ὁ δημιουργὸς πρὸς τὸ κατὰ ταῦτὰ ἔχον βλέπων ἀεὶ τοιοῦτῳ τινὶ προσχρῶμενος παραδείγματι, τὴν ἰδέαν καὶ δύναμιν αὐτοῦ ἀπεργάζηται, καλὸν ἐξ ἀνάγκης οὕτως ἀποτελεῖσθαι πᾶν·

Tim. 28a6-b1.

彼 (構築者) は善きものだった。ところで、善きものには何に関しても如何なる場合でも物惜しみする妬みは少しも生じないのである。そこで、このような妬みとは無縁であったが故に、彼 (構築者) は全てのものが出来る限り自分自身によく似たものとなるよう望んだのであった。

ἀγαθὸς ἦν, ἀγαθῷ δὲ οὐδεὶς περὶ οὐδενὸς οὐδέποτε ἐγγίγνεται φθόνος· τούτου δ' ἐκτὸς ὧν πάντα ὅτι μάλιστα ἐβουλήθη γενέσθαι παραπλήσια ἑαυτῷ.

Tim. 29e1-3.

以上の引用には、「目を向ける」、「仕上げる」、「物惜しみをしない」、「望む」といった、人間の行為を想起させる語彙が認められる。また、制作者、範型、及び形姿を受け取ると言わ

れる受容体の各々について、『ティマイオス』中にその起源を説明する記述はなく、それらは所与のものとして扱われている。すなわち、既にある材料や範型を前提として、そこに働きかける技術者以外のイメージをここから読み取ることは困難だと言えよう。

この技術的制作のイメージは、後の論敵がこぞって批判することとなる。例えばアリストテレスは、生成するものを論ずる際にしばしば技術的制作と自然的産出を並列させ、前者は外在する始動因と形相因を必要とするが、後者はその両者を内在原理として含むものと措定する。その内でより根本的な生成のモデルとして扱われるのは後者であり、技術に基く仕方はあくまで自然的産出についての派生的、副次的なイメージとして語られている⁷。「立派なもの」が最善の仕方では生じる過程に技術的制作を介在させる『ティマイオス』の記述は、アリストテレスにとって承服しがたいものだったことが予想されよう。またストア派は、『ティマイオス』的制作者像に対して、形成力をもった自然（φύσις）や種子的ロゴス（σπερματικός λόγος）といった原理を代わりに提示している。あるいは同様の原理を指して技術的火（πῦρ τεχνικόν）の名が用いられることもあるが、ストア派においてもアリストテレス同様自然と技術の対立は念頭に置かれている⁸。呼び名は複数あれど、ストア派的宇宙の形成原理に関しても注意すべきは、それが『ティマイオス』の制作者のように外部から働きかけるのではなく、むしろ宇宙に内在し、内部から働きかけを行う原理として理解されていることである。このように、技術者モデルを相手取った論敵の批判に関しては、彼らが共通して能動原理と形相的原理の外在性を指摘しており、その代替案として自然的産出モデルを提案することに一つの要点が見出されるであろう⁹。

プラトン主義者は、以上の批判に対して応答しなければならない。O'Meara は以上の論争の特徴として、プラトン主義以外の学派が『ティマイオス』の記述を文字通り受け入れた場合の批判を行った一方で、多くのプラトン主義者たちは早い段階から『ティマイオス』の神話を文字通り受け取らず、整合的な解釈を試みているという点を挙げている¹⁰。つまり、他学派による批判は、プラトン主義者たちの態度とはすれ違っていると言える。そのみならず、プラトン主義者は論敵の見解を取り入れつつ『ティマイオス』解釈を行っているとする指摘される¹¹。また Dillon の整理によれば、『ティマイオス』解釈においてプラトン主義者が関心を寄せた論点として、制作者は何と同定されるか、制作者の代理を行った新しい神々は何と同定されるか、という問いが挙げられる¹²。すなわち、批判への応答という文脈とは

⁷ 例えば *Met.Z.7*,

⁸ O'Meara(1980), 365-367.

⁹ その他エピクロス派やキケロによる批判については O'Meara(1980), Chiaradonna(2015)を参照。

¹⁰ O'Meara(1980), 367-368.

¹¹ 『ティマイオス』の世界制作神話解釈に混入したアリストテレスの知性論及びストア派のロゴス論については O'Meara(1980), 368-369 や O'Brien(2015), 4-11 を参照。

¹² 他の論点としては、この世界の誕生は時間的始点を持つか、受容者とはいかなるものか、如何にして三角形が立体的物体を構成するか、三角形はアイデアとどのような関係にあるか、が挙げられている。この内、時間的始点と受容者についてはプロティノスも関心を

独立に、プラトン主義内部においても『ティマイオス』の記述を文字通り理解するのではなく、制作者を他の説明項へと置き換えて説明することが一般的な潮流であったと言えよう。それ故、その中で論敵が提案するモデルへ制作者像が接近することも許容されたと思われる。

この問題状況の中でプロティノス以前のプラトン主義者がとった方策は、技術による制作のイメージを拒否し、制作者とアイデアを存在論的に接近させること、そしてその制作者を知性や世界靈魂という原理に置き換えることである。制作者の同定という問題については、古期アカデメイア派以後神としての制作者を最高原理と同一視する潮流が続く中、前1世紀頃から新ピタゴラス主義の影響を経て、制作者を第二位の原理へと格下げさせる傾向が登場する。その過程で、制作者としての知性あるいは世界靈魂の位置付けを再検討する必要が生じ、しばしばその両者は混同されることもあった¹³。Richによれば、その傾向が生まれた経緯として、①制作者が範型に目を向けつつ制作を行う過程に「構築者は全てのものが出る限り構築者自身によく似たものとなるよう望んだ」という上掲 29e1-e3 の記述を同時に読み込んだこと、②自己直知者を原理に立てるアリストテレスの知性論を知っていたこと、が挙げられるという¹⁴。その結果、アイデアを制作者たる神の直知対象と見なすことで、神の内に万有として展開する要素を含み込ませたのである。この点は、原理の内在性という点で『ティマイオス』から発展を見せていると言えよう。

しかしながら、アイデアを神の直知対象として神に内在させた場合でも、論敵によって批判された始動因としての不備を克服することは出来ない。上述の難点を自覚していたと思われる中期プラトン主義の代表者アルキノオスのアイディアを確認しておこう。

彼（プラトン）が世界は生じたものだと言ったとき、世界が存在していなかった瞬間があったのだと理解してはいけない。むしろ、世界は常に生じつつあるものであり、それ自体の存立よりも更に根源的な原因と言えるものを明らかにしているのだ（と理解しなくてはならない）。他方、世界の魂もまた常に存在するものであって、神はそれを作ったのではなく、秩序づけたのである。（ただ、）以下の仕方であれば「作った」とも言いうるだろう。すなわち、神は深いまどろみ、眠りのような状態から世界靈魂を目覚めさせ、その知性を自身へと向けさせた。それは世界靈魂がかの者の直知対象に目を向け、かの（神の）直知対象を目指し、形相と形姿を受け取らんがためである。

ὅταν δὲ εἶπη γενητὸν εἶναι τὸν κόσμον, οὐχ οὕτως ἀκουστέον αὐτοῦ ὡς ὄντος ποτὲ χρόνου ἐν ᾧ οὐκ ἦν κόσμος· ἀλλὰ διότι αἰεὶ ἐν γενέσει ἐστὶ καὶ ἐμφαίνει τῆς αὐτοῦ ὑποστάσεως ἀρχικώτερόν τι αἴτιον· καὶ τὴν ψυχὴν δὲ αἰεὶ οὖσαν τοῦ κόσμου οὐχὶ ποιεῖ ὁ θεὸς ἀλλὰ κατακοσμεῖ, καὶ ταύτη λέγοιτ' ἂν καὶ ποιεῖν, ἐγείρων καὶ

共有しているが、他方三角形に関わる論点については、プロティノスが問題として取り上げた形跡はない。

¹³ Dillon(1977), pp.6-7.

¹⁴ Rich(1954), pp.124-127.

ἐπιστρέφων πρὸς αὐτὸν τὸν τε νοῦν αὐτῆς καὶ αὐτὴν ὥσπερ ἐκ κάρου τινὸς βαθέος ἢ ὕπνου, ὅπως ἀποβλέπουσα πρὸς τὰ νοητὰ αὐτοῦ δέχεται τὰ εἶδη καὶ τὰς μορφάς, ἐφιεμένη τῶν ἐκείνου νοημάτων¹⁵.

Didaskalikos XIV 169,32-41.

このように、世界靈魂は所与のものと想定され、神の役割は世界靈魂を覚醒させることに留められている。制作者たる神はこの場合アイデアと同様の立ち位置にあり、実質的な働きかけは世界靈魂が「目を向ける」こと、そしてその結果として形相を受け取ることとして描写される。その意味では、制作者は自ら手を下すことなく世界の制作に携わることが出来る。この過程が、留保を伴ったかたちで「作った」と見なされ得る事態なのである。この説明は、制作者自身の能動作用を技術として描くことを回避している。この点は論敵の批判に耐え得る改変と言えよう。しかしながら、この場合においても、自然物における内在原理のように、直知対象としてのアイデアが直接産出の担い手となるわけではないのである。

アルキノオスに限らず、プルタルコスやヌメニオスの記述にも同様の傾向が見られる。中期プラトン主義的と言える『ティマイオス』解釈においては、以下のような発展が確認出来るだろう。まず、彼らはアイデアを神の直知対象として内在させることによって、所与の原理の数を削減した¹⁶。その上で、制作者自身はアイデア的に留まりつつ、制作者にとっての下位者、例えば世界靈魂が制作者の方に働きかけることで、秩序を受け取るのである。しかしながら、この構図は「作った」という事態そのものを捉え直した結果の解釈であり、あくまで所与の存在を前提とする構図から脱却することは出来ていない。また、以上の図式を描く「制作」過程において、世界靈魂が受けるとされる秩序付けの内実も不明瞭であり、世界靈魂にも制作者としての立ち位置を読み込む余地が残ってしまうのである。

次節では、中期プラトン主義者によって残された上記の課題をプロティノスがどのように整理したのかを確認する。またその中で、プロティノスにとって特有と言える『ティマイオス』解釈上の問題意識も同時に指摘していきたい。

第二節：プロティノス自身の制作者像とその問題意識

おそらく以上の問題意識を引き受けて、プロティノスは知性原理こそが真の制作者であるとしばしば強調するが¹⁷、しかし彼も魂が制作の過程で有する役割を排除したわけではなく、知性ととも世界秩序付けに関与させている。このそれぞれ異なった役割については初期論攷の時点で問題点とされ、彼の案が提示されている。

¹⁵ *Didaskalikos*, XIV, 169, 32-41.

¹⁶ O'Brien(2015), 22.

¹⁷ 例えば、10(V.1) 8,5.

そして、もし誰かがこれと同じこと（あらゆるものに関してその原因者を探求すること）を万有に対しても転用すれば、こちらにいたとしても、知性まで上昇することになろうし、知性を真なる作り手、制作者として規定することになろう。そして、形姿を受け取った基体が火、水、空気、土となり、これらの形姿は別のものからやって来た、と述べることになろう。この（別のもの）とは魂のことである。また更に魂は、これら四者に対して世界としての形姿を与える。しかし、知性が魂に対して、それらのロゴス（魂が四元素をまとめあげる一連の流れ）の先導者となるのであり、それはまるで技術者たちの魂に対しても、諸技術に起因して活動することに対するロゴスがあるが如くである。知性は、一面では魂のいわば形相としてあるのであり、それは形姿に相当するものである。しかし、他面でそれは形姿を提供するものでもあり、それは青銅の作り手に相当する。作り手が与えるものは、その全てが作り手の内に存するのである。その作り手が魂に与えるものは、真実に近いものだが、肉体が受け取るものは、すでに影像であり、模倣なのである。

τὰ αὐτὰ δὲ ταῦτα καὶ ἐπὶ τοῦ παντός μεταφέρων τις ἀναβήσεται καὶ ἐνταῦθα ἐπὶ νοῦν ποιητὴν ὄντως καὶ δημιουργὸν τιθέμενος, καὶ φήσεται τὸ ὑποκείμενον δεξάμενον μορφὰς τὸ μὲν πῦρ, τὸ δὲ ὕδωρ, τὸ δὲ ἀέρα καὶ γῆν γενέσθαι, τὰς δὲ μορφὰς ταύτας παρ' ἄλλου ἤκειν· τοῦτο δὲ εἶναι ψυχὴν· ψυχὴν δὲ αὐτὴ καὶ ἐπὶ τοῖς τέτρασι τὴν κόσμου μορφήν δοῦναι· ταύτη δὲ νοῦν χορηγὸν τῶν λόγων γεγονέναι, ὥσπερ καὶ ταῖς τῶν τεχνιτῶν ψυχαῖς παρὰ τῶν τεχνῶν τοὺς εἰς τὸ ἐνεργεῖν λόγους· νοῦν δὲ τὸν μὲν ὡς εἶδος τῆς ψυχῆς, τὸν κατὰ τὴν μορφήν, τὸν δὲ τὸν τὴν μορφήν παρέχοντα ὡς τὸν ποιητὴν τοῦ ἀνδριάντος, ᾧ πάντα ἐνυπάρχει, ἃ δίδωσιν. ἐγγύς μὲν ἀληθείας, ἃ δίδωσι ψυχῇ· ἃ δὲ τὸ σῶμα δέχεται, εἰδῶλα ἤδη καὶ μιμήματα.

5(V.9) 3,24-37.

まずは知性が自身の内にある形相を提供し、次いでそこに我々が目にするような世界としての形態を与えるのが魂である。知性は制作者の側面と形相の側面を有しており、制作者として下位のものに与えることになる形相は自己の内に全て含まれていなければならない。同論攷においては、知性の内の直知対象(τὰ νοητά)は部分に分かたれることなく、その全てが「渾然一体」となって常に全体として存在していると繰り返される¹⁸。この点はアイデアを制作者に内在させる先述の傾向と一致するだろう。他方、知性を「形姿の提供者(τὸν τὴν μορφήν παρέχοντα)」と見なし、アイデア的実在そのものを能動原理として理解する点はプロティノスに特有の立場である¹⁹。他方で魂による秩序付けは、知性から受け継いだ全体と

¹⁸ 例えば 5(V.9) 6,3., 6,8., 7,11-12.

¹⁹ 知性を制作者と見なす傾向が必ずしもそのままポルフェリオス以降のプラトン主義者に引き継がれたわけではないという点については Dillon(1969)及び Sorabji(2005), 170 を参照。

しての形相を火、水、空気、土というように個別的な形態として成立させるものとして説明される²⁰。

さて、世界の秩序付けに知性と魂の双方を参与させた上で、魂を真の制作者と見なしてはいけない理由はどこにあるだろうか。例えば Narbonne はこの点に関し、プロティノスと同時代に隆盛したグノーシス派への批判という文脈を提案している。第 33 論攷「グノーシス派に対して」でプロティノスが列挙する批判の要点を確認してみよう。そこでは「魂を制作者と見なすこと」が「制作者が世界を崩壊させること」と関連付けられて説明されている²¹。プロティノスによれば、仮に世界が崩壊するとすれば、それは彼らにとっての制作者たる魂の思い直し (μετάνοια) が原因である。グノーシス派は、制作者を魂と見なし、さらにその魂が自ら作った世界の劣悪さに恥じ入り、悔い改めた結果その世界を崩壊させる、と主張する人々として描かれている。彼らの制作者理解に対抗する中で、プロティノスにとって必要だった方策の一つは、制作者神話を文字通り解釈した際に必然的に伴われる「制作者の思案」を排しつつ、同時に魂にこの世界の制作に際して適切な位置付けを与え、その上で上位者としての真の制作者たる知性を置くことであった。すなわち、プロティノスが危惧していたのは、魂を制作者と同一視すること自体ではなく、思案を伴う制作者像を導入することだったと言えるだろう²²。

まずは、プロティノスが制作に関わる魂についての誤解を指摘し、修正する場面を確認する。例えば第 40 論攷「天について」では、既に触れたグノーシス派の語彙である魂の「思い直し」というアイデアを批判している。

さて、魂の思い直しについて、それが空論であることは既に示されている。その理由は、
(魂の) 管理は労苦も害悪も伴わないものだからである。

ἡ δὲ μετάνοια τῆς ψυχῆς ὅτι κενόν ἐστὶ δέδεκται, ὅτι ἄπρονος καὶ ἀβλαβῆς ἢ διοικήσις.
40(II.1) 4,33-34.

²⁰ 初期論攷の時点でプロティノスは世界靈魂に分割の作用を認めていた、という解釈については Majumdar(2008), 101 を参照。同様に、第 13 論攷における制作者の推論と世界靈魂による分割の問題については Dillon(1969)を参照。

²¹ 33(II.9),6.

²² ただし、制作者解釈に際してグノーシス派への対抗意識を強く読み込むこの Narbonne の見立ては、Chiaradonna(2015)による批判を考慮に入れて慎重に検討されるべきである。Chiaradonna は Narbonne の見解に異義を唱え、プロティノスの主眼はグノーシス派批判ではなく、むしろ同時代のペリパトス派だという提案を行う。この点はアフロディシアスのアレクサンドロスとの関係を追った D'Ancona(2009)の議論も参照のこと。しかしながら、Chiaradonna の指摘はプロティノスがグノーシス派への対抗を契機として原因論を再構築したと見る Narbonne の主張に向けられたものであり、新たな原因論のグノーシス派論駁としての有効性自体は認めている。グノーシス派論駁という文脈とは別に、撰理論として思案の問題を捉えた研究としては Noble&Powers(2015)が参考になる。

プロティノスはこのように、世界靈魂は労苦なく世界を管理する、と複数の論攷を跨いで繰り返し述べるが、この魂にとっての「労苦」の内実とは何であろうか。第6論攷「魂の肉体への降下」では以下のように述べられる。

そして、全体的かつ全体に属する魂は²³、上方にありつつ勞せずして、物体に相対する自身の部分をもって全体を秩序付けるのであるが、それは我々がそうであるように、推論によってそうするのではなく、むしろ技術が熟考しないように²⁴、知性によってそうするからである。

καὶ ἡ μὲν ὅλη καὶ ὅλου τῷ αὐτῆς μέρει τῷ πρὸς τὸ σῶμα τὸ ὅλον κοσμεῖ ὑπερέχουσα ἀπόνως, ὅτι μηδ' ἐκ λογισμοῦ, ὡς ἡμεῖς, ἀλλὰ νῶ ὡς ἡ τέχνη οὐ βουλεύεται[...]²⁵.

6(IV.8) 8,13-16.

ここから分かるように、「労苦」とは我々の魂との対比の上で用いられる語である。つまり、我々の魂に割り当てられるような推論能力を、制作に関わる世界靈魂が用いることはないのだと考えられている。推論は時間的プロセス及び部分への分割を含意するという点で、全体を対象とする直知に劣るものである。制作の順序において先立つ知性は、その「渾然一体」となった形相全体を分割することなく勞せずして世界靈魂を産出したのであり、推論を行わない世界靈魂もまた、真の制作者たる知性の内にあった全てのものを分割することなくそのまま受け継ぎ、下位のを秩序付けなければならない。つまり、プロティノスによる批判の要点は、世界の制作を「思案」されたものと見なし、制作者に順序立った推論を認める人々に向けられていることがわかる。

Noble&Powers が指摘するように、プロティノス以前のプラトン主義者は以上の思案に関わる点を問題視していなかった²⁶。何故なら、既に確認した通り、彼らの『ティマイオス』解釈が達成したのは、直知対象としてのアイデアを制作者に内在させること、そして人格的制作者を知性や魂原理へと置き換えることであり、これらの解釈傾向をとることと制作者の思案の過程を想定することは、何ら相矛盾するものではないからである。それではプロティノスにとって、それと同定されるのが魂原理であれ知性原理であれ、制作者に思案を伴わせることの問題点はどこにあるのだろうか。この点を追求することに、プロティノスが到達した『ティマイオス』解釈の独自性を見抜く手掛かりがあるだろう。従って引き続き、プロティノスが思案及び推論というプロセスを含む魂という制作者像を批判する場面を見てゆく。

²³ Fleet(2012)の解釈及び訳に従う。

²⁴ *Phy.* II.8,199b28 からの引用と推定される。この箇所では技術が熟考と縁遠いものとして理解されているが、推論との対立の上で知性と関連付けられていることから、ここでの主眼はあくまで（熟練の）技術が知性の作用に比されるかたちで行う推論を介さない行為であろう。

²⁵ 6(IV.8) 8,13-16.

²⁶ Noble&Powers(2015), 52-53.

というのも、(制作者としての魂は)世界を作ることから自身に対して何が生じると推論していただろうか。何故なら、「名誉を与えられんがため」と言うのは笑うべきことであり、(その魂を)この地の彫像作家たちに置き換えて考える人々のやり方であるから。またもし、(その魂の)制作が自然におけるものではなく、また(魂の)力能が制作するのでもなく、思案によって作るのだとしたら、如何にしてまさにこの世界を作るに至ったのか。

τί γὰρ ἂν ἑαυτῇ καὶ ἐλογίζετο γενέσθαι ἐκ τοῦ κοσμοποιῆσαι; γελοῖον γὰρ τὸ ἵνα τιμῶτο, καὶ μεταφερόντων ἀπὸ τῶν ἀγαλματοποιῶν τῶν ἐνταῦθα. ἐπεὶ καὶ εἰ διανοία ἐποίει καὶ μὴ ἐν τῇ φύσει ἦν τὸ ποιεῖν καὶ ἡ δύναμις ἢ ποιοῦσα ἦν, πῶς ἂν κόσμον τόνδε ἐποίησε;

33(II.9) 4,12-17.

ここからは、何らか外在的な目的を推論した結果制作を行う人間に模された制作者像に加え、思案の結果として現に成立しているこの可感的世界の制作をいわば「選択」した制作者像に対する批判が読み取られる。つまりプロティノスは、思案を伴う制作を、最善のものとして可感的世界を成立させる必然性を保証しないものと考えている。この点は、グノーシス派批判という特定の文脈ながら、先に言及した魂の「思い直し」と、その結果としての世界の崩壊という筋立てと符合するだろう。

また第31論攷「叡智的な美について」においても、同様の問題意識が確認される。そこでは、まず土、その次に水、というように、順番に対象を思量し(ἐπινοῆσαι)ながら行われる制作を否定した上で、以下のように述べられる。

しかし、そのような思量は不可能である—というのも、どこから(思量の対象が)未だかつて(それらを)見ていない者へと到来するだろうか。また、今現在工匠たちが手や道具を用いて行うように、別のものから(思量の対象や道具を)取ってきて作業するというのも不可能だったのである。というのも手も足も後なるものだから。さて残されたのは、あらゆるものが他のもの内にあるのだが、しかし中間には何も介在しないで、有の内では他のものに対し隣り合うことによって、いわば忽然とかのものの写しであり模像であるものが出現するという仕方である。直接そこからなのか、魂あるいはある種の魂が奉仕することによってなのかは差し当たりどちらでもよい。

ἀλλ' οὐτε ἡ ἐπίνοια δυνατὴ ἢ τοιαύτη -πόθεν γὰρ ἐπήλθεν οὐπώποτε ἑωρακότι; οὐτε ἐξ ἄλλου λαβόντι δυνατὸν ἦν ἐργάσασθαι, ὅπως νῦν οἱ δημιουργοὶ ποιοῦσι χερσὶ καὶ ὀργάνοις χρώμενοι ὕστερον γὰρ καὶ χεῖρες καὶ πόδες. λείπεται τοίνυν εἶναι μὲν πάντα ἐν ἄλλῳ, οὐδενὸς δὲ μεταξὺ ὄντος τῇ ἐν τῷ ὄντι πρὸς ἄλλο γειτονεῖα οἷον ἐξαίφνης ἀναφανῆναι ἴνδαλμα καὶ εἰκόνα ἐκείνου εἴτε αὐτόθεν εἴτε ψυχῆς

διακονησαμένης -διαφέρει γὰρ οὐδὲν ἐν τῷ παρόντι- ἢ ψυχῆς τινος.

31(V.8) 7,8-16.

ここにおいて、技術による制作モデルを拒否し、またこの世界を秩序付ける世界靈魂から推論能力を排除し、その上で上位者がこの可感的世界全体を無時間的かつ一挙に産出するというモデルへと転換させようというプロティノスの意図を明確に読み取ることが出来よう。この引用では、先に確認した手足や道具を用いる人格的制作者の否定とともに、制作者の思量に関わる問題点が同時に指摘されている。ここでの思量(ἐπίνοια)は、諸要素を逐次的に思い浮かべる思考プロセスとして描かれており、先に触れた思案や推論的思考とほぼ同一の内実を持つものと考えてよいと思われる。このような思考プロセスは、その対象を一挙に扱うことが出来ないため、「それまで知らなかったものを知る」という時間的な推移と変化を制作者の内に読み込むことに繋がる。従ってこの場合、知らなかった対象は結局のところ「別のところから取って」くることになり、中期プラトン主義者たちが目指した、アイデアを制作者に内在させるという試みは上手くいかないことになる。また、制作にあたって必要な要素を一挙に検討することが叶わないのだから、そこにはあらゆる選択をとる余地が残り、最善のものの制作を保証することも出来なくなるのである。

これらの問題点を踏まえ上の引用にて言及された、産むものと産み出されるものとの中間に何も介在させない仕方こそが、以下で検討する DAT なのである。これは、直近の第 33 論攷からの引用部にもある、思案を伴う制作と対立するかたちでの「自然における」制作、あるいは「力能」が行う制作とも密接に結びついている。次節では、この産出モデルを支えるプロティノスの DAT というアイディアを検討し、その図式が、これまでに指摘されたプラトン主義にとって伝統的と言える問題及びプロティノスの時代に新たに生まれた問題の両面を解決する道具立てとして機能する点を確認する。

第三節：DAT の諸規則とプロティノスにとっての利点

まずは Rutten(1956)と Lloyd(1990)に倣い、DAT の諸規則を確認する。根拠となるテキストは、第 7 論攷「如何にして第一者から第一者以降のものが生じたか、及び一について」に見出される。第 7 論攷の主題は一者とそれ以下のものとの間に認められる産出構造であるが、そこでプロティノスは、上位者が「留まり(μένειν)」を保ちつつ下位者を産む、という点を強調し、その過程を以下のように説明する。

しかし、如何にして、かのもの(一者)が留まりつつ(知性が)生じるというのか。一方は実体の活動であり、他方は各々の事物の実体から発した活動である(という仕方ですうなのだ)。つまり、実体の活動は各々それ自身であるが、実体から発したそれは、それ(実体)そのものとは異なるが、あらゆる当のものに必然的に伴われることとなる

活動である。

ἀλλὰ πῶς μένοντος ἐκείνου γίνεται; ἐνέργεια ἢ μὲν ἐστὶ τῆς οὐσίας, ἢ δ' ἐκ τῆς οὐσίας ἐκάστου· καὶ ἢ μὲν τῆς οὐσίας αὐτό ἐστὶν ἐνέργεια ἕκαστον, ἢ δὲ ἀπ' ἐκείνης, ἦν δεῖ παντὶ ἔπεσθαι ἐξ ἀνάγκης ἑτέραν οὐσαν αὐτοῦ·

7(V.4) 2,26-30.

プロティノスは冒頭の疑問文に応答するかたちで、二種類に区別された活動(ἐνέργεια)による説明を導入し、産むものを「実体の活動」、産み出されたものを「実体から発した活動」にそれぞれ当てはめる。この区別は、後に続く火の比喩により具体的なイメージを与えられる。

例えば、火に関しても、ある活動は火の実体を充足する熱であり、また他方の活動は、その火が自身の実体にとって本性的に備わった活動をするときに、それが火として留まる中で、そこから発して生じるものである。

οἷον καὶ ἐπὶ τοῦ πυρὸς ἢ μὲν τίς ἐστὶ συμπληροῦσα τὴν οὐσίαν θερμότης, ἢ δὲ ἀπ' ἐκείνης ἤδη γινομένη ἐνεργουῦντος ἐκείνου τὴν σύμφυτον τῇ οὐσίᾳ ἐν τῷ μένειν πῦρ.

7(V.4) 2,30-33.

すなわち、「実体の活動」に相当するものが火そのものの熱だとすれば、その火から放出された熱が「実体から発した活動」にあたる。その過程において、前者は火として留まりながら、本性的に自己に備わった活動を行っているとき、また前者から後者が生じることは、一つ前の引用にある通り「必然的に(ἐξ ἀνάγκης)」成立する事態なのだと考えられる。この比喩が有する説明機能について、その導入の経緯と利点を解明することが以降の課題となる。

「如何にして(πῶς)」とプロティノスが自問する通り、何かがある何かを産み出す場面を想定するとき、産出者の側が何らかの意味で「留まり」を保つ、という事態は一見して理解し難い。例えば「留まり」の語が不動性、非受動性を含意するのだとすれば、技術的制作であれ、動物の出産であれ、始動因の側にそれらを一切認めないことは想像し難いからである。この困難を自覚した上でプロティノスは火の比喩を持ち出し、火そのものの熱と放出された熱との因果関係が、以上の自問に対する回答として機能するのだと考えている。まずは、この火の比喩が含意するところを明らかにした上で、プロティノスにとっての「留まり」の意義を検討していきたい。

火と熱の關係に模される活動の二重性という概念装置が導入された経緯として、複数の研究がアリストテレスからの影響關係を指摘している²⁷。中でも、プロティノスはアリスト

²⁷ アリストテレス以外の著述を含めた DAT というアイディアの哲学史的源泉一般について

テレスが自然学分野において展開した図式を借用した、と見る向きは今なお検討に値するだろう²⁸。プロティノスの DAT に備わる独自性を検討するための足掛かりとして、以下では DAT の構想にヒントを与えたと考えられるアリストテレスの見解を概観したい。そもそもエネルゲイアの二重性というアイディアは、エネルゲイア概念自体の発明者であるアリストテレスの記述に見出されるものである。まずは『自然学』及び『魂について』で持ち出される例とその基本図式を整理しておこう。その説明対象となるのは、運動変化(κίνησις)一般に備わる構造である。

アリストテレスは『自然学』において、運動変化を自体的か付帯的かという点で区別し、更に前者を①自らによるか他のものによるか、②自然本性的か自然本性に反するか、という二つの観点を基準に四つに区分する²⁹。アリストテレスはこの内、事物が他のものにより自然本性的に動かされる仕方、例えば土が下方に、火が上方へ運動する仕方について、その原因を理解困難な対象として取り上げる³⁰。この場合、「他のもの」が如何なるものなのか不明瞭だからである。結論から言えば、アリストテレスはそのケースに該当する運動変化は、「可能にある性質であるもの、ある量のもの、もしくはある場所にあるもの」に当てはまり、当のもの自身の内にあるそのような原理(τὴν ἀρχὴν τὴν τοιαύτην ἐν αὐτῷ)によりもたらされると言う³¹。また不明瞭さの要因として「可能的(τὸ δυνάμει)」という言葉に備わる多義性を指摘し、現実態・可能態という語彙に備わる二重性を以下のようにまとめる。

学ぶ者(potentia prima)→知識ある者(actus prior=ἐξις³²)

||

知識ある者(potentia secunda)→知識を行使している者(actus secundus)

アリストテレスはこの図式の内後者の移行を取り上げ、*potentia secunda* から *actus secundus* へと至る際の可能性、いわば二番目の意味で可能にあることを、不明瞭とされた「他のものによる自然本性的な」運動変化の原因とする。場所的運動の例を考えてみよう。例えば土は自然本性に沿う場所、すなわち地にあることが現実的にあるということであり、そこにある限り静止している。他方で、土を持ち上げる外的力が働いた場合、その中空にある土は、可能的に地にあるということが出来るだろう。この意味で可能にあるということが、土が地に落ちるという事態の条件であり、原因である。

ては、Emilsson(2007), 52-68 の調査が詳しい。

²⁸ 例えば Rutten(1956), 101 は、「この理論はアリストテレスにおける起動の理論の巧妙な転換であり狡猾な歪曲である」と述べる。また Lloyd(1990), 99 は、DAT を「アリストテレスの自然学理論を非自然学の領域に置き換えたもの」と評価している。

²⁹ 自ら自然本性に反して運動する例は、人間が倒立しながら移動する場合。

³⁰ 他のものにより自然本性に反して運動する場合、「他のもの」は、例えば土を上方に投げ上げる腕に相当する。この時、その土は強制により(βία)動かされると言われる。

³¹ *Phy.* VIII.4,255a26-27.

³² *actus prior*=*potentia secunda* を ἐξις と交換可能とする点は Ross(1936), 695-696 に倣った。

アリストテレスはまた、上に示した知識ある者の図式を、自身以外のものへ運動変化をもたらす場合にも適用している³³。つまり、熱を持つものが必然的に近接する他のものへ熱を伝えるように、*potentia secunda* に至ったものは、障害要因が無い限り(ἐάν τι μὴ κωλύη)³⁴常に *actus secundus* としての働きを為し、更に他のものへ熱を伝えるのである。基本原則として、運動変化は動者(κινητικόν)と被動者(κινητόν)という二者間の作用・被作用として説明される。またアリストテレスは運動変化を場所、性質、量のカテゴリーに認めるが、それら全てに共通して、動者・被動者の対を現実態・可能態という対に置き換えて説明を行う。すなわち、「あらゆるものが作用を受けたり、動かされたりするのは、作用する能力があり、かつ現実態においてあるものによってである³⁵」。すなわち、現実態にあるということと、その当のもの以外の何かに対し能動的に働きかけることは、地続きの事象として理解されるのである。

以上を参考に、プロティノスの DAT というアイディアを自然というキーワードに即して検討していきたい。既に見たように、プロティノスが思案を伴う制作を批判する中でそれに対立する手立てとして想定するのが「自然における」制作である。プロティノスは「自然(φύσις)」という語を多義的に用いるが、この場合主眼となる自然概念は、可感的世界の成立過程を微視的に見るとき確認される世界霊魂の下位部分としての自然である。第 30 論攷「自然、観照、一者について」においてプロティノスは、自然が可感的世界を産み出す際のプロセスを描写している。そこでは、自然がそれ自体不動に留まりながら可感的世界を作り出す際の観照(θεωρία)という事態が説明される。

では、その自然は如何にして観照を得るのだろうか。ロゴスからそれを得るのではない。ただし、ここで私が「ロゴスから」と言うのは、自然が自身の内にあるものどもについて考察する、という意味でなのだが。それでは、(自然は)ある種の生命であり、ロゴスであり、制作する力能であるのに、何故(ロゴスからそうしないの)だろうか。「考察する」ということは、「(その対象を)まだ持っていない」ということを意味するからだろうか。いや、自然は(対象を)持っているのであり、また持っているという事実故に作りもするのである。従って、自然にとってあるということ(つまりその本質)は、「作る」ということであり、また自然として存在することは、作るものとしてあることと等しいのである。

πῶς δὲ αὐτὴ ἔχει θεωρίαν; τὴν μὲν δὴ ἐκ λόγου οὐκ ἔχει· λέγω δ' ἐκ λόγου τὸ σκοπεῖσθαι περὶ τῶν ἐν αὐτῇ. διὰ τί οὖν ζῶη τις οὐσα καὶ λόγος καὶ δύναμις ποιούσα; ἄρ' ὅτι τὸ σκοπεῖσθαι ἐστὶ τὸ μήπω ἔχειν; ἢ δὲ ἔχει, καὶ διὰ τοῦτο ὅτι ἔχει καὶ ποιεῖ. τὸ οὖν εἶναι αὐτῇ ὅ ἐστι τοῦτό ἐστι τὸ ποιεῖν αὐτῇ καὶ ὅσον ἐστὶ τοῦτό ἐστι

³³ *Phy.* VIII.4,255a21-.

³⁴ *Phy.* VIII.4,255b4 et al.

³⁵ *D.A.* II.5,417a18.

ここで「ロゴスから(ἐκ λόγου)」と言われるときのロゴスは、プロティノス自身が意識的に注記する通り、まだ持っていないものを「考察する」こと、つまり時間性を伴う推論的思考に関連していることが分かる。その上で、それに対立する自然的制作とは、既に制作にあたって必要なもの全てを自身の内に持ち合わせており、その持ち合わせているという事実故に制作する。それ故、自然として存在することそのものが、制作することと等しいのだと述べられる。

『自然学』の上掲箇所を産出の過程を含む DAT として再編成し、自然的制作の説明に導入することは、『ティマイオス』の再解釈を企てるプロティノスにとっての利点を持つと考えられる。一つは、制作、つまり DAT における産出に必然性を与えることが出来る点である。アリストテレスにとって、上述の区分における自ら動くものは、魂を持つが故に自身を静止させることもまた同時に可能である、という点で「自ら(ὑφ'αὐτῶν)」と形容される資格を持つ³⁶。一方で、他のものにより動くものは別様にあることを許されず、持ち上げた石から手を離せば必ず地面に向かって落下するように、常に(ἀεὶ)、即座に(εὐθύς)その働きを発揮する³⁷。これは下位者の産出が「必然的に」伴われるとするプロティノスの見解に対応するだろう。またこの点は、前節で検討した推論過程が想定される技術者モデルの制作者、言い換えれば「制作しないことも可能であった制作者」の排除を試みるプロティノスの方針に親和性を持つと言える。もう一つは、アリストテレス自身が上述の例において運動するものの中に運動の原理を認めたように、産出にあたって外部に位置する始動因を用意することなく、むしろ産出者に内在させることが出来る点である。この点は、技術者モデルをとる制作の説明から手足、道具及び思考の対象としてのアイデアという独立した原理の数を削減した上で、一つの知性原理への還元を試みるプロティノスの企図に符合すると言えるだろう³⁸。

³⁶ *Phy.* VIII.4,255a5-.

³⁷ *Phy.* VIII.4,255a34, b10 et al.

³⁸ ここで、本稿では扱いきれないいくつかの問題点を指摘しておこう。一つは質料の作出に関わる問題である。『ティマイオス』において、プラトンはアイデアに対するカオス状態の受容体(ὑποδοχή, τιθήνη)を措定するが、その起源については何も語らない。一方プロティノスは、受容体に相当する質料についても、その原因を制作者に帰属させている(質料を発出の系列に含めるか否かに関する決定的な研究としては、O'Brien(1991)を参照のこと)。すなわち、そこには質料の作出及び質料に対する形相の付与という論理的に区別される段階が認められるのである。本稿の範囲内で質料の作出という問題自体に立ち入ることは出来ない。また、DAT の諸規則は、一者に始まる発出の全系列に適用されるものであり、可感界の生成も例外ではない。既に言及した通り、プロティノスは知性原理を真の意味での制作者と見なすが、発出の過程を微視的に検討する際には、魂あるいは自然といった知性以下の諸原理を制作者と見なした上で議論を行うため、一見論述に揺らぎがあるように見える。本稿は発出のあらゆる段階に共通する原理としての DAT を検討し、その内特殊な場面としての可感的世界の成立過程を取り上げた。

プロティノスが DAT を語る際、上位者の「留まり」を強調することには、ここまでで確認してきた制作者解釈の問題点を修正する意図があったのだと推定できる。すなわち、プロティノスにとっての制作者たる知性は全てを内に含み込んでおり、制作にあたって自身の外部に存する原理を一切用いることはなく、またその過程において何らの推論的段階をも想定しない、すなわち一切の変化を被らないという点で「留まり」を見せるのである。その一方で、知性は自己自身に留まりつつ活動を行い、その活動の必然的な帰結として下位者、つまり新たな活動を産出する。このように、制作の主体が自己以外に何も必要とせず単独で新たな存在階層を産み出すというプロティノスのエネルギー論は、その内実に即して「二重の自己展開活動理論」と呼ばれ得るだろう。

結

『ティマイオス』の制作者解釈においてプロティノスが採った方策は、制作者の役割を知性的原理(*voũς*)に担わせることである。つまり、『ティマイオス』が制作者とアイデアを別個の原理として措定するのに対し、プロティノスは両者の役割を知性原理へと還元した上で、そこからの必然的産出プロセスに従うものとして以下に続く諸原理、そして可感的世界の成立を説明した。この『ティマイオス』解釈を巡る転換に伴い、プロティノスは人格神の如き制作者を可感的世界の作出因として持ち出すことなく、むしろ可知的なアイデアが可感的世界の原因となるような仕方を考察することとなった。プロティノスはこの問いを追求するにあたって、DAT による説明を効果的に持ち出している。制作者とアイデアを一体化させ、一つの原理へと集約するやり方は中期プラトン主義の時点で既に見られるものであるが、その内実はプロティノスにおいて修正を加えられる。プロティノスが目指したのは、彼以前のやり方では不徹底だったと思われる、制作者像に思案が入り込む余地を完全に排除することである。このことは、制作者が可知的世界を構成する全てを一挙に持つというあり方を可能にし、制作者とアイデアの一体化を完全な仕方で実現するものである。

ここまでで、アリストテレスの図式を改変した DAT の構造を確認し、『ティマイオス』解釈上の論争において有効と言える論点を抽出することが出来たと思う。下位者の産出という点に定位すれば、プロティノスにとって最も重要な関心事であり、また『ティマイオス』の記述からは導き出すことの出来ない「一から多への展開」すなわち発出という新奇かつ独自の論点を支えるものである。他方で、新プラトン主義的と見なされる発出の構想の誕生は、『ティマイオス』を中心としたテキスト解釈の蓄積を下敷きとして成立したのであり、むしろ各論者が「正確な」読解を目指した結果なのだという事を見過ごしてはならないだろう。

以上、思案を伴う制作者像に対するプロティノスの応答を、彼独自の批判的論点として取り上げてきた。しかしながら、プラトン直後の世代の時点で既に議論の対象となっていた技術的制作を行う制作者像についても、プロティノスはその議論の蓄積を無批判に受け入れるのではなく、むしろ独自の視野から問題点を指摘している。次章以降で扱われる問題群へ

と接続するために、その問題意識を確認しておこう。

さて、この（自然による制作という）場面においては、手も足も必要なく、また生まれついたものであろうが外部から付け加わったものであろうが、道具も必要ないが、質料は必要であり、（自然がそれを）形相の内へと作り込むことは、恐らく万人にとって明らかなことだろう。しかし、自然的制作からは、梃子の働きもまた取り去らなければならない。何故なら、どのような押す動作が、あるいはどんな梃子が、多彩な色合いと多様な形態を作るというのか。実際、人々は蠟細工師たちへと目を向け、自然の制作とは彼らが行うもののように考えたのだが、その蠟細工師たちは作る対象へ外部から色合いを持ち込むことなしに、色合いを作ることは出来ないのである。

ὅτι μὲν οὖν οὔτε χεῖρες ἐνταῦθα οὔτε πόδες οὔτε τι ὄργανον ἐπακτὸν ἢ σύμφυτον, ὕλης δὲ δεῖ [ἐφ' ἧς ποιήσει³⁹] καὶ⁴⁰ ἐν εἴδει ποιεῖ, παντί που δῆλον. δεῖ δὲ καὶ τὸ μοχλεύειν ἀφελεῖν ἐκ τῆς φυσικῆς ποιήσεως. ποῖος γὰρ ὠθισμὸς ἢ τίς μοχλεία χρώματα ποικίλα καὶ παντοδαπὰ καὶ σχήματα ποιεῖ; ἐπεὶ οὐδὲ οἱ κηροπλάσται, εἰς οὓς δὴ καὶ βλέποντες ᾤθησαν τὴν τῆς φύσεως δημιουργίαν τοιαύτην εἶναι, χρώματα δύνανται ποιεῖν μὴ χρώματα ἀλλαχόθεν ἐπάγοντες οἷς ποιοῦσιν.

30(III.8) 2,1-9.

この箇所においても、プロティノスは改めて技術的制作モデルの問題点を指摘する。ここで重要なのは、制作と質料の関係である。ここでプロティノスは、自然的制作のプロセスを正しく理解せず、蠟細工師の仕事との類比の上で考え誤解した人々を批判しているが、その中で示されるのは、技術的制作の限界である。つまり、技術的制作はその材料としての質料の存在を前提として行われるが、技術がその材料へと及ぼし得る影響は限定的なのである。プロティノスが持ち出す蠟細工師の例を用いるならば、蠟細工師は蠟という材料に対して一定の形態を与えることが出来るのみで、蠟はあくまで蠟に留まり、そこに新たな色合いが付与されることはない。他方の自然的制作は、作り出すものをその内に持っており、その色合いさえも与えることが出来るものとして理解されている。プロティノスにとって、この色合い、形態の多彩さは、イデア的實在が持つ多彩さを反映したものとして理解される。この蠟細工師の例との相違を念頭に置いて、プロティノスはどのような質料を想定し、それがイデア的實在とどのように関わるのか、そしてその結果として成立する可感的事物は如何なる構造を持つことになるのか、という点を追求してゆくことが次章以降の主眼となる。

³⁹ グロスと判断する H-S³ の削除案を採る。

⁴⁰ H-S³ の καθ' ἧν への修正案を採らず、写本の καὶ を読む。

第二章

プロティノスの擬似質料・形相論

序

序章において触れた通り、近年新プラトン主義的思想を扱う研究領域において、「自然学」分野への関心が高まりを見せている⁴¹。前世紀の研究史は、同思想に特徴的な善一者、神秘的合一の教義、そこに後続する知性論、魂論の考察に注力してきた一方で、可感的世界の事象については、その位置づけを相対的に軽視してきたと言わざるを得ない⁴²。ただし、この研究史における不均衡の原因は、各研究者の問題関心の偏りのみに帰されるべきではなく、プラトン主義に内在するイデア的・可知的実在性と可感の実体に備わる存在性の対立に起因する側面もまた考慮されなければならない。つまり、プラトン主義的世界観における可感の実体の存在性は自立的でなく、相対的に希薄なものであり、それ故に、それらを根拠づける可知的実体に関する記述の方に重きが置かれることはある意味で当然だとも言えよう。しかしながら、そうだといい可感の実体がとる副次的なあり方は、プラトン主義を標榜する哲学者にとって考察に値せず、完全に切り捨てられて然るべきものだろうか。答えは否である。前世紀終わりごろから増加傾向にある「自然学」を扱った一連の研究は、上のような偏りを持つ研究史に対する自覚的な反省を背景としており、そこでは新プラトン主義における「自然学」の位置づけを積極的に重要視する潮流が形成されている。

本章の目的は、上記の研究状況を背景に、プロティノスが独自の仕方で展開した質料・形相論の内実を分析し、彼独自の可感の実体論、つまり物体論が有する哲学的意義をポジティブな仕方で問い直すことにある。実体(οὐσία)の分析項として質料・形相の一对を導入したのは他ならぬアリストテレスであるが、その語彙をプラトン主義に適用しつつ展開されたプロティノスの物体論は、彼以前の中期プラトン主義者達のものとは一線を画し、また同時代のペリパトス派のものとも異なっている。Igalは他に先駆け、プロティノスが主張するこの可感の実体論の特異性に着目し、そこに「擬似質料・形相論(pseudohilomorfismo)」の名を与えた⁴³。その特殊性はつまるところただ一点、すなわち、物体として存在する可感の実体において質料・形相間の実質的な相互作用はない、と見なすことに集約されよう。言い換えれば、プロティノスは特定の物体に関係する「質料内形相」から実体性を排除し、その結果

⁴¹ 例えば、新プラトン主義における自然学・自然哲学というテーマに特化しつつ今世紀に編まれた論集だけを見ても、Wagner (2002), Chiaradonna&Trabattoni(2009), Wilberding&Horn(2012)が出版されている。

⁴² Chiaradonna&Trabattoni(2009)中の Introduction にまとめられた研究史概観を参照。

⁴³ Igal(1982), LXII-LXXI の Introducción General 45-55, VI. LA MATERIA を参照。

として、形相と質料との複合がアリストテレス的実体を形成するという説を否定するのである。ただ、このように、形相が可感的実体を直接的な仕方で根拠づけることはないとする場合、「特定の物体が存在する」という事態の成立そのものが危ぶまれ、結局プラトン主義における可感的実体は茫漠とした非存在性へと飲み込まれるのではないか、との疑念が生じるかもしれない。先ずは、プロティノス自身がそう考えていないことを示すため、アリストテレスとは異なった仕方で構想された擬似質料・形相論による説明を分析し、プロティノスにとっての「質料内形相」に相当する要素の内実を明らかにすることが作業の核となる（第一、二節）。

上述の存在性格を持つプロティノスの可感的実体は、当然全てのプラトン主義者が真の実体と見なすイデア的、すなわち可知的実体とは異なるあり方をとる。正確に言えば、プロティノスの可感的実体は、真の意味での「実体」ではない。この可感的実体に対する「実体」という名付けについて、それはあくまで真の実体たる可知的実体との関係において同名異義的な仕方で(ὁμωνύμως)行われるに過ぎない、と見なすのがプロティノス自身の見解である。つまり、プロティノスにとっての可感的実体を持つ実体性は、あくまで可知的実体と名を共有するのみで、その内実は全く異なっている。ただし、この両者は全く無関係なのではない。プロティノスがプラトン主義を貫徹する以上、これら二つの領域は同名異義的なあり方をとる一方で、そこには先なるものが後なるものを根拠づける、という分有関係が見出されなければならないのである。従って、プロティノスの擬似質料・形相論は、理論的にその前段階に位置する分有論を補完するものとなる必要がある。この点を踏まえれば、続いて要求されるのは、二種類の「実体」は同名異義的でありつつ連続する、という即座には理解しがたい事態を説明することであろう。主題となるのは可感的実体とそれを産出するロゴスとの関係である（第三節）。

第三節までの分析を経た後に次いで、可感的実体の認識という場面に即し、以上の擬似質料・形相論が持つ哲学的意義を検討したい。可感的実体に相対する我々は、そこから何を見て取っているのだろうか。プロティノスによれば、同一の事物に対してであっても、認識主体によってその帰結は異なる。この理解の相違を説明しかつ乗り越えるためには、可感的実体がどのように構成されているかを知る必要がある。ここでは、プラトン主義者が志向するイデア的実体の認識へ通ずる道として、プロティノスの可感的実体論は彼の哲学における重要な位置づけを持つということが示される（第四節）。

以上を通じて、擬似質料・形相論というかたちで示されるプロティノスの可感的実体論の意義が肯定的に評価されることになれば、本章の目的は達成されたことになる。

第一節：ペリパトス派の実体論の受容と変容

全てのプラトン主義者にとり、可感的実体の成立を問うにあたって権威となるテキストは紛れもなくプラトンの『ティマイオス』である。実際、プロティノスも制作者、イデア、

受容体といった説明項を受け継ぎつつ、『エンネアデス』中で幾度となくそれらを流用している。ただし、Dillonの見方に従えば、プロティノス以前の中期プラトン主義者は、非物体から物体が如何に成立するかという難問を取り上げることはなく、『ティマイオス』の記述に従い、幾何学的原子、所謂プラトンの三角形による説明を疑問視することなく受け入れている⁴⁴。その一方で、彼らの記述の中には、物体の成立に寄与するイデア・形相的要素を別の角度から問うた形跡も同時に確認される。そこには明らかに、『ティマイオス』からは抽出出来ない要素、つまり質料・形相というアリストテレス由来の道具立てが取り入れられているのである。

ところが、『ティマイオス』の図式に質料・形相論を導入したとして、質料は受容体と同一視される一方で、その受容体が受け入れるはずの形相に対応する説明項が何であるのかは判然としない。この類の問題もまた、中期プラトン主義の時点で既に顕在化している。この点を受けて、例えばアルキノオスは、形相に関して更に分類を設け、離在形相(χωριστόν εἶδος)と質料内形相(ἐνυλον εἶδος)という区別を立てた。後者については更に、「質料から切り離し得ないものとして質料のもとにある形相(τὰ εἶδη τὰ ἐπὶ τῇ ὕλῃ ἀχώριστα ὄντα τῆς ὕλης)⁴⁵」がそれに伴われる質料とともに物体を形成する、と見なされており、この説明は、それが明らかにアリストテレスの影響下に生まれた分類であることを示唆する。しかしながら、それら二種類の形相間の関係について、彼らの記述の内に詳細な説明を見出すことは出来ない⁴⁶。

彼らがこの問題点に対し自覚的であったか否かは措いておくにしても、以上のような中期プラトン主義者の工夫の跡を辿れば、イデアとの関連において質料内形相、つまり可感の実体の成立に関わる形相をどのように位置づけるかは、ペリパトス派に接近したプラトン主義が抱える難問の一つであったことが確認されるのである。

プロティノスは上記の不可離的な質料内形相というアイディアに対し、その批判対象が誰の見解であるかを明らかにしはしないものの、明らかに否定的な立場をとっている。更に、『ティマイオス』50c4-5では、受容体の「中に入ってきたり、そこから出ていったりするものは、有るものの模像である(τὰ δὲ εἰσιόντα καὶ ἐξιόντα τῶν ὄντων ἀεὶ μιμήματα)」ということが明示されているが、この記述についての注釈という体裁をとりつつ、プロティノスは第26論攷「非物的なものの非受動性について」でこう述べている。

そして「中に入ってきたり、そこから出ていったりするものは、有るものの模像」であり、無形の影像へと入り込んだ影像、すなわち、質料が無形であるが故に可視的なものとなっている影像であって、それは質料に作用を及ぼしているように見えるけれども、

⁴⁴ Dillon(1977), 48.

⁴⁵ *Didaskalikos* 155,40-41.

⁴⁶ *Didaskalikos* 166,2-5. 「あらゆる物体は、質料とそれに伴う形相とから、いわばそれらが一対となって結合したものであるから。そして、まさにそれが、なにか容易には言い表しがたい仕方できまざまなイデアに似るのであり、それらを分有するのである。」

実際には何らの作用も及ぼしていないのである。

τὰ δὲ εἰσιόντα καὶ ἐξιόντα τῶν ὄντων μιμήματα καὶ εἰδῶλα εἰς εἰδῶλον ἄμορφον
καὶ διὰ τὸ ἄμορφον αὐτῆς ἐνορώμενα ποιεῖν μὲν δοκεῖ εἰς αὐτήν, ποιεῖ δὲ οὐδέν·

26(III.6) 7,27-30.

ここでは『ティマイオス』に従い、形相、つまりイデアに由来する模像が、受容体としての質料に出入りすることは認められている。ただし、プラトン自身が「出入り」という物理的、空間的な語彙を用いている一方で、プロティノスはここで明確に両者の相互作用を否定している。以上のような事態を、プロティノスは水や鏡に映った像の比喩を用いて巧みに説明する。すなわち、像を反射する媒体としての水、鏡は、それ自体が転化することなく、可視的影像を観察者に提供する。また、そこに映るはずの当のものを他のものに入れ替えれば、影像の方にもそれに対応した移り変わりが生ずる。このように、プロティノスの構想する質料は、それ自体が無性質、無形、非受動であり、それ自体は変化することなく相対する形相を映し出すのみである。従って、プロティノスにとっては、可感的実体が成立するにあたっての条件である質料及び形相の間に必然的結びつきはない。だからこそ、「それが伝えるものはみな偽り⁴⁷」なのである。

このように、第 26 論攷の説明は当時流布していたと思われる分有論とプロティノス自身の考えとの差異を確認できる点で示唆的であるが、他方で、質料が有する非受動性に定位して語られた側面が大きく、またその非受動性という表象し難い事態を言い表すための比喩的な表現が用いられるに留まっている。我々の関心はその質料に関係する限りのイデアの模像なのだから、ここではプロティノスが、模像としての形相がイデアに由来することを認めつつ、「イデア・形相は質料と混じり合い、影響を及ぼす」というタイプの質料内形相の図式を拒否していることだけを確認し、質料の非受動性そのものが孕む問題点については必要な限りで参照するに留め、次章以降の検討課題とする。

さて、ここまでで確認したプロティノスの形相観は、彼以前のプラトン主義内部で形成された既存の分有論を修正する役目を担っていると同時に、可感的実体を構成する要素、すなわち形相と質料を互いに不可離のものと見なすアリストテレスの説明に対するアンチテーゼという側面をも有している。つまり、先に引いた形相と質料との間の実質的な結びつきを否定する記述は、アリストテレスが「これなる何か(τόδε τι)」としての可感的実体に与えた実在性をそこから剥ぎ取るための戦略へと接続するものである。この論点は、第 25 論攷「可能的なものと現実的なものについて」において、可能態・現実態というアリストテレス由来の枠組みを相手取り、その説明項を部分的に採用しつつ展開されている。

まず問題とされているのは、質料とは現実的に何かであるのか否かである。もし現実的に何か(例えば、青銅)であるならば、その場合の質料は可能的に別の何か(例えば、彫像)でもあることになる。これは、ペリパトス派により可能態から現実態への移行として説明さ

⁴⁷ 26(III.6) 7,21.

れるモデル、つまり、特定の基体として存続する質料に、属性が付加されるという連続転化モデルである。質料自体の転化を容認しないプロティノスは、同様の事態をどのように説明するだろうか。例えば Corrigan は、プロティノスの物体論の形成過程に関し、紀元後 2 世紀のペリパトス派哲学者、アフロディシアスのアレクサンドロスからの影響を大きく見積もり、その結果、プロティノスにおいても質料・形相間にある種の結びつきを見出し、上述の相対性を持つ可能態の存在を想定した。すなわち、アレクサンドロスも無性質(ἀποιος)かつ無形(ἀμορφος, ἀνείδεος, ἀσχημάτιστος)の質料を想定したことが知られているが⁴⁸、アレクサンドロスはこの質料自体も転化の主体と考えている。Corrigan は、プロティノスが目論んでいたのは、このペリパトス派的第一質料の導入だと見なすのである⁴⁹。ただ、以下の一節を見てみよう。

従って、質料は可能的に何かであるものではなく、むしろ可能的に全てである。ただし、それはそれ自体では何ものでもなく、ただ質料としてあるもので、現実的なものでもない。

τὸ τοίνυν δυνάμει οὐ τι, ἀλλὰ δυνάμει πάντα· μηδὲν δὲ ὄν καθ' αὐτό, ἀλλ' ὅ ἐστιν ὕλη ὄν, οὐδ' ἐνεργεία ἐστίν.

25(II.5) 5,5-7.

ここでは、先に引いた第 26 論攷にて扱われる質料自体の非受動性という主題が、異なる観点から語られている。つまり、ここで質料が現実的なものでないと言われるのは、プロティノスにとっての質料は彫像との関係における青銅のような実体を意味しない。つまり、いかなる可感的実体においても、その質料という語は転化の埒外にある非受動的質料を指す。従って、プロティノスの可感的実体(彫像)には、近接質料(青銅)という意味で対応する可能態は存在しない。転化を説明するのは、質料に相対する形相の入れ替わりという図式である⁵⁰。故に、あくまで現実的な物体がまた別の現実的な物体へと転化するのみであり、そこにはアリストテレスが可能態との対置において現実態に与えた主導性は見出されないのである。

同様の論点に基づき、Arruzza は第 25、26 論攷におけるプロティノスの企てはむしろアリストテレス批判であると考え、上記の Corrigan の論を批判している⁵¹。また、Linguiti は、プロティノスが物体性(σωματότης)もまた形相であると述べている点に注目し、質料と物体

⁴⁸ 例えば、『魂について』3,26-4,4 や『問題集』II.3,49,30-31 を参照。

⁴⁹ Corrigan(1996), 111-116.

⁵⁰ 26(III.6) 11,11-12. Kalligas(2014), 574 によれば、この形相の入れ替わりというアイデアは、後の注釈者達により「場所を巡る争い(μάχη περὶ τῶν τόπων)」と呼ばれ、プロティノスの特異な教義として伝承されることになるものである。

⁵¹ Arruzza(2011), 24-57 (esp. 35-36).

間のステータスの格差を指摘することで、別の角度から Corrigan を批判している⁵²。Narbonne は以上の点に着目し、アリストテレスにとっては性質カテゴリーにおける転化と理解される事象が、プロティノスにとっては全て実体カテゴリーにおける転化として説明されると考えた⁵³。Narbonne の極端な主張に対する Arruzza の異論も存在するが⁵⁴、いずれにせよプロティノスは、特定の可感的実体の内で連続的に移行する可能態・現実態を見出し、それにより転化を説明するアリストテレス的な意味での本質主義を採用していない、という点が重要である。

上記の解釈を導入することにより、プロティノスの可感的実体は、アリストテレスが考えたような質料・形相間の強固な結びつきから解放されたことになる。他方で、プロティノスがアリストテレスの実体論を批判した結果辿り着いた可感的実体像は、以上のように理解される限り、流動性の内に彷徨う曖昧模糊とした存在様態をとるものとして理解されるようにも思われる。その点を検討するために、以下ではプロティノスの形相観をまた別の角度から眺めてみることにする。

第二節：プロティノスにとっての可感的実体、実体性と性質の関係

結局のところ、プロティノスにとって質料に直接相対する「形相」とは何であるのか。結論から言えば、それは性質の束である。つまり、プロティノスが構想する可感的実体とは「諸性質と質料からなる何らかの集塊(συμφόρησις τις ποιότητων καὶ ὕλης)⁵⁵」なのだ。以下で確認される通り、これは形相の存在様態に関してプロティノスが見解を変更した末の、いわば最終結論だと考えられる（以降、語用上での混乱を防ぐため、プロティノスが構想するかたちで可感的実体に関わる形相を、「P-形相」と呼ぶことにする。ただし、以下の議論では、その内実に性質以外の要素が入り込むか否かが争点となるため、注意されたい）。本節では、プロティノスが最終的に「性質の束」説へと至るまでの道筋を辿りたい。

ただし、この規定は直観に反する側面を多く持ち、更なる疑念を呼び起こすことが予想される。例えば、既に見た通り、プロティノスの質料はいかなる転化も受け入れないのだから、物体、つまり三次元性を伴った嵩としてのあり方には寄与しないのではないか。それ故、P-形相と質料が集合したところでそこに物体は成立しないのではないかと。この点については第四章の検討課題とし、本章ではプロティノスの可感的実体は我々の直観に沿うかたちでの可触性や可視性を持つ物体である、と理解した上で、以降の議論を進める。

目下の議論に関わる疑問としては、諸性質が織り成すある種の実体性とはいかなるものが問われなければならない。すなわち、ある可感的実体を構成する諸性質の内に、何らか

⁵² Linguiti(2007), 116-117.

⁵³ Narbonne(1998), 79.

⁵⁴ Arruzza(2011), 38-45.

⁵⁵ 44(VI.3) 8,19-20.

その事物の実体性を確保するものはあるのか否か、である。これを特定できない限りは、やはりプロティノスの可感的実体、延いては可感的世界の全体は、流動のうねりそのものとなってしまう、P-形相はその一場面を瞬間的に描いたものに過ぎないこととなる。ソクラテスを構成する P-形相が入れ替わった次の瞬間に、ソクラテスは馬となってしまうようなことがあるのだろうか。

一旦プロティノスの特異なアイディアを離れ、先ずは哲学史の常識に近い路線から考えてみることにしよう。例えば、我々が「ソクラテスとは何であるか」を人に問うたとする。その相手は「人間である」と答えるであろう。この答えが観察者により異なるという事態は、まず想定から省かれてよい。そうだとすれば、そのソクラテスは、何かしら「人間である」ことを保証する要素を持ち合わせていなければならないことになる。ここまでについては、プラトンもアリストテレスも、少なくとも形式上は同じ路線を辿っている。その上で、前者はそれを分有の対象として、後者は内在形相として説明したのだと大まかに理解しておきたい。そしてプラトン主義の内部ではこれら二つのアイディアが接近を見せながら、結局その関係性に関する明瞭な説明は果たされなかったという点については、先に見たアルキノオスの例において既に確認した。

ただし、プラトンとアリストテレスが残した記述のみからは満足な説明を引き出すことが出来ず、後継者が独自の考察を進めていくという傾向は、プラトン派に限った話ではない。ペリパトス派内部にも、形相のステータスを巡る論争の形跡が見出されるのである。本章の主旨に沿う限りで、プロティノスの時代に至るまでの論争状況を跡付けておこう。ここで問題となるのは、『カテゴリー論』5,2a11-13においてアリストテレスが第一義的な実体の条件として持ち出す二つの規定である。そこでは、①いかなる基体に対する述語の位置も占めず(μήτε καθ' ὑποκειμένου τινός λέγεται)、②いかなる基体の内にもない(μήτε ἐν ὑποκειμένη τινί ἐστιν)、という条件を満たすものが、そのような実体であると述べられる。この規定は、所謂第二実体の位置付けを巡って、ペリパトス派内部での論争を引き起こす種となった。アリストテレス亡き後の解釈傾向を部分的に確認しておこう。

『カテゴリー論』と『形而上学』Z巻の記述を突き合わせれば、実体の候補は三つある。すなわち、質料、形相、そしてその両者からなる複合体(σύνθετον)である。紀元前1世紀のロドスのアンドロニコス及びその弟子シドンのポエトスらは、「ソクラテスは人間である」と述べる場合の述語、つまり第二実体は基体の内にあるので、実体の規定を満たさないと考えた⁵⁶。その結果、規定を満たす質料と複合体が実体と見なされ、形相は実体に付随する性質的なものと理解されるのである。これは、Rashed が「『カテゴリー論』中心主義者(Catégories-centristes)」と呼ぶ派閥である⁵⁷。

この解釈伝統における転機は、アレクサンドロスの登場である。アレクサンドロスは彼以前の『カテゴリー論』中心主義に対し、形相が有する実体性を主張する。『カテゴリー論』

⁵⁶ 例えばシンプリキオス『カテゴリー論注解』78,4-20における報告を参照。

⁵⁷ Rashed(2007), 42. 本章が触れる限りのペリパトス派内論争史については、同書の第1章にかなりの部分を負っている。

中心主義者達が形相こそが実体であると述べるにあたって抵触すると見なした規定は、上記の②であった。アレクサンドロスは『カテゴリー論』における別の条件付けを加味し、彼らの指摘を回避する。『カテゴリー論』1,1a24-25では、③「基体の内にある」とは「何らかのものの中に、部分としてではなく帰属し、またそれがその内にある当のものから離れてあることが不可能(ἐν τινι μὴ ὡς μέρος ὑπάρχον ἀδύνατον χωρὶς εἶναι τοῦ ἐν ᾧ ἐστίν)」なものあり方を指すとされる⁵⁸。裏を返せば、「部分として帰属する」ような要素は例外的に「基体の内にはない」ことになり、実体としての要件を満たすのである。アレクサンドロスはこの場合の「部分」を、単に全体に対する一部分を意味するのではなく、ある実体の定義に含まれるという意味での部分であると解釈した。つまり、この部分を欠いては、ある実体はその実体たり得ないことになる。アレクサンドロスは、このような部分が実体を充足(συμπληροῦν)し、完成させる(συντελεεῖν)のだと表現した⁵⁹。例えば、「人間であること」は「ソクラテス」にとっての充足因子であり、この限りでは、「ソクラテスは人間である」という表現は事実上の同語反復と見なされる。それ故、この場合の述語の位置を占めるのは主語と同一の内容なので、①の規定もクリアすることが出来る⁶⁰。

プロティノスもまた実体一般を論ずる上で、上記の規定の存在を念頭に置いていることが確認される⁶¹。そしてアレクサンドロス同様、プロティノスも可感的実体が有する限りの実体性を支える部分のことを充足因子(συμπληρωτικόν)と呼んだ⁶²。この意味では、アレクサンドロスは『カテゴリー論』における実体の規定を部分的に修正しつつ、形相を実体の候補として強く推すにあたり、プロティノスの先鞭を付けていたことになる。つまり、形相が単なる性質の寄せ集めへと格下げされてしまう可能性への危惧は、ある意味でアレクサンドロスとプロティノスに共通している。そして、直接的な影響関係の有無に関する議論は本稿にて扱いきれないものの、少なくとも彼らの間で形相の実体性を確保する際の語彙は共有されていたことが見て取られるのである⁶³。

さて、アレクサンドロスは以上に概観した仕方でペリパトス派の立場から形相の実体性を擁護したが、プロティノスにはまだ課題が残っている。すなわち、P-形相を構成する要素の内に、性質かつ充足因子と言えるものが見出されるか否かが新たな難問として残るのである。諸性質の間に区別を設けるというアイディア自体はアリストテレスその人が導入し

⁵⁸ この付加的条件は、「基体の内にある」という事態を理解する上で注意すべき論点として、『カテゴリー論』5,3a30-33にて再度言及される。

⁵⁹ ただし、シンプリキオスは『カテゴリー論注解』48.2-11にて、紀元前1世紀頃に活動したと推定されるルキウスなる論者が、『カテゴリー論』の記述を批判しつつ既に充足因子というアイディアに言及していたことを報告している。この点については、Ellis(1994)を参照。『カテゴリー論』解釈論争に火をつけたとされるルキウス及びその弟子筋と推定されるニコストラトスについては、Griffin(2015), 103-126が問題の輪郭を与えてくれる。

⁶⁰ 例えば『問題集』I.8, II.28を参照。

⁶¹ 44(VI.3) 5,7-10.

⁶² 例えば43(VI.2) 14,15., 44(VI.3) 4,20.

⁶³ Chiaradonna(2008), 380-389は、『エンネアデス』におけるこの論点を、アレクサンドロスとプロティノスの間に見出される数少ない明瞭な並行箇所の一例として取り上げている。

たものであるが、それに関連するプロティノスの充足因子についての議論は、ここまでに紹介した文脈を踏まえて検討されるべきであろう。

以上の点について、プロティノスの記述には揺らぎが見られる。このことは、研究史において多数の指摘が為されてきた。問題点を明確にしよう。プロティノスの論攷は、執筆時期に対応して第一期から第三期までの三グループに区分されるが、この内第一期に属する第 17 論攷「実体について、あるいは性質について」及び第二期に属する第 43,44 論攷「存在の類について、一第二、三編一」における性質論が一致しないのである。先ずは前者における問題提起を見ていく。

従って、まずかの問題を探索せねばならない。すなわち、同じものが、あるときは単なる性質となり、また別のあるときには実体を充足する要素（充足因子）となるのだ、と想定すべきか否かを。性質が実体を充足するというところに愛想をつかすことなく。それはむしろ、特定の性質の実体を（充足するのだ）⁶⁴。

πρῶτον οὖν ἐκεῖνο ζητητέον, εἰ τὸ αὐτὸ θετέον ὅτι μὲν ποιὸν μόνον, ὅτι δὲ συμπληροῦν οὐσίαν, οὐ δυσχεράναντας ποιὸν συμπληρωτικὸν οὐσίας εἶναι. ἀλλὰ ποιᾶς μᾶλλον οὐσίας.

17(II.6) 2,2-5.

この性質に関する二区分は、アリストテレスが『形而上学』Δ 卷 14 章で提示した分類を基にしている。ただ、当該箇所におけるアリストテレスの記述は曖昧さを残しているため、プロティノスは可感的実体との関係においてこの区分自体を再検討するのである。西村の整理に従えば、プロティノスが批判する立場は二つある⁶⁵。すなわち、ロゴスの内に含まれ充足因子となる白（例えば、白鉛にとっての白）はそもそも性質ではないとする立場 A⁶⁶と、充足因子である白と付帶的白（例えば、ソクラテスにとっての白）はともに性質であり、その区別はその可感的実体の外部から加わるか否かに還元されると見なす立場 B⁶⁷である。これら二つの立場に対し、第 17 論攷は以下のように新たな立場を提案した上で、既存の見解との差異を明らかにしてゆく。

いや、実体を充足すると言われるものについては(μὲν)、それらを性質と呼ぶべきではない。それらの内、ロゴスや実体的な力からやってくるものは自己展開活動(ἐνέργεια)なのだから。他方で(δ'),完全に実体の外部にあるもので、あるところでは性質だが、別のものにおいては性質ではないものとして現れることのないもの、つまり実体に後

⁶⁴ Igal(1982), 271, n.23 に従い、ἀλλὰ の直前にピリオドを打つ。

⁶⁵ 西村(2014), 136.

⁶⁶ 17(II.6) 1,22-23. 西村(2014), 136 では、立場 A がアレクサンドロスのもものと推定されている。

⁶⁷ 17(II.6) 1,23-29.

から加わった余剰を持つものを（性質と呼ぶべきである） [...]

ἢ ταύτας μὲν οὐ λεκτέον ποιότητας, ὅσαι λέγονται συμπληροῦν οὐσίας, εἴπερ ἐνεργεῖαι αἱ αὐτῶν ἀπὸ τῶν λόγων καὶ τῶν δυνάμεων τῶν οὐσιωδῶν ἰοῦσαι, ἃ δ' ἐστὶν ἔξωθεν πάσης οὐσίας οὐ πῆ μὲν ποιότητες, ἄλλοις δὲ οὐ ποιότητες φανταζόμεναι, τὸ δὲ περιττὸν μετὰ τὴν οὐσίαν ἔχουσαι, [...]

17(II.6) 2,20-25.

ここでは、充足因子は性質でないという見解が明確に示され、立場 B は即座に棄却される。また、両者を区別する点では立場 A と軌を一にするが、プロティノスは充足因子を自己展開活動するものと見なし、両者を因果関係において結ぶ点で袂を分かち。ここでの自己展開活動とは、充足因子が主導しその他の性質を産出するという関係性を示している。この解決は、立場 A による説明に欠けていた両者の因果関係を補完するものの、上の引用に現れるロゴス、あるいは実体的な力と、そこに由来すると言われる自己展開活動との関係は明示されない。この論点は、第二期に属する第 43 論攷「存在の類について—第二編」において再論される。

たしかに、別の箇所において(ἐν ἄλλοις)我々は、実体の充足因子は同名異義的な仕方での性質なのであり、実体の後に外部から備わるものが性質なのだ、そして前者は実体の内にある実体の自己展開活動であり、後者はその自己展開活動の後の情態なのだと考えていた。だが今や(νῦν δὲ)我々は、特定の实体の充足因子は全くもって実体に属するのではないと主張する。

καίτοι ἐν ἄλλοις ἤξιοῦμεν τὰ μὲν τῆς οὐσίας συμπληρωτικὰ ὁμωνύμως ποιά εἶναι, τὰ δ' ἔξωθεν μετὰ τὴν οὐσίαν ὑπάρχοντα ποιά, καὶ τὰ μὲν ἐν ταῖς οὐσίαις ἐνεργείας αὐτῶν, τὰ δὲ μετ' αὐτὰς ἤδη πάθη. νῦν λέγομεν οὐκ οὐσίας ὅλως εἶναι συμπληρωτικὰ τὰ τῆς τινὸς οὐσίας·

43(VI.2) 14,14-19.

「別の箇所」が既に引いた第 17 論攷を指すことについて、語彙面、内容面ともに異論はないであろう。第 43 論攷では、充足因子を自己展開活動と見なし、その他の付帯的性質がそれに伴われる、という見解が取り下げられ、充足因子から実体性が剝奪されている。つまり、プロティノスは議論を振り出しへと戻し、第 17 論攷における立場 B に接近しているように思われる。ただ、その場合でも両者の区別を完全に無くし、充足因子に相当する特殊なステータスを可感的実体から排除するわけにはいかない。そうしなければ、流動説へと陥る危険性が再燃するからである。そのため、第 44 論攷では、P-形相を構成するのは全て性質であるという新たな立場を保持しつつ、その一部が充足因子の役割を果たしかつ性質でもあるための路線が探られる。

さて、性質についてはこのように語られた。つまり、それは質料や量といった他のものとも混ぜられ、可感的実体を充足する働きを為すのだ、と。そして、まさにこの所謂「実体」は、多数のそれら（性質、質料、量）から成るものであって、何か(τι)ではなく、むしろこれこれ様のももの(ποιόν)なのである、と。

περι δὲ τοῦ ποιοῦ ἐλέχθη, ὡς σὺν ἄλλοις μὲν ὕλη καὶ ποσῶ συμμιχθὲν συμπλήρωσιν ἐργάζεται αἰσθητῆς οὐσίας, καὶ ὅτι κινδυνεύει ἢ λεγομένη αὕτη οὐσία εἶναι τοῦτο τὸ ἐκ πολλῶν, οὐ τί ἀλλὰ ποιὸν μᾶλλον·

44(VI.3) 15,24-27.

ここでは、充足因子が性質としてありながら実体を充足する、という事態が認められている。それでは、充足因子が充足因子たる根拠はどこに求められるのか。それが、P-形相の上に立ち、P-形相を産出するロゴスである。P-形相を備えた可感的実体とロゴスの関係を、プロティノスは模像と原型との関係に置き換えて説明する。すなわち、上の引用の直後で両者を結び付けつつ「人間のロゴスは何か(τι)であるが、ロゴスの影像として物体の本性の内に完成せられたものは、むしろこれこれ様のももの(ποιόν)」だと述べている。

故に、第 17 論攷で自己展開活動としての役割をも担っていた充足因子は、第 44 論攷に至ってその役割を終え、可感的実体を構成する一性質として理解される。その代わりに、可感的実体を産出するロゴスという存在階層を立て、そこに上位の実体性を担わせるのである。充足因子は既に P-形相を産出したロゴスの内にいわば設計図として組み込まれており、可感的実体にとっては外部に存するものである⁶⁸。このロゴスとそこから生み出される可感的実体の関係については次節で詳論することにする。

ロゴスによる規定を受けつつ産出された P-形相は、ロゴスの規定を反映しつつ、その全体は性質の束でもあり得るのである。ロゴスは継承しているのだから、そのロゴスを読み取ることの出来る観察者間で可感的実体の理解に齟齬が生じることはない。つまり可感的なソクラテスは、そのロゴスを読み取ることの出来る人皆にとって、ある種の間人なのである。この可感的実体の認識という場面については、後ほど再び取り上げることにする。

さて、以上の見解の揺らぎに関して、プロティノスの見解に修正の跡を見出すか否かを検討しなければならないが、本稿は修正説をとる以上、必要な限りで一貫説の不備を指摘しておく。Karamanolis は一貫説を唱え、両論攷の性質論の相違を観点の相違へと還元し、性質の語が文脈に依存して広義にも狭義にも用いられるものと見なした。ただ、この見解は第 17

⁶⁸ Kalligas(1997), 397-410 (esp. 409)は、この非対称性を DNA とそれが構成する生体との関係に模して考えている。その上で、この非対称的な関係を繋ぐ項として翻訳機にあたる役割が要請されると指摘する。プロティノスにとってそれは魂が担うものであるが、産出関係における魂の役割については扱わず、本章ではロゴスと可感的実体の間の関係へと単純化して議論を進める。

論攷に見られる自己展開活動の図式が修正されていることを説明できていない⁶⁹。また、Chiaradonna はかつての修正説⁷⁰から一貫説よりの解釈へと立場を変更しているが⁷¹、その変更も先述の Karamanolis の見解に影響されたもので、同様の問題を抱えていると言える。充足因子を性質と認めるか否か、そしてその産出者をどこに位置付けるのかという第 17 論攷の出発点を為す論点について、二つの論攷で明確に立場が異なる以上、やはりプロティノスは枠組みを修正したと判断せざるを得ないであろう。次節では、この本稿の立場を擁護するために、更なる論点を提示したい。そのプロセスは、この修正点がプロティノスにとって、イデア的実体の認識というプラトン主義における理想を貫徹するために必要なものだった、という筋書きを辿る。

ここまでで、プロティノスの可感的実体に備わる実体性を検討した。プロティノスの可感的実体は、『ティマイオス』の図式を引き継ぐように、「それが何であるか(τί ἐστιν)」を示すことはなく、あくまで「どのようなか(ποιόν)」を示すのみである。ただし、その「どのようなか」は全く根拠を持たないあり方なのではなく、ロゴスに由来して P-形相に含まれる充足因子により規定されるものである。このように、プロティノスの可感的実体は、その外部に存在の根拠を持つ充足因子により実体性を付与される、という図式の分有関係をとる。以下では、充足因子とそれを更に根拠づけているロゴスとの関係について、可知的実体の存在を考慮に入れつつ検討する。

第三節：ロゴスの導入、可知的世界と可感的界との連続

可知的実体と可感的実体はともに実体という名を共有しているが、そのことは両者を包摂する「実体」という類の存在を含意しない。これはプロティノスが強調する論点である。プロティノスの例示に沿うならば、ヘラクレスに由来する家系の構成員を全て「ヘラクレス一族」という類で包摂するやり方は、以上二種類の実体の間には認められない。実体カテゴリーに基礎を置く他のカテゴリーの存在を不要なものとし、延いては万有を一つのものに見なす極端な一元論へと陥りかねないからである。プロティノス的一元論は、このような路線を採らない。その代わりとして、可知的実体とは異なる可感的実体に特有のあり方について説明責任を果たしたことは、既に論じた通りである。

ところが、プロティノスは以上の両者がある意味で接続させなければならない。広義のイデア論、つまり可感的実体が可知的実体に由来すること自体は承認するからである。アリストテレスが認めない形相の離在性を積極的に立てる以上、イデアの分有を主張するプラトン主義者には、両者に跨る因果関係を説明する義務が生じる。しかも、プロティノス自身がそこに同名異義性を見て取っている。従って、アリストテレス的な「人間が人間を産む」と

⁶⁹ Karamanolis(2009).

⁷⁰ Chiaradonna (2002), 140-146.

⁷¹ Chiaradonna (2014).

いう、産むものと産み出されるもの間に同質性が見出されるタイプの原因論は、ここから排除されなければならないのである。

因果関係としての産出構造については、第一章で確認したプロティノスの「二重の自己展開活動理論」が解答の図式を与えてくれる。本章の主旨に関わる限りで、その要点を再確認しよう。プロティノスは、上位者が下位者を産出する仕方を説明する上で、熱源としての火の熱と熱源の存在に由来して生まれる熱との関係を類比として持ち出す。そして、前者を「実体の活動(ἐνέργεια τῆς οὐσίας)」、後者を「実体に由来する活動(ἐνέργεια ἐκ τῆς οὐσίας)」と見なした。この理論は、プロティノスの体系における上位者が、必然性ととも、かつ動因を外部に求めることなく下位者を産出する仕方を説明したものである。この理論について、本章の主眼に関わる限りで言及すべきは、上位者は下位者を似たものとして、しかし必ず後者は前者よりも劣ったものとして産出されるという規則である。以下では、この点をロゴスと可感的実体との関係へと当てはめて考えていくことになる。

さて、プロティノスが強調する両者の同名異義性は、どのように説明されるのか。この点も、上記の産出構造を構築するにあたってのプロティノスの企図に関連している。またこの主張は、分有論に基づく説明に一定の制限をかける規定でもある。つまり、あるアイデアに由来して成立する事物は、それがそのアイデアに由来するという観点においてアイデアとの間の同名同義性を有する、という論理をプロティノスは牽制している。例えば、両者を同名同義的に名付けられるものだと仮定しよう。この場合、所謂「第三人間論」という困難が生ずる。つまり、両者の同名同義性を保証するための更なる上位原理が要求されるが、このプロセスは無限背進に陥るため不合理である。プロティノスとしては、プラトン自身が仄めかし、またアリストテレスによって集中的に攻撃されたこの論理に関わる誤解を正す必要がある。

ここで、先に同名同義性を検討してみよう。『カテゴリー論』1,1a6-7に従えば、同名同義なるものとは、「名が共通であり、かつその名に基づいた実体の説明規定(λόγος)が同一であるもの」である。ところで、既に確認した通り、ロゴスと可感的実体の間には因果関係が認められるが、それは両者に先後の関係があることを含意している。この二点を踏まえ、Gerson は先後関係を持つ者同士の間にも同名同義性は認められるか否かを問題提起した⁷²。彼によれば、アリストテレスは部分的にこの場合の同名同義性を認めている。例えば『形而上学』α 1,993b24-25 では、「それに基づいて他のものにもまた同名同義的なものが備わるといふその当のものが、最高度にそれなのだ」と述べられ、火とそれにより熱を与えられるものの関係が、直後に例として持ち出されている。Gerson は、このタイプの同名同義性は必ずしも同名異義性を排除しない、と考えている。つまり、プロティノスが目指すべきは、第三人間論へと陥らない仕方でも同名同義という事態を解釈し、またある仕方では同名異義性を確保する、という方針の元で両者の関係を理解することであろう。

もう一度、第 44 論放におけるロゴスの導入の場面へと戻ろう。そこでは、例示による説明がとられる。

⁷² Gerson(2002), 63-64.

例えば、視覚対象であるソクラテスは人間である。他方、絵画の内の彼の像は、色と顔料であるのだが、ソクラテスと呼ばれる。すると同様に、それに基づいてソクラテスであるという当のロゴスがあるのであって、可感的ソクラテスのことはソクラテスと呼ぶのでなく、むしろ、ロゴスの内にあるかのものどもの模倣としてある色や形態と呼ぶのが正当なのだ。

οἶον εἰ ἀνθρώπου ὄντος τοῦ Σωκράτους τοῦ ὄρωμένου ἢ εἰκῶν αὐτοῦ ἢ ἐν γραφῇ χρώματα καὶ φάρμακα ὄντα Σωκράτης λέγοιτο· οὕτως οὖν καὶ λόγου ὄντος, καθ' ὃν Σωκράτης, τὸν αἰσθητὸν Σωκράτη <ὀρθῶς λεκτέον οὐ Σωκράτη>⁷³, ἀλλὰ χρώματα καὶ σχήματα ἐκείνων τῶν ἐν τῷ λόγῳ μιμήματα εἶναι·

44(VI.3) 15,31-36.

すなわち、可視的なソクラテスがソクラテスと呼ばれることを保証する、つまりソクラテスの充足因子を含むものとして、上位のロゴスがある。ただ、可感的ソクラテスに対する呼び名は本来正当とは言えないものである。このことは、ソクラテスの絵画が、それが色や顔料で構成されているにも関わらず、やはりソクラテスと呼ばれるのと類比的である。両者はロゴスにおいて共通するため同じ呼び名が与えられるが、それらは、可感的ソクラテスが血や肉で構成されている一方、絵画のソクラテスは色や顔料によって構成されているという意味で、存在様態において異なっている。つまり両者は、説明規定という意味でのロゴスを共有している点では同名同義だが、存在様態が異なっているという点で同名異義性を持つと言えるだろう。加えて、可感的ソクラテスなしには絵画のソクラテスを描くことは出来ないものであり、この例示は両者の論理的先後関係をもうまく説明できているように思われる。

従って、第 44 論攷が提示するロゴスを介入させた図式は、P-形相の内に性質でないものを混ぜ込むことなく、その構成全ての説明を性質へと一元化し、上述したかたちで可知的実体との同名異義性を確保できるという利点を持つ。たしかに可感的実体には充足因子としての役割を持つ性質と付帯的性質の区別が認められるが、あくまでそれらはともに性質なのであり、その区別の根拠は上位のロゴスにある。それ故、P-形相の内に真の意味での実体性を見出す必要はなく、性質のみで構成されていると見なしてよいのである。上述の例に従えば、絵画のソクラテスの構成要素として可感的ソクラテスの血や肉が入り込む余地はない。この点はやはり第 43、44 論攷の立場を優先して考えるべきであろう。第 44 論攷において導入されるロゴスは、P-形相を構成する性質を一律の仕方でも産出する。その限りでは、第 17 論攷の立場をとるにあたって説明を要される自己展開活動の役割を担う原因者の出自を問う必要はなくなる。つまり、性質間に認められる種差の出自をロゴスの内に収めることで、P-形相の内に特別なステータスを持つ要素を持ち込むことなく、P-形相を構成するものはそ

⁷³ 底本が報告する Igal の修正案を採用する。

の全てが性質である、と主張することが可能になるのである。

第 17 論攷においてプロティノスは、可感的実体の充足因子もまた性質なのだとしたら、その性質を属性として理解した上で全て取り除くと、質料のみが実体の候補として残ることになるが、これは不合理だという見解を主張していた⁷⁴。しかしながら、既に見た通り、もはやプロティノスは可感的実体の構成を「実体と属性からなる総体」とは考えていない。あくまで質料と P-形相の集合体であり、P-形相はその全体がロゴスに依存しているのだから、そもそもそこに実体性を見出す必要はなくなる。それ故、第 17 論攷において充足因子が性質でもあると見なす立場 B に対して向けられた危惧は、もはや問題を含まないのだと言える。

以上より、可知的実体としての人間も可感的実体としての人間も、ともにロゴスにおける構成、説明規定は共通していることになる。ここで言及されるロゴスについては、自己展開する形成原理としてのロゴスという意味と同時に、まさに説明的「ことば」としての側面を強調すべきであろう。つまり、各々を言語において表現する場合、両者ともに「人間」という言語表現としてのロゴスを共有するのだが、実際にはそれぞれの存在様態は異なる。これが二種類の実体の間に同時に見出される留保付きの同名同義性及び同名異義性なのだと考えられる。

第四節：認識主体と可感的実体の関係、認識の変容

可感的実体の存在性を論じたので、それを認識する主体の方へと視点を移す必要がある。あくまで P-形相は感覚対象となる性質の束であるため、我々がそれを認識する際の入り口は必然的に感覚となる。このことはプロティノスも承認する前提である⁷⁵。第三節にて、可知的実体と可感的実体はロゴスを共有しているが、存在様態において異なる、という点に触れた。存在様態において異なるという事態を具体的に示せば、前者は真の意味での実体であり、後者は性質により構成されるということである。この点を踏まえ、可感的実体の認識という場面に関わるプロティノスの記述を確認してみよう。

感覚論の全容を扱うことは出来ないので P-形相の認識という論点に定位して、簡単にプロティノスにおける可感的実体の認識の図式を確認することにしよう。プロティノスにとって、「感覚する」という事態は受動を意味しない。「感覚とは受動ではなく、受動情態を巡っての活動であり判断」であるとプロティノスは考えている⁷⁶。Emilsson は、プロティノスが考える可感的実体の認識構造は、常識的な理解の正反対だと指摘する⁷⁷。すなわち、通常認識という場面においては、認識対象となる可感的実体の方が原型に当たり、そこから我々が受け取る表象が模像だと考えがちであるが、プロティノスにとってはそうではない。むしろ

⁷⁴ 17(II.6) 2,6-14.

⁷⁵ 例えば 5(V.9) 1,1.

⁷⁶ 26(III.6) 1,1-2.

⁷⁷ Emilsson(1988), 133-140 (esp. 139).

ろ、我々の内にあるロゴスが先にあり、それに可感的実体から見て取る P-形相を適合させるという能動作用を想定するのである。

そこで感覚が、自己と正反対の無形なるものを結び合わせ、支配しながら物体の内にある形相、そして他の種々の形姿の上にあるひと際目立った形姿を見ると、ばらばらにあるその寄せ集めをまとめ、部分のないものとした上で自己の内に引き戻す。そして内なるものに対し、協合するもの、適合するもの、好ましいものとして、これを受け渡すのである。

ὅταν οὖν καὶ ἡ αἴσθησις τὸ ἐν σώμασιν εἶδος ἴδη συνδησάμενον καὶ κρατῆσαν τῆς φύσεως τῆς ἐναντίας ἀμόρφου οὐσίας καὶ μορφῆν ἐπὶ ἄλλαις μορφαῖς ἐκπρεπῶς ἐποχομένην, συνελούσα ἀθρόον αὐτὸ τὸ πολλαχῆ ἀνήνεγκέ τε καὶ εἰσήγαγεν εἰς τὸ εἶσω ἀμερὲς ἤδη καὶ ἔδωκε τῷ ἔνδον σύμφωνον καὶ συναρμόττον καὶ φίλον·

1(I.6) 3,9-15.

ここでは、既に認識主体には内なるもの(τὸ ἔνδον)としてのロゴスが備わっており、そこに感覚がまとめ上げる可感的実体の P-形相を適合させる、というプロセスが描かれている。

また、プロティノスは芸術作品の鑑賞及び評価という例をしばしば取り上げ、異なる認識主体間で評価に相違が現れることを強調している。これから引くプロティノスの記述はグノーシス派論駁という特殊な文脈の上にあるものだが、その主張の主旨を検討し、これまでの議論と突き合わせてみたい。グノーシス派は神のはからい(πρόνοια)に由来して可感的世界に備わる秩序の存在に否定的な態度をとるが、プロティノスは彼らの愚かさを嘆きつつ、

実際、絵画の場合であっても、芸術的なものを眼で見ている人々が、同じものを同じように眺めるとは限らず、念頭にある人物の模倣を可感的事物の内に見出した人々は、いわば心が騒いで真実なるものを想起するに至るのである。

εἴπερ οὐχ ὁμοίως τὰ αὐτὰ βλέπουσιν οὐδ' ἐν ταῖς γραφαῖς οἱ δι' ὀμμάτων τὰ τῆς τέχνης βλέποντες, ἀλλ' ἐπιγινώσκοντες μίμημα ἐν τῷ αἰσθητῷ τοῦ ἐν νοήσει κειμένου οἷον θορυβοῦνται καὶ εἰς ἀνάμνησιν ἔρχονται τοῦ ἀληθοῦς·

33(II.9) 16,43-47.

と述べる。この「画像としての人間」と「肉体を纏った人間」との間に成立する関係は、「肉体を纏った人間」と「可知的存在としての人間」との関係に類比的である。ここにおいて、想起(ἀνάμνησις)というプラトン主義におけるキーワードが意味を成す。つまり、可感的実体の認識を手掛かりに、我々はその可感的実体を根拠づける可知的実体の存在を想起することが出来るのである。しかしながら、それはあくまで可能性であり、実際にそのような仕方でも可感的実体を捉えられない人々が存在することもまた上の引用は示している。プロテ

イノスの報告によれば、グノーシス派は神のはからいの存在を吟味した上で、彼らのみがそのはからいに与ると述べている⁷⁸。それに対し、プロティノスはこの世界に備わる秩序を見て取る中で理解されるものとして、はからいの存在を疑わない。それ故、神のはからいの存在に疑問を投げかけること自体が、「ある種の盲人であり、感覚も知性も全く持ち合わせておらず、この可感的世界に目を向けないがために、可知的世界を見ることから遠く離れた者⁷⁹」の行いなのだとされる。

上で言及したグノーシス論駁の場面では神のはからいという神学の言語が用いられており、この観点は既に見たアリストテレスの実体論批判の文脈には見出されない。しかしながら、それぞれの主旨には共通するものがあるのではないだろうか。プロティノスはアリストテレス由来のカテゴリー論を批判する際に、「ペリパトス派は彼らのカテゴリーの理論が全存在を包括するものだと考えている」ことを一つの根拠として挙げ、その不備を是正しつつ、可知の実体と可感的実体との関係を考察していたのだ⁸⁰。たしかにペリパトス派、特にアレクサンドロスは、可感的実体の内の充足因子を見出すことに成功し、可感的実体が有する実体性の所在を「質料内形相」というかたちで明らかにした。このように形相を優位に置きつつ実体性の説明項とする考え方自体は、プロティノスも否定していないように思われる。しかしながら、認識主体は、その可感的実体の実体性を支える充足因子としての性質の上に、更にそれを支える存在があるという事実には注意を払わなければならない。この場合、両者はロゴスにおいてのみ共通しているのであった。この共通するロゴスは、両者を因果関係において結びつける役割を果たす一方で、認識という場面においては、可感的実体を真の実体として誤認してしまう原因でもある。何故なら、主語・述語という言語表現においては、述語の位置にどちらの実体を据えても区別はつけられないからである。可感的実体が何であるかを正確に理解するためには、そこにおいて見出される P-形相を見て取るだけでは十分ではない。それ故プロティノスは、「もし君がその形相そのものすらも、各々それら自身との関係において展開するならば、君はその内に『なぜ』を見出すことだろう」と述べる⁸¹。我々が感覚対象として認識するものを真の意味での実体と考えてはならないとプロティノスが述べ、プロティノスがペリパトス派の実体理解を批判しつつ実体論を組み直す動機には、このような事情が隠れているのだと考えられる⁸²。

結

⁷⁸ 33(II.9) 16,16-17.

⁷⁹ 33(II.9) 16,36-39.

⁸⁰ 42(VI.1) 1,29-30.

⁸¹ 38(VI.7) 2,16-19.

⁸² この点は、『カテゴリー論』批判の劈頭を飾る 42(VI.1) 1,28-30 にて、アリストテレスのカテゴリー論が孕む不備を、「彼らは有るもの全てを分割しようとせず、最高度の有るものを見落としたり」ことに見出すプロティノスの問題意識と符合するだろう。

プロティノスの構想する可知的実体と可感的実体は、まさに以上の仕方において不即不離の関係を持つ。すなわち、前者は実体として存在し、後者は性質（と質料）により成り立つという点では不即であるが、それらの中に因果関係が成り立ち、ロゴスを受け継ぐという点では不離である。擬似質料・形相論としてアリストテレスの図式を修正、発展させたプロティノスの枠組みがプラトン派とペリパトス派双方が抱える難問の解決を企図していたことは、第一節から第三節までで明らかになったと思う。その上で、可感的実体を持つ実体性を支えるロゴスが、可感的実体の認識という場面において占める位置付けを検討した。ロゴスにおいて共通する二種類の実体は、言語の操作の上では区別がつかない。そのため、可感的実体の構成を正確に理解し、それを根拠づけている可知的実体の存在に気付き、前者を眺めつつ後者の認識へと自己を転換させなければならないのである。プロティノスは擬似質料・形相論を構想する中で、常識的な可感的実体に対する理解を転覆させる必要があった。それはこの認識の転換を呼び起こすためであり、その点において、擬似質料・形相論はプロティノスにとって大きな哲学的意義を有するものであったと考えられる。

序及び第一節にて、プロティノスの可感的実体論が彼に至るまでのプラトン主義の伝統において新奇と言い得る点にも触れたが、そこにはアリストテレス『自然学』の伝承状況が関連しているとする Chiaradonna の見地は興味深い⁸³。すなわち、プロティノス以前のプラトン主義者には『自然学』を踏まえた論点が欠けている一方、プロティノスに至ってそれらが豊富に確認できるようになることから、プロティノスは何らかの仕方で『自然学』にアクセスすることが可能な立場にあり、その内容を自身の議論へと組み込むことが出来たと推定するのである。その経路が『自然学』の写本そのものなのか、あるいはアレクサンドロス他ペリパトス派の注釈類なのかはこれからの資料研究に委ねられた課題であるが、プラトン主義者の可感的実体に対する眼差しがプロティノス以降で変化を見せることは今後一層意識されるべきであろう。可感的世界を探求する過程にも、プラトン主義の豊かな水脈を掘り当てる可能性が残されている。

⁸³ Chiaradonna(2021), 167-171.

第三章

非物体的なものから成る物体の世界 —プロティノスによる可感的事物の理解について、 『エンネアデス』第26論攷(III.6)を中心に—

序

本章が取り上げるのは、『エンネアデス』第26論攷「非物体的なものの非受動性について」(以下、「本論攷」と表記)より、特に質料論に関わる箇所である。第26論攷が提示する「非受動的質料」というアイディアは、プロティノスの哲学に極めて独自と言い得る構想の発露と見なされている。この場合、独自のと評価されることの要因は大きく分けて二つあると考えられるだろう。すなわち、①彼に至るまでの諸学派が展開してきた質料概念の理解に対し、根本的な変更を加えたこと、そして②彼の質料理解は後のプラトン派によってもそのままのかたちでは引き継がれず、むしろ論議の対象となったことである。本稿において②の点を詳しく取り上げることは出来ないが、主に①の点について、本論攷の議論を軸とし、近接する時代の哲学史的な背景を踏まえつつ、プロティノスが既存の質料理解について何を問題としていたのか、その問題の解消がもたらす意義はどのようなものだったのかを検討していきたい。

プロティノスがこの論点に着手した背景としては、「言葉遣いの慣習により(ταῖς συνηθείαις τῶν ὀνομάτων)⁸⁴」生じてきた、受動・非受動という事態を巡る「誤解」の存在が想起される。このプロティノスの言い回しからは、既に彼の時代に至るまでに蓄積された解釈史の影を見て取ることが出来よう。例えば Fleet は、ここで念頭に置かれている先行見解をプラトン派内部の『ティマイオス』解釈だと想定する⁸⁵。実際本論攷における質料論は、そのかなりの部分がプロティノスによる『ティマイオス』解釈、特に質料と同定される「場(χώρα)」あるいは「受容体(ὑποδοχή)」概念の解釈により占められており、ときにプラトンの言葉を引用しながら注釈を行っているのである。つまり本論攷の主題は、プラトン自身によっても「まがいの思考(νόθος λογισμός)⁸⁶」でしか説明できないとされた「場」という曖昧模糊とした概念を対象とし、そこに「正統」解釈を与えることだったのだという一つの想定が成り立つ。

ところで、質料概念を含め、一者や知性の如き人間理性にとって容易には捉え難い概念を

⁸⁴ 26(III.6) 12,29.

⁸⁵ Fleet(1995), p.219.

⁸⁶ *Tim.* 52b2.

論究しようとするとき、プロティノスはしばしば比喩による説明を持ち出すことがある。本論攷においても例に漏れず、鏡、蜜蠟、玩具など、随所に散りばめられた印象的な比喩が読者の目を引くことだろう。たしかにこうした比喩の援用は、プラトン主義内部でプラトン解釈を修正し、直観的な理解を促す説明上の道具としては優れた点を持つかもしれない。ただその一方で、プロティノスに敵対的な読者に対しては、プロティノスの説明を独断的な方向性で理解させ得る危険性もまた注意されて然るべきだろう。すなわち、プロティノスは権威的テキストである『ティマイオス』について、不明瞭な仕方でも記述された箇所の解釈を自分自身で持ち込んだ比喩的な説明をもって補完するという、哲学的議論として不健全な仕方での論述を行っている可能性が指摘され得るのである。多くの人間にとってプロティノスの記述を理解不可能なものとするこの種の読解は、プロティノス研究の現場を含め、しばしば解釈上の難所を巡るいわば妥協案として持ち出されることがある。例えば、プロティノスが第 42-44 論攷(VI.1-3)という紙幅を割いて論究したアリストテレス的カテゴリー論批判については、これと同様の論理をもって独断的、場合によっては哲学的に無意味であるとの評価を下されてきた研究史がある⁸⁷。つまり、プロティノスは一者や可知界といった独自の原理、前提を恣意的に定立し、それらを根拠として他学派の批判を行ったという趣旨の批判である。この傾向を疑問視した Chiaradonna は、プロティノスのカテゴリー論批判がアリストテレスの記述を正確かつ十分に吟味した上で提出されたものと理解し、プロティノス独特と言える原理の必要性がその結果として要請されるのだと論じた⁸⁸。独断的であることへの評価、あるいは何かを独断的であると判断するにあたっての基準を安易に語ることは出来ないが、本論攷についてもこれを『ティマイオス』注釈としての側面から読むことは独立に、プロティノスにとって目下の議論を下敷きとした他学派との論争の場として捉える一つの道は常に開かれていなければならないだろう。本章は以上の方針を踏襲し、同じくプロティノス研究上の難所に数えられる質料論について、普遍的な理解可能性を出来得る限り確保しようとする一つの試みである。

第一節：論攷概要とその主眼

本論攷は、伝統的に全二部構成をとる単一の論文（すなわち弟子ポルフェリオスの手による大胆な編集作業を被っていないもの）と見なされてきた。全 19 章からなり、魂を扱う第一部は第 1~5 章、質料を扱う第二部が第 6~19 章という一見して明らかな分量的不均衡が見られるものの、接続部にあたる第 6 章において論点の移行がプロティノス自身により明示的に宣言されること、また第二部の内に第一部における議論への参照が複数確認出来ることなどから、第二部全体を偽作と見なす Thedinga らの極端な想定を除き、プロティノスが一貫した構想の下に著した論攷であることに根本的な疑義を挟む余地はないと言える。

⁸⁷ Chiaradonna(2002)の *Introduzione*、特に 16-18 を参照。

⁸⁸ Chiaradonna(2002), 46.

題名が示す通り、両部を接続する共通項は、「非物体的なもの(τὰ ἀσώματα)」の「非受動性(ἡ ἀπάθεια)」を明らかにする取り組みにある。そしてここで言われる非物体的なものとして、各部の主題となる人間魂、質料が順に取り上げられるのである。ただし、Igal が正確に注記するように、本論攷が扱う非物体的なものの範囲が限定的であることには注意が必要だろう⁸⁹。実際本論攷中には、人間魂よりも上位に位置する非物体的原理、すなわち一者、知性、原理的魂への言及がほとんど見られない。後に見るように、プロティノスが受動という事態に関わる領域を物体に限定していることを踏まえれば、本論攷の考察が非物体的なもの一般ではなく、物体に直接相対する限りの非物体的なものを対象としていることが容易に理解されるだろう。加えて、物体の成立をともに非物体的なものに分類される質料と形相の関わり合いに由来すると考えるプロティノスの想定を踏まえるならば、物体の成立に対して非物体が、つまり受動的なものの成立に対して非受動的なものが為す貢献のあり方を問う視座が、本論攷には含まれているものと予想されるのである。

また、本論攷は非受動性を有する非物体的なものとして魂と質料を同時に取り上げるものの、質料の場合に認められる非物体性は、魂の場合のそれと「異なる仕方ではあるが(εἰ καὶ ἄλλον τρόπον)」という留保付きで語られることになる。そしてそれに伴い、プロティノスは非受動性に関しても質料に特有のあり方を探求してゆくように思われる。この「異なり」を導く要素はどのようなものだろうか。一つには、魂と質料の間に横たわる存在性格の格差が指摘されよう。つまり、魂はその優れた存在性格ゆえに、質料はその劣った存在性格ゆえに、それぞれに様態の異なる非受動性を有すると考える、プロティノスに特有の階層的な世界観を反映した見方である。ただそれと並行して、プロティノスが魂及び質料という二つの題材を選択するにあたり、それらの概念に関する既存の解釈を念頭に置いていることにも気を配らねばならない。つまり、彼以前には魂も質料もともに「受動的」なものとして理解されており、プロティノスはその点に対して異論を唱えているのだという見立てである。後に触れるように、質料(ύλη)という名で示される概念は、諸学派間で少なくとも名目上共有されてきたものであった。この概念を巡る膨大な議論の蓄積をプロティノスが無視しているはずはなく、十分な批判的吟味を経て自らの体系へと導入した、という順序の方がありそうな筋立てである。従って、プロティノスの質料理解の独自性を正しく見積もるためには、まずもって論敵たちとの生産的対話の過程を読み解くことが必要不可欠な作業となるのである。

第二節：質料の非受動性を巡るプロティノスの問題意識はどこにあるのか？

既に触れた通り、本論攷は『ティマイオス』注釈としての側面を持つ。プロティノスが質料を論点とする中で『ティマイオス』の記述を極めて重要視していることは、類似の主題を扱った諸論攷における言及頻度からも容易に窺い知ることが出来る。例えば、本論攷に先行

⁸⁹ Igal(1985), 133.

する第 12 論攷(II.4)「質料について」では、「場」「受容体」といった『ティマイオス』由来の諸概念と質料概念とが一括して扱われており、少なくともプロティノスにとって、事実上それらの語彙が指示する対象は同一のものであるとして論が進められている。その中でプロティノスが構想していたことは、諸学派に共通して用いられる質料という語について、その内実が『ティマイオス』の「受容体」に一致するものとして示すことである。

プロティノスの質料論というテーマに関して言えば、この第 12 論攷の時点で既にかかなりの程度の輪郭を与えられていることも事実である。従って、本論攷を第 12 論攷の単なる再論と想定するのでない限り、本論攷が改めて質料論を取り上げることには独立した価値を見積もらなければならぬだろう。両論攷各々の焦点の差を明確にするために、先行する第 12 論攷の時点で前提とされた内容を押さえておきたい。

第 12 論攷で示された質料の諸特性は、基本的に否定的な仕方で示される存在性格である。中でも重要なのは、「非物体」「無性質」というあり方だろう。というのも、物体であるか否か、性質を持つか否かを巡る規定は、プロティノスに至るまでの質料論における重要な論点であり続けたからである。他方、本論攷の主題となる非受動性は、以上のあり方に加えてプロティノスが導入する質料理解の一側面である。第 12 論攷における規定と本論攷で示される非受動性との間に必然的な結びつきを見出すことが出来れば、それはそのまま本論攷に独自の視点を取り出したことになるだろう。本章では、この①物体であるか否か、②性質を有するか否か、③受動的であるか否か、という三点に定位し、プロティノスとそれ以外の論者との差異を探ってゆく。

質料論の開始点である第 6 章において、プロティノスは先ず質料が受動的か否かという観点を持ち出す。

さて、可知的かつその全体が形相のもとに配置された実体に関して、それが非受動的であると見なされねばならないということについては、既に述べられた。他方、質料もまた、(可知的実体とは)異なる仕方ではあるものの、非物体的なものどもの内の一つであるので、それに関しても、どのようなあり方をとるのか、つまり巷で言われているように受動的かつあらゆる点で可変的なのか、あるいはそれもまた非受動的と考えられねばならず、そうだとしたときその非受動性とはどのような仕方なのか、という点が考察されなければならない。

τὴν μὲν δὴ οὐσίαν τὴν νοητὴν τὴν κατὰ τὸ εἶδος ἅπασαν τεταγμένην ὡς ἀπαθῆ δεῖ εἶναι δοκεῖν εἴρηται. ἐπεὶ δὲ καὶ ἡ ὕλη ἐν τι τῶν ἀσωμάτων, εἰ καὶ ἄλλον τρόπον, σκεπτέον καὶ περὶ ταύτης τίνα τρόπον ἔχει, πότερα παθητή, ὡς λέγεται, καὶ κατὰ πάντα τρεπτή, ἢ καὶ ταύτην δεῖ ἀπαθῆ εἶναι οἴεσθαι, καὶ τίς ὁ τρόπος τῆς ἀπαθείας.

26(III.6) 6,1-7.

ここでプロティノスは、前半で質料が非物体的なものであるという前提を押さえつつ、それ

が受動的であるか非受動的であるかという点を議論の俎上に乗せている。つまり、本論攷の時点では既に「質料＝非物体」という図式は読み手と共有されているのである。ただ、この直後に半ば脱線的な仕方で、山や岩といった物質的な堅牢さを伴う諸物体に堅固な実在性を認める人々への反論が展開されるため⁹⁰、プロティノスは質料を物的なものとして理解する人々を完全に考察の埒外に置いているわけではない。実際プロティノスは、物体が有する一見確実な存在性に関してそれが人々の目を可知的実体から逸らせる可能性にしばしば危惧を表明しており、論敵としての重要性を明らかに認識している。また、中期プラトン主義に区分されるプラトン派の資料にも、質料相当の概念がそれ自体で物体なのか、あるいは付帶的にそうなのか、という点を巡った論争の形跡を確認することが出来る⁹¹。このように、質料を物的なものとして理解するやり方が有力なオルタナティブとして存在していたことは事実である。しかしながら、本論攷におけるプロティノスが、この類の質料論を問題としているようには思われない。実際、続く第7章冒頭に示される方針を確認すれば、本論攷が中心的に批判を試みる相手は「質料＝物体」論者ではないことが明らかとなるだろう。第7章は次の文言から始まる。

ともあれ、基にある質料、次いでその質料の上にあると言われるものどもへと再び戻らなければならない。それら（両者）から⁹²、質料があらぬということ、及び質料の非受動たることが知られることになる。

ἀλλ' ἐπανιτέον ἐπί τε τὴν ὕλην τὴν ὑποκειμένην εἶτα τὰ⁹³ ἐπὶ τῇ ὕλῃ εἶναι λεγόμενα, ἐξ ὧν τό τε μὴ εἶναι αὐτὴν καὶ τὸ τῆς ὕλης ἀπαθὲς γνωσθήσεται.

26(III.6) 7,1-3.

「再び戻」という表現が、前節にて留保された探求方針、つまり非物的な質料の考察への立ち戻りを指していることは明らかであろう。加えてこの引用は、やはり本論攷の主題が質料だけでなく「質料の上にあるもの⁹⁴」をも巻き込んでおり、またその考察の結果として質料が持つ非受動的なあり方を解明できる、というプロティノスの見通しを示している

⁹⁰ 26(III.6) 6,32-77.

⁹¹ 例えば、プルタルコスはその物体とし、アルキノオスやアプレイウスらは付帶的にのみ物体であり、質料それ自体としては物的でも非物的でもない、などとするヴァリエーションが報告されている。この点を巡る簡潔なまとめについては、Noble(2013), p.235-236 を参照。

⁹² ὧν の複数属格に対する先行詞の選択肢として、「質料及びその上にあるものども」あるいは「質料の上にあるもの」という可能性がある。前者を採る。

⁹³ H-S の ἦ は採らず、全ての写本が伝える εἶτα を採った上で直後の τὰ は haplography と理解した方がよいと考える。いずれにせよ、Volkman の καὶ という修正は受け入れ難い。

⁹⁴ ここで質料の上にあるものをペリパトス派的形相と安易に同一視しないところにプロティノスの慎重さがある。以降、本稿の方針に従い基本的にこれを「P-形相」と表記するが、その内実がペリパトス派のものとは根本的に異なっていることに留意されたい。

考えられる。実際、質料そのものの、そしてそれが「あらぬもの」であるということの考察は既に先行する諸論攷が行っているので、本論攷に特有の仕方に取り上げられる論点はあくまで質料の「非受動性」なのであり、その内実は質料の上にある「形相的原理」との関係において語られるのである。更なる非受動性の内実を探るために、同章にまとめられた質料の特徴づけを併せて確認しておこう。

(質料も可知的実体と同様に非物体的と言われるが、)しかし、(質料は)魂でも知性でも生命でも形相でもロゴスでも限度でもなく—というのは(質料は)無限定なのだから—また、能力でもない—というのも(質料が)何を作り出すだろうか—、むしろそれら全てから外れているのだから、有るものと称されることを正しく受け入れられないであろうし、有らぬものと呼ばれる方がありそうなことである。そしてそれは動あるいは静が有らぬものと(見なされる)ようなことではなくて、むしろ本当に有らぬものであり影であり嵩の幻影であり、存立への希求である。また静においてではないが留まっていて、それ自体では不可視であり、見ようとするものを避け、誰も見ていないときに生じるが、凝視する者にとっては見えないのである。そして常に自身に依って相反する現れを見せており、小であり大、劣であり優、不足であり過剰であるような、留まることも、反対に逃げることも出来ない影なのだ。というのも、それは知性から来た力を捉えていない無力なものであり、有るものをすべて欠いた状態で生じたのだから。それ故、何であれそれが伝えることはみな偽りであって、大きく現われたとしても、それは小さく、またより優るものとして(現れて)も、それはより劣っているのであり、またそれがそう現れる限りで持つ有は(実際のところ)有ではない。それはあたかも逃げ回る玩具の如くである。従って、それ(影としての質料)の内に生じたように思われる玩具も、単なる影の中の影に過ぎず、それはまるで鏡の中では別の場所に座を占めているものがまた別の場所に現れるようなものである。それは満たされているように思われつつ何も持っていないのだが、同時に全てであるようにも思われるのである。

οὔτε δὲ ψυχὴ οὔσα οὔτε νοῦς οὔτε ζωὴ οὔτε εἶδος οὔτε λόγος οὔτε πέρασ – ἀπειρία γὰρ – οὔτε δύναμις – τί γὰρ καὶ ποιεῖ; – ἀλλὰ ταῦτα ὑπερεκπεσοῦσα πάντα οὐδὲ τὴν τοῦ ὄντος προσηγορίαν ὀρθῶς ἂν δέχοιτο, μὴ ὄν δ' ἂν εἰκότως λέγοιτο, καὶ οὐχ ὥσπερ κίνησις μὴ ὄν ἢ στάσις μὴ ὄν, ἀλλ' ἀληθινῶς μὴ ὄν, εἶδωλον καὶ φάντασμα ὄγκου καὶ ὑποστάσεως ἔφεσις καὶ ἐστηκός οὐκ ἐν στάσει καὶ ἀόρατον καθ' αὐτό καὶ φεύγον τὸ βουλόμενον ἰδεῖν, καὶ ὅταν τις μὴ ἴδη γιγνόμενον, ἀτενίσαντι δὲ οὐχ ὀρώμενον, καὶ τὰ ἐναντία ἀεὶ ἐφ' ἑαυτοῦ φανταζόμενον, μικρόν καὶ μέγα καὶ ἦττον καὶ μᾶλλον, ἐλλείπόν τε καὶ ὑπερέχον, εἶδωλον οὐ μένον οὐδ' αὖ φεύγειν δυνάμενον· οὐδὲ γὰρ οὐδὲ τοῦτο ἰσχύει ἄτε μὴ ἰσχὺν παρὰ νοῦ λαβόν, ἀλλ' ἐν ἐλλείψει τοῦ ὄντος παντός γενόμενον. διὸ πᾶν ὃ ἂν ἐπαγγέλληται ψεύδεται, κἂν μέγα φαντασθῆ, μικρόν ἐστι, κἂν μᾶλλον, ἦττόν ἐστι, καὶ τὸ ὄν αὐτοῦ ἐν φαντάσει

οὐκ ὄν ἐστιν, οἷον παίγνιον φεῦγον· ὅθεν καὶ τὰ ἐν αὐτῷ ἐγγίγνεσθαι δοκοῦντα παίγνια, εἰδῶλα ἐν εἰδῶλῳ ἀτεχνῶς, ὡς ἐν κατόπτρῳ τὸ ἀλλαχοῦ ἰδρυσμένον ἀλλαχοῦ φανταζόμενον· καὶ πιμπλάμενον, ὡς δοκεῖ, καὶ ἔχον οὐδὲν καὶ δοκοῦν τὰ πάντα.

26(III.6) 7,7-27

以上の記述は、弟子ポルフュリオスが著した『センチアエ』第20章における質料の説明に酷似しており、その出典となったことに疑問の余地はない。後者は非常に簡潔にまとめられた要約版のような体裁であるが、上の引用箇所の要点を殆ど漏らすことなく伝えている。従ってこの箇所は、プロティノスの質料観を最もよく反映した記述の一つと見なされてよいだろう。しかしながら、以上の説明からはプロティノスの質料に対する否定的な特徴づけを窺えるものの、他方で本論攷が主題とする非受動性というあり方については比喩による説明を取り上げるのみに留まっており、ここからプロティノスが考える非受動性の内実に迫ることは難しいように思われる。

章冒頭の宣言通り、続けてプロティノスは形相の側へと論点を移し、『ティマイオス』の表現を引用した上でこう述べる。

「そして、入ってゆくもの、出てゆくものは有るものの模像⁹⁵」であり、また無形の影の内へ入り込む影であり、そしてそれ（質料）の無形なること故に、その内に見出されるものをそれ（質料）に対して作り込むように思われるのだが、実のところ何も作り出していないのである。

τὰ δὲ εἰσιόντα καὶ ἐξιόντα τῶν ὄντων μιμήματα καὶ εἰδῶλα εἰς εἰδῶλον ἄμορφον καὶ διὰ τὸ ἄμορφον αὐτῆς ἐνορώμενα ποιεῖν μὲν δοκεῖ εἰς αὐτήν, ποιεῖ δὲ οὐδέν·

26(III.6) 7,27-30.

ここで改めて、プロティノスにとっての P-形相がイデア的な有るものに由来する模像であることが確認される。その上で、プロティノスも質料と P-形相とを物体の構成要素として考えているのだから、この質料への像の映り込みという説明がプロティノスによる物体成立の一側面を描いたものだということになる。しかしながらそれは、質料への P-形相の投影を経て質料を転化させるかたちで実現するものではなく、あくまで質料は P-形相から一切を被ることがないのである。つまりプロティノスは、一応質料と P-形相の組み合わせとして物体が成立することは認めつつ、そのプロセスの中で質料は一貫して不変のままに留まるという一見奇妙なアイディアを提示していることになる。この奇妙さに対しどうアプローチするかが、プロティノスの質料論の理解を左右するだろう。

ところで、ここまで無条件に質料と呼んできたものは、P-形相との関係抜きに語られる所

⁹⁵ *Tim.* 50c4-5.

謂「第一質料」のことである。少なくともプロティノスの時代に至るまでに、広義の質料概念を導入したプラトン派、ペリパトス派、ストア派は、いずれも第一質料という考え方を共有していた。そこでの共通点は、四元素にとっての質料を第一質料と見なすことにある。すなわち、細かな図式の違いはありながらも、第一質料と四元素いずれかの性質に相当する要素が結びつくことで、特定の元素が成立すると考えるのである。従って、特定の性質に与らない次元の第一質料は無性質のものとして理解される。プロティノスが物的な第一質料を検討対象としていないであろうことは既に指摘した。従って次に、質料を物体成立「以前」のものとする例として、アフロディシアスのアレクサンドロスによる質料理解及びその物体との関係を確認しておこう。

しかし、自然的物体には差異があり（つまり、その内のあるものは単純なもの、またあるものは複合的であるが）、それら自然的な複合体の質料、つまりそれらの基体は、それ自体もまた質料と形相から成る自然的物体である（何故なら、あらゆる自然的物体はそれらから成る複合体だから）。それに対して単純物体は、もはやそれらにとっての基体となる複合体を持たない。その場合、その（単純物体）もまた複合体だということになってしまうからである。しかし、もしその基にあるものが複合体でないなら、またいやしくもあらゆる物体が質料と形相に由来する複合体なのだとすれば、それは物体ですらない。従って、単純物体の基にあるもの、つまりそれらの質料は、形相から離れてある何か単純な本性を持つものであり、自身の説明規定に従えば無姿、無形相、無形態である。そして、無形相でありかつそう言われてもいるこの質料に基づいて、その（質料の）内に生じ、既に述べた欠如状態を終わらせるようなものが形相と名付けられるに至ったのである。そしてこのような質料をこそ人は「根本的な意味での質料」と呼ぶだろう。

οὔσης δὲ ἐν τοῖς φυσικοῖς σώμασιν διαφορᾶς (τὰ μὲν γὰρ αὐτῶν ἐστὶν ἀπλᾶ, τὰ δὲ σύνθετα), ἢ μὲν τῶν συνθέτων σωμάτων ὕλη καὶ τὸ τούτοις ὑποκείμενον καὶ αὐτὸ φυσικὸν σῶμα ἐξ ὕλης τε καὶ εἶδους ἐστίν (πᾶν γὰρ φυσικὸν σῶμα ἐκ τούτων σύνθετον), τὰ δὲ ἀπλᾶ σώματα οὐκέτ' ἔχει τὸ ὑποκείμενον αὐτοῖς σύνθετον. ἦν γὰρ ἂν καὶ αὐτὸ σύνθετον. εἰ δὲ μὴ σύνθετον τὸ τούτοις ὑποκείμενον, οὐδὲ σῶμα, εἴ γε πᾶν σῶμα, ἐκ τε ὕλης καὶ εἶδους σύνθετον. ἔσται δὲ τὸ τοῖς ἀπλοῖς σώμασιν ὑποκείμενον καὶ ἢ τούτων ὕλη ἀπλή τις φύσις καὶ χωρὶς εἶδους, ἄμορφός τε καὶ ἀνείδεος οὔσα καὶ ἀσχημάτιστος κατὰ τὸν αὐτῆς λόγον, δι' ἣν ἀνείδεον οὔσαν τε καὶ λεγομένην εἶδος ὠνόμασται, ὃ γενόμενον ἐν αὐτῇ παύει τῆς προειρημένης αὐτὴν στερήσεως, καὶ τὴν τοιαύτην φύσιν κυρίως ἂν τις ὕλην λέγοι.

De Anima 3,21-4,4.

このように、アレクサンドロスは質料のあり方を大きく二種類に分けている。つまり、複合

的物体に関わる質料と、単純物体に関わる質料である。そして後者を「根本的な意味での質料(κυρίως ὕλη)」と呼び、また「物体ですらない(οὐδὲ σῶμα)」ものと考えている。従って、アレクサンドロスにとっての物体・非物体の境界は、第一質料が形相を保持しているか否かと連動するように思われる。アレクサンドロスからの直接的な影響関係を断定することは出来ないが、プロティノスも以上と同様の見解を保持しており⁹⁶、彼もまた物体の領域を質料・形相の組み合わせにより成立するものどもに限定した。その上で、質料をその構成要素である限りにおいて物体ではないものと見なして、彼独自の非物体的な質料の説明へと移行してゆくのである。つまりアレクサンドロスとプロティノスは、質料が非物体であり、また無性質であるという二点について、少なくとも形式的には足並みを揃えていたことになる。

ただしアレクサンドロスが、第一質料とその上に備わる性質との関係を以下のようにも記述していることには注意を払うべきだろう。

というのも、質料はそれ自身の説明規定に従えば無性質、無形であるが、神的物体(天体)に由来してその内に生じる力により形相を与えられ、また形を与えられることにより、現実的に物体となり、またそうありもするのである […]

ἡ γὰρ ὕλη κατὰ τὸν ἑαυτῆς λόγον ἄποιός τε οὐσα καὶ ἀσχημάτιστος ὑπὸ τῆς ἀπὸ τῶν θεῶν σωμάτων δυνάμεως γινομένης ἐν αὐτῇ ἐνεργείᾳ σῶμα ἔστι τε καὶ γίνεται, εἰδοποιεῖται τε καὶ σχηματίζεται[...]

Quae.II.3 49,30-34.

このように、アレクサンドロスは質料そのものが転化の主体となる、すなわち「現実的に物体(ἐνεργείᾳ σῶμα)」となるようなケースを認めている。すなわち、彼にとっての質料は、何らかの形相に相對するとき、それを自身が有する属性として獲得するのである。

既に見た通り、アレクサンドロスが第一質料に関して語る無性質、無形相という特徴づけは、本論攷では強調されないものの、プロティノスの質料観にも共有されている。また上の引用は、アレクサンドロスの第一質料が現実的に物体として成立する場面を描いており、そこには非物体という語は見出されないものの、物体以前の第一質料という少なくとも形式上プロティノスと並行するよう見えるアイディアが見て取られるのである。もし以上を両者が共通して承認する質料の特徴づけと理解することが可能であれば、やはりプロティノスにとって質料論の争点は、質料自身が転化の主体となるか、つまり受動・非受動の別にあるのではないかという想定が成り立つであろう。そしてこの非受動性という問題は、先行する諸論攷では議論の中心主題となつてこなかったものなのである。

以上見てきたように、本論攷で扱われる受動・非受動は、形相との関わり合いにおいて質料そのものが転化するか否かという点に関わる。それでは、本論攷においてプロティノスが

⁹⁶ 44(VI.3) 3,17-18.

目論んでいたことは、ペリパトス派その他の受動を伴うものとしての質料理解を棄却あるいは修正し、『ティマイオス』における「受容体」の説明と一致する原理を質料概念の内実として採用した、という単純な図式に収まるだろうか。つまり、プラトンが「受容体」を非受動なるものとして説明したことを受け、プロティノスはそれを自身の質料概念へと転用したということなのだろうか。事態はそう単純ではない。というのも、『ティマイオス』の記述を確認する限り、プラトンの考えた受容体は決してプロティノスの想定する非受動性を備えたものとしては描かれていないからである。まずはこの点を確認するために、プロティノスが引用する『ティマイオス』中の箇所を見てみよう。

さて、同一の言論があらゆる物体を受け入れる本性のものについてもまた成り立つ。それは、常に同一なるものと呼ばれなければならないのだ。というのも、それはそれ自身の力から逸脱することは全くもってないからである——それは常に全てを受け入れるが、そこに入ってくる類似の姿をひと時も決して獲得していないのだから。何故なら、それは本性的にあらゆるものに対して刻印を刻み込まれる土台としてあるのであり、入り込んでくるものによって動かされ、また形づけられ、それらの故にその都度別々の現れ方をとるのである——

ὁ αὐτὸς δὴ λόγος καὶ περὶ τῆς τὰ πάντα δεχομένης σώματα φύσεως. ταῦτὸν αὐτὴν αἰεὶ προσρητέον· ἐκ γὰρ τῆς ἑαυτῆς τὸ παράπαν οὐκ ἐξίσταται δυνάμει—δέχεσθαι τε γὰρ αἰεὶ τὰ πάντα, καὶ μορφήν οὐδεμίαν ποτὲ οὐδενὶ τῶν εἰσιόντων ὁμοίαν εἴληφεν οὐδαμῆ οὐδαμῶς· ἐκμαγεῖον γὰρ φύσει παντὶ κεῖται, κινούμενον τε καὶ διασχηματιζόμενον ὑπὸ τῶν εἰσιόντων, φαίνεται δὲ δι' ἐκεῖνα ἄλλοτε ἄλλοιον—

Tim. 50b5-c4.

このように、『ティマイオス』の記述には曖昧さが残るものの、特に後半部にある刻印の土台に比された特徴を見る限り、「受容体そのものは転化を被らない」というプロティノス流のアイディアをここから即座に導くことは難しいと思われる。実際、既に言及した中期プラトン主義に区分されるプラトン派の資料からは、彼らが以上の記述をむしろ正確に字義通り解釈し、受容体を転化するものと理解していた痕跡を確認することが出来る⁹⁷。他方、このプラトンの記述の内、プロティノスが質料に認められる非受動性の根拠として計 3 度引用するのは、「それ自身の力から逸脱することは全くもってない」という下線部の表現である。この点だけを取り上げるならば、先行する解釈に対しプロティノスの読解を優位に置くことの必然性は全く無いと言ってよいだろう。

⁹⁷ プロティノス以前のプラトン派が問題としたのは、質料相当の概念がそれ自体で物体なのか、あるいは付帯的にそうなのか、という点に集中していた。例えば、プルタルコスはその物体とし、アルキノオスやアプレイウスらは付帯的にのみ物体であり、質料それ自体としては物的でも非物的でもない、などとするヴァリエーションが報告されている。この点を巡る簡潔なまとめについては、Noble(2013), 235-236 を参照。

ただ、これをプロティノスによる『ティマイオス』の誤読、あるいは恣意的な解釈として片づけることもまた早計だと思われる。以上のプラトン派内部での『ティマイオス』解釈上の断絶——それは即ち中期プラトン主義と新プラトン主義を分かつ重要な転換点の一つともなり得るが——には、より広い哲学史的な文脈の中で検討されるべき要因が見出されるからである。例えば Noble は、上記の『ティマイオス』と本論攷における解釈上の齟齬を埋めるための方針として、その間にアリストテレスによる『ティマイオス』解釈が介在していることを指摘した。Noble によれば、アリストテレスの読解がもたらした新たな受容体理解は、「四元素に対し、ただ一種類の基体があること」、「その質料は、それ自体では如何なる属性も持たず、また四元素と異なり、生成消滅を被らない」という点にまとめられる⁹⁸。これは、上で確認したアレクサンドロスとプロティノスの質料理解に含まれている条件と一致するだろう。つまりプロティノスは、『ティマイオス』の権威のみを前面に押し出して強弁しているのではなく、あくまでアリストテレスの記述を根拠として展開した質料概念の内実を批判的に検討し、妥当な解釈を探っているのである。このような複雑な前提を踏まえ、第8章から質料の非受動性を論証する議論が展開されることになる。

直接の論敵がペリパトス派であるという想定のもと、今一度プロティノスによるペリパトス派批判の要点へと立ち返って考えてみよう。既に見たように、両者の質料概念は、非物体、無性質というあり方を共有していた。その上でプロティノスは、まさにそのあり方故に非受動性というあり方が必然的に付随する、という形式の論証を行うのである。プロティノスの議論全体を扱うことは出来ないため、本章の主旨に沿う限りで関連箇所を確認してみたい。

次いで、もし一般的に言って、転化するもの全てが同一の形相に留まりながら転化するのであり、またその仕方は自体的なものではなく付帯的なものなのだとすれば、またもし転化するものは留まっていなければならず、その留まる部分はそのもの自体の受動を被る部分ではないとすれば、以下二つの選択肢の内いずれかが必然となる。すなわち、質料が転化しそれ自身から逸脱するか、あるいは自身から逸脱することなく転化もしないか、である。しかし、もし人が、質料は質料である限りにおいて転化するのだと述べたとすれば、その人はまず、質料がどの点で転化することになるのか言うことが出来ないだろう。そして、以上の仕方によっても、質料それ自体は転化しないということに同意することだろう。

ἔπειτα δέ, εἰ ὅλως τὸ ἀλλοιούμενον πᾶν δεῖ μένον ἐπὶ τοῦ αὐτοῦ εἶδους ἀλλοιοῦσθαι, καὶ κατὰ συμβεβηκότα ἀλλ' οὐ καθ' αὐτά, εἰ δὴ δεῖ μένειν τὸ ἀλλοιούμενον καὶ οὐ τὸ μένον ἐστὶν αὐτοῦ τὸ πάσχον, δυοῖν θάτερον ἀνάγκη, ἢ ἀλλοιουμένην τὴν ὕλην αὐτῆς ἐξίστασθαι, ἢ μὴ ἐξισταμένην αὐτῆς μὴ ἀλλοιοῦσθαι. εἰ δέ τις λέγοι μὴ καθ' ὅσον ὕλη ἀλλοιοῦσθαι, πρῶτον μὲν κατὰ τί ἀλλοιώσεται οὐχ ἕξει λέγειν, ἔπειτα ὁμολογήσει καὶ οὕτω τὴν ὕλην αὐτὴν μὴ ἀλλοιοῦσθαι.

⁹⁸ Noble(2013), 235.

ここで批判対象となっているのは、第二質料の転化の仕方を第一質料へと適用する仕方の説明なのと思われる。質料の内に留まる部分と転化する部分をとともに見出し、留まる部分にとって付帯的と見なされる新たな状態を獲得するという図式は、あくまで既に特定の性質を獲得している第二質料にしか当てはまらない。何故なら、第一質料は何も所有していないので、そもそも留まる部分を措定できないからである。この点は、第一質料と第二質料を連続的に捉えるアレクサンドロスの質料観が抱える根本的な困難だと言えよう。つまり、青銅と特定の形態が組み合わさることによりゼウス像が成立するとしたとき、以上の説明は問題なく適用可能なものと思われる。他方、第二質料の形相に対する相対的なあり方を突き詰めて考えていくとき、アレクサンドロス自身が認めるように、いずれ単純物体としての元素が出来する。この単純物体に関わる質料はもはや第一質料なのだから、上に述べた転化の仕方を当てはめることは出来ないのである。Strangeはこの事態を分析し、「質料に対して直接形相を述語づけられるか否か」という論理的観点での相違に一致するものと考えた⁹⁹。すなわち、この青銅に対しゼウス像を述語づけることは出来るが、第一質料に対し水を述語づけることは出来ないという違いである。これは、質料と形相からなる複合体の説明規定の内に質料を含み込むか否かという問題でもあるだろう。つまり、完成した青銅製のゼウス像は、その説明規定に青銅としてのあり方を含み込んでいるが、他方の単純物体としての水は、それが水たることの説明規定の内に第一質料のあり方を含むことは出来ない。プロティノスが根本的な問題と捉えているのは、以上の通り本来区別されるべき第一質料と第二質料のあり方が、質料というただ一つの名づけのもとに包摂されていることなのだと考えられる。

第三節：物体の大きさに関する問い

第16章から第18章までは、質料と大きさ(μέγεθος)の関係が主題となる。プロティノスは、これまで見てきた質料に対する否定的な特徴づけを受けて、質料に大きさを認めることも拒否する。物的な第一質料を措定する学派は殆ど検討の埒外に置き、第一質料は非物体であることを前提として議論を進めてきた本論攷の終盤に至って改めて大きさの否定という論点を取り上げられることは極めて重要である。というのも、三次元的延長としての大きさの有無はプロティノスにとって物体・非物体を分かつ基準だからである¹⁰⁰。第一質料のみを質料と認め、それが物体として存在することを否定するプロティノスにとっては、可感的世界を直接構成する三次元的物体の成立を、第一質料による貢献とは独立に説明する義務が生じるのだと言えよう。これまでの内容を踏まえ、本論攷において大きさという論点が扱

⁹⁹ Strange(1981), 136-138.

¹⁰⁰ Chiaradonna(2012), 84.

われることの意義を考察してみたい。

さて、何らかのロゴスがやってきて、そのロゴス自身が望んだ限りで質料を導き、ロゴス自らそれに大なることを授けることで、それを大なるものと為したのであるが、他方で実際その質料は大なるものではなく、またそうなることもないのである。というのも、質料の上にある大なることは、大きさ（そのもの）だったことになってしまうからである。それ故、もし誰かがこの（大なる）形相を取り去ったとすれば、その基体はもはや大なるものであることも、またそう現れることもなくなり、むしろ、もし大なるものとなったのが人間や馬だったとしたら、そして馬とともにその馬の大なることがやってきたとしたら、馬が去ったときにその大なることもまた去るのである。

καὶ μὲν τις ἐλθὼν λόγος ἀγαγὼν εἰς ὅσον αὐτὸς ἤθελεν ἐποίησεν αὐτὴν μέγα παρ' αὐτοῦ τὸ μέγα περιθίεις αὐτῇ οὐκ οὔση, τοῦτο δὲ οὐδὲ γενομένη· τὸ γὰρ ἐπ' αὐτῇ μέγα μέγεθος ἦν. ἐὰν οὖν τις τοῦτο ἀφέλη τὸ εἶδος, οὐκέτ' ἐστὶν οὐδὲ φαίνεται τὸ ὑποκείμενον μέγα, ἀλλ' εἰ ἦν τὸ γενόμενον μέγα ἄνθρωπος καὶ ἵππος καὶ μετὰ τοῦ ἵππου τὸ μέγα αὐτοῦ ἵππου ἐπελθόν, ἀπελθόντος τοῦ ἵππου καὶ τὸ μέγα αὐτοῦ ἀπέρχεται.

26(III.6) 16,1-8.

プロティノスがここで強調したいのは、物体が有する大きさの成立は、ロゴスとしての形相の原理が担うということである。他方の質料は一切転化せず、それ自体で大きさを得ることもないという点については、これまで確認してきたことから理解されるであろう。大きさが形相であるというプロティノスの立場は、既に第12論攷の時点で明確に示されていたものである。しかしながら、本論攷が問題とするのはあくまでその P-形相と質料とが相対するときの質料の振る舞いであり、その中には大きさの形相により質料が影響を被ることはないという重要な二者間の関係を問う視座が含まれている。このような論点を取り上げる背景としては、先行する第12論攷の説明を経てなおプロティノスの周囲に、大きさの形相が質料の転化を引き起こすという「誤解」から抜けきれない人々が存在していたからかもしれない。いずれにせよ、これは質料そのもののあり方を対象とする考察からは掬い切れない問題であり、新たに本論攷で取り上げられて然るべき論点なのである。

Fleet は、伝統的にこの大きさ、つまり量概念（カテゴリー）に関して、それを性質と区別しかつ優位性を持たせる勢力が存在したことを指摘している¹⁰¹。また彼は、その傾向がアカデメイア内外に見出され、プロティノスがこの箇所では批判対象としているのはその傾向に与する人々だと考えている。しかしながら、この傾向もまた『ティマイオス』の読解にある意味で正確な仕方で基づいたものだと言えよう。Fleet は、ここでプロティノスが目論んでいるのは、大きさもまた性質と平等な仕方で形相に下屬させるというアイデアだったと

¹⁰¹ Fleet(1995), 251-255.

考えているが、その指摘は検討するに値するだろう。すなわち、既に成立している可感的事物を分析する際に、そこには平等な仕方でも量と性質が見出され、それぞれが言語の上で優劣のないカテゴリーに収まることはプロティノスも認めるように思われる。しかしながら、あくまで発出に端を発する可感界の成立という観点に即せば、そこには大きさの成立が他の性質（諸カテゴリー）に対し論理的に先立つ可能性があり得るからである。プロティノスがしばしば単に物塊(ὄγκος)として表現する対象は、質料以後、可感的事物の成立以前の段階に属す、形而上学と自然学の交差点に位置するものと思われる。次章では、この概念の内実を検討対象としていきたい。

結

以上、プロティノスが本論攷に独自の論点として取り上げた問題と解決案を紹介し、それがどのような目論見のもと構想されたものかを見てきた。本論攷においては、質料が非物体的なものであること自体は前提とされた上で、更にそれと形相との関係、延いてはその結果としての物体の成立という場面が問題とされている。そうした問題に対し、プロティノスがプラトンの記述を盲信することなく、また彼以前のプラトン派の解釈に依存することもなく、むしろペリパトス派を中心とした他学派の批判に応答し、またその議論を駆使し、場合によってはその矛盾を突くかたちで自身のプラトン哲学の正当性を主張する様はいくらか確認出来たと信じたい。本論攷終盤に扱われる物体の持つ大きさという論点は、本論攷のメインテーマとして取り上げられることが少ない。しかしながら、物体としてのあり方の根拠を形相的原理の側に見出すという方針は極めて画期的であり、また本論攷の筋立て上必然的な仕方でも導かれていると思われる。

これは、ある面では、イデアが物体のあり方の原因となることを批判の要点としたアリストテレスによるイデア論評に対する反論とも見なすことが出来るかも知れない。

さて、人が最も行き詰まり得るのは、一体諸形相が、永遠的かあるいは生成及び消滅に関わるかに関わらず、可感的諸事物に対して一体どのような貢献を為すのか、という点である。というもの、これらはそれら（可感的諸事物）の如何なる運動や転化の原因でもないからである。

πάντων δὲ μάλιστα διαπορήσειεν ἂν τις τί ποτε συμβάλλεται τὰ εἶδη τοῖς αἰδιόις τῶν αἰσθητῶν ἢ τοῖς γιγνομένοις καὶ φθειρομένοις· οὔτε γὰρ κινήσεως οὔτε μεταβολῆς οὐδεμιᾶς ἐστὶν αἷτια αὐτοῖς.

Met. 991a8-11.

このように、物体から独立した非物体的原理を立て、後者を前者の原因として理解するとき、非物体が物体を成立させるという一見説明困難なプロセスの導入に説得力を持たせる義務が生じる。O'Brienの一連の研究及びそれを巡る研究者間の議論に基づき、プロティノスに

とっては質料もまた生み出されるものとする見方が学会の共通了解となって久しいが¹⁰²、この図式は『ティマイオス』において自立的に存在していたかの如く描かれる受容体の出自を説明することが出来る一方で、非物体的なものに由来して物体が生じるという直観的には理解し難い事態に改めて直面することとなる。プロティノス的な仕方で非物体的な形相原理の側に物体性の根拠を見出すことは、プロティノスによる可感的世界のあり方を説明する上で必要不可欠な論点だったのだと考えられる。

¹⁰² O'Brien(1991).

第四章

プロティノスにおける物体の問題 —嵩(ὄγκος)と性質の関係に着目して—

序

プロティノスは、プラトン主義者という立場をとる中で、イデア的原理を真なる実在と見なしている。また他方、物的なあり方をとる可感的事物については、その上位に位置するイデア的原理に由来して成立する劣った存在性格を備えたものと考えた。しかしこのことは、プロティノスが可感的事物を軽視していたということの意味しない。というのもプロティノスは、可感的世界の存在を素朴に措定した上で探求を開始するのではなく、むしろその成立過程と構造を積極的に説明しようと試みているからである。既に言及した通り、そこでの説明は基本的にプラトンの『ティマイオス』における世界制作神話をモチーフとするものの、全宇宙の一方の極を担う「場」「受容体」をも無条件に前提される原理として扱わず、同様に産出されたものと見なす点で、極端な一元論としての独自性を持つ。加えてその議論の背景には、プラトンには想定し得なかったペリパトス派的実体論、ストア派的物体論に対する批判という文脈が控えているため、同時代的な論争の状況を踏まえてプロティノスの意図を推し量る必要があるだろう。

このようにプロティノスが、素朴な実在としての可感的事物を前提せず、むしろその成立過程の説明を哲学的議論の俎上に載せたことは、一者概念を起点に据えてプラトン主義の先鋭化を進める彼にとって重要な論点を含んでいたものと思われる。ただし、その問題意識を支えているのは、可感的事物に対する否定的、懐疑的な立場ではない。むしろプラトンの立場を受け継ぎ、可感的世界の成立に際してイデア的原理が果たす貢献とは如何なるものか、徹底的な吟味とともに問うているのだと言えよう。つまりプロティノスは、プラトン主義を標榜する限り、直観的には相容れない性質の領域と思われる可感的世界のあり方に対し、イデア的原理が原因としての立ち位置を占めるとはどのような事態なのか、突き詰めて考察を行う必要があると考えているのである。

こう考えるとき即座に持ち上がるのが、如何にして非物体的原理としてのイデアが、物体に特有のあり方を成立させる原因であり得るのか、という難問である。本章では、この物体の成立という場面に定位しながら、プロティノスの構想するイデア的原理を原因とした可感的世界の構造について、その内実をいくらか明らかにしてみたい。

第一節：嵩というあり方

以上の問題を考えるにあたって、まずはプロティノスが念頭に置く物体(σῶμα)・非物体(ἄσῶματον)の境界を明確にしなければならない。物体を所与のものとは認めず、質料・形相という非物体的要素から成立する複合体と理解するプロティノスにとっては、非物体から物体が成立する際の論理的、形而上学的ステップを示す義務が生じるからである。先ずは、非物体的原理としての知性から連なる発出の過程を描いた場面から、物体の位置取りを示す記述を取り出してみよう。

第4論攷「魂の本質について、第1篇」においてプロティノスは、先立つ第2論攷「魂の不死について」で確認、導入された可知的(νοητόν)・可感的(αἰσθητόν)という大きな二区分を前提とし、さらにその二領域のいわば結節点を追求してゆく。これは、プロティノス自身が明記するように¹⁰³、『ティマイオス』35a1-4における「イデアと物体の間の第三の種類」についての解釈でもある。

第4論攷で示されるのは、分割という観点に即して階層的に区分された、可知的世界及び可感的世界に含まれる全存在のいわば見取り図と言えよう。そこでは、分割を受け入れる程度と一性・多性の度合いが対応させられている。すなわち、高度の一性を備えた可知的実体から、多性の高い可感的事物へと向かうにつれて、より分割を受け入れる程度が高くなる。そして、この見取り図の中で下位の末端に置かれるのが物体である。

では、こう語ろう。すなわち、あるものは第一義的な意味で分割可能であり、それ自体の本性において分散し得るものである。それらの部分はいかなる部分もその他の部分と同一ではなく、また全体とも同一ではないのであり、またそれらの部分は全ての部分、すなわち全体よりも小さくあらねばならない。そしてそれらは、可感的な大きさ、嵩であり、それらの内の各々が固有の場所を持つのであって、同一のものとして同時に多くの場所にあることは不可能である、と。

λέγωμεν δὴ τὰ μὲν πρώτως εἶναι μεριστὰ καὶ τῇ αὐτῶν φύσει σκεδαστά· ταῦτα δὲ εἶναι, ὧν οὐδὲν μέρος ταυτόν ἐστιν οὔτε ἄλλω μέρει οὔτε τῷ ὅλῳ, τό τε μέρος αὐτῶν ἔλαττον εἶναι δεῖ τοῦ παντός καὶ ὅλου. ταῦτα δὲ ἐστὶ τὰ αἰσθητὰ μεγέθη καὶ ὄγκοι, ὧν ἕκαστον ἴδιον τόπον ἔχει καὶ οὐχ οἷόν τε ἅμα ταυτόν ἐν πλείοσι τόποις εἶναι.

4(IV.2) 1,12-17.

ここに示された分割という事態は、「場所」との関係において語られるいわば物理的現象のことである。また分割とは多性を前提とした概念であるが、ここで念頭に置かれている多性は、一定の場所を占める「可感的な大きさ」に関連付けられていることが分かる。そしてこの大きさが、言い換えのようなかたちで「嵩(ὄγκος)」という名前を与えられているのであ

¹⁰³ 4(IV.2) 2,49-52.

る。

この直後には、「以上に対置される」ものとしての可知的実体に関する説明が続く。そこにまとめられる特徴は、直前に述べられた物体の特徴と対を為す仕方で描かれる。

また他方には、以上に対置される実体がある。それは、決して分割を受け入れない、すなわち部分を持たない、分割不可能なものであって、たとえ考えの上であっても、如何なる広がりも受け入れず、場所を必要とせず、また部分に即しても全体に即しても（可感的）諸存在の如何なるもの内にも生ずることはなく、いわばあらゆる（可感的）諸存在の上に同時に乗り上げているのである[...]

ἡ δὲ ἐστὶν ἀντιτεταγμένη ταύτη οὐσία, οὐδαμῆ μερισμὸν δεχομένη, ἀμερής τε καὶ ἀμερίστος, διάστημα τε οὐδὲν οὐδὲ δι' ἐπινοίας δεχομένη, οὐ τόπου δεομένη οὐδ' ἐν τινὶ τῶν ὄντων γιγνομένη οὔτε κατὰ μέρη οὔτε κατὰ ὅλα, οἷον πᾶσιν ὁμοῦ τοῖς οὐσίαις ἐποχομένη, [...]

4(IV.2) 1,17-21.

以上の相反する存在性格をそれぞれ確認した上で、続けてプロティノスはそれら二領域が接合する局面へと探求を進めてゆく。

さて、可感的事物に先立ち、いくらかその近くに位置を占め、またその内に存する別の本性がある。それは、物体のように第一義的な意味で分割可能ではないが、物体の内では分割可能となるものである。つまり、物体が分けられるとその物体の内にある形相も分割されるのであるが、しかしその形相は、同一のものが多なるものとなる仕方で、分割された物体の各々の部分に全体として内在している。（その形相は）あらゆる点で分割可能なものとなるので、それらの各々は互いに完全に分離しているのだが。

πρὸ μὲν τοῦ αἰσθητοῦ καὶ ἐγγύς τι τούτου καὶ ἐν τούτῳ ἄλλη ἐστὶ φύσις, μεριστὴ μὲν οὐ πρότως, ὥσπερ τὰ σώματα, μεριστὴ γε μὴν γιγνομένη ἐν τοῖς σώμασιν· ὥστε διαιρουμένων τῶν σωμάτων μερίζεσθαι μὲν καὶ τὸ ἐν αὐτοῖς εἶδος, ὅλον γε μὴν ἐν ἐκάστῳ τῶν μερισθέντων εἶναι πολλὰ τὸ αὐτὸ γινόμενον, ὧν ἕκαστον πάντη ἄλλου ἀπέστη, ἅτε πάντη μεριστὸν γενόμενον·

4(IV.2) 1,31-38.

ここでは、物体に依拠するかたちで付随的に分割を被る存在が想定されている。つまり、この場合の分割とは物体としてのあり方を前提した上で説明されるものであり、それ故物体が有する特徴の側にその原因が求められることは明らかだろう。また、ここで「形相(εἶδος)」として指示される対象は、後に物体に備わる諸性質（例えば、色）と同一視されていること

が明らかとなる¹⁰⁴。つまり、この形相としての性質はそれ自体では分割を被らないが、物体の内にある限りでは、その物体に依拠するかたちで分割を被るのだと考えられている。また更に、ここで言及された「分離」という事態は、物体に固有の特徴である大きさの点で分割され、また場所に関して相離れた状態を指すだろう。これらの点から、プロティノスは物体・非物体を峻別する基準を「大きさ」「広がり」の有無に求めているという見通しが成り立つ（これらの特徴をまとめて以後「三次元的延長」と記すことにする）。

以上では、物体と性質の関わり合いという大まかな図式のもとで事態が捉えられていた。それでは、先に性質を受け取るものとしての物体があり、その後諸性質がそこへと加わるかたちでやってくるのだろうか。他の論攷における記述を確認するならば、プロティノスはそう考えていないということが即座に判明する。例えば第12論攷「質料について」では、性質としての形相が初めて直接相対するものは、物体ではなく質料であるということが明確に確認される。ところで、あくまで物体を複合的なものと見なすプロティノスにとって、その複合以前の段階に位置する質料は非物体として理解されていることに改めて注意しなくてはならない¹⁰⁵。その上で、そこへと備わることになる諸性質もまたそれ自体では非物体であるということを踏まえれば、プロティノスにとっての物体とは、非物体的なもの同士が何らかの仕方に関わり合う中で生じるものだけということになる。そうだとすれば、物体の成立において三次元的延長が成立するのはいったいどの時点なのか、という素朴な問いが生まれるだろう。

この点に関して Brisson は、上に挙げた「嵩」概念の位置付けを重要なものとして取り上げた。

従って、形相を受け取ることになるもの（つまり質料）は、嵩であってはならない。そうではなくて、嵩になると同時に他の性質をも受け取るのである。またそれは、嵩（というあり方）に対するいわば第一の適性なので、嵩としての現れを有するのだが、他方それは空虚な嵩なのである。

οὐ τοίνυν ὄγκον δεῖ εἶναι τὸν δεξιόμενον τὸ εἶδος, ἀλλ' ὁμοῦ τῷ γενέσθαι ὄγκον καὶ τὴν ἄλλην ποιότητα δέχεσθαι. καὶ φάντασμα μὲν ἔχειν ὄγκου ὡς ἐπιτηδειότητα τούτου ὡσπερ πρώτην, κενὸν δὲ ὄγκον.

12(II.4) 11,25-28.

Brisson は、以上の記述を1つの根拠として、嵩を「形相を欠いた質料の或る量(une quantité de matière informe)」と見なした。またそれを「量を備えるが、性質を備えないもの」と規定することで、質料と物体の中間段階に据えた。すなわち、量も性質も欠く質料が、この嵩と

¹⁰⁴ 4(IV.2) 1,38-41.

¹⁰⁵ 26(III.6) 6,3.

いう段階を経て、量と性質をともに備えた物体へと移行するという図式である¹⁰⁶。この理解を踏まえ Brisson は、嵩を「性質が付け加わるための土台」としての役割を果たすものと考えた¹⁰⁷。

このように「無性質だが量のみを備える」あり方を嵩という独立した段階として規定し、また特定の物体が成立する際の土台として考えるとき、それはいわゆる数学的実体としてのあり方にも接近するだろう。例えば Long は、嵩としてのあり方を特定の物体が占める容積に類するものとして理解している¹⁰⁸。これは嵩を数学的実体と同一視する解釈の路線である。また Igal は、この嵩としてのあり方を物体の側から逆算して考え、物体から可感的性質を捨象したものだと注記している¹⁰⁹。これらは、嵩というあり方が物体に関わる形相、あるいは性質から離れたところに成立すると考える点で軌を一にする解釈傾向と言えるだろう。

しかしながら、以上のような方針にはいくつか問題が指摘され得る。まず、第 26 論攷「非物体的なものの非受動性について」において再三強調されるように、プロティノスの構想する質料はそれ自体が何かに転化することではなく、その非受動性を保持し続けるものと考えられている。従って、本章が問題とする三次元的延長に関しても、それを以上の原則から外れる特権的な属性として扱うためには、それ相応の理由、あるいはテクストの根拠が求められるだろう。しかしながら、上に挙げた解釈者達はその点を説明していない。

また、数学的実体を扱うように、特定の可感的事物に対応する質料が予め措定されており、それが後に三次元的延長を備えるという図式をとることに疑問が残る。何故ならこの点についても、既に触れた非受動性を承認する限り、質料が現実的な仕方で特定の物体になることはあり得ないからである。つまり、質料が特定の物体の構成に対し直接関与することはないのである。「一つで、連続的で、無性質と言われる質料¹¹⁰」というプロティノスの記述もそのことを裏打ちするだろう。あくまでプロティノスの質料は、『ティマイオス』の「場」概念を引き継ぐものであって、「特定の事物にとっての」質料ではない。

これらの難点を引き受け、以下では Brisson が想定するような嵩という独立した質料からの移行段階を導入することなく、プロティノスが独自の仕方で構想する質料概念を考慮した上で、三次元的延長が成立するプロセスの解明を試みる。この問題をもう少し詳しく検討するために、次節では一旦視点を移し、物体としてのあり方の成立に関するプロティノスの考えを見ていきたい。

第二節：物体性の問題

¹⁰⁶ Brisson(2000), 100.

¹⁰⁷ Brisson(2000), 107-110.

¹⁰⁸ Long(2022), 144-145.

¹⁰⁹ Igal(1985), 276.

¹¹⁰ 12(II.4) 8,1-2.

前節において、プロティノスが物体・非物体という区別の基準となる存在性格を三次元的延長に求めていることを確認した。しかしながら、物体の規定に関わる限りでこの点のみを取り上げるならば、それを特異なアイデアと見なすことは出来ない。というのも、プロティノスの時代に至るまでに、三次元的延長を基にした物体の規定を巡る議論の形跡が確認されるからである。以下に見るように、プロティノスも恐らくそうした議論の文脈を知っていたものと思われる。プロティノスが物体の実在性を拒絶する仕方での極端なアイデア優位主義を主張していないのであれば、むしろ他学派による物体の規定をある程度まで共有しているものと想定する方が自然であろう。実際プロティノスも、物体の実在性を保証するかに見える「堅固さ」「反発」「打撃」といった特性や現象について、それがいくらかの人々の視線を可感的世界に引き留める危険性を示唆するものの、その存在自体に根本的な懐疑を投げかけているようには思われ¹¹¹ない。彼にとって重要なのは、そうした物体のあり方が何に由来するのかを究明することである。しばしば強調されるように、彼の問題意識の所在は、物体のあり方を可感的世界の範囲内では説明し尽くすことが出来ないと考える点にあることを踏まえれば、あくまでプロティノスにとっての課題は、物体のあり方を規定することのみに留まらず、それを産出し規定する非物体原理との関係を説明することまでを含み込むのだと考えられよう。

ところで Chiaradonna によれば、三次元的延長の有無を物体・非物体の区別に適用するやり方は、プロティノスが初めて体系的な仕方¹¹²で導入したものだという。実際プラトンは『ティマイオス』において、物体としてのあり方を可視性と可触性に求めている。また他方の魂については、むしろ物体から独立したかたちでの三次元的延長を認めているような記述が散見される¹¹²。いずれにせよプラトンの視野には、少なくともプロティノス及びその同時代人たちと共有し得るようなかたちでの三次元的延長という問題は含まれていなかった可能性が高い。従って、プロティノスが念頭に置く同時代的な議論の文脈を探ることが、必要かつ有益な作業となるだろう。

以上のように、プロティノスは物体が存在することを拒絶したいのではなく、物体のあり方を根拠づけることなしに物体を議論の基礎に据えることを批判している。例えばプロティノスは、物体を第一原理に据えるストア派を相手取り、以下のように述べる。

他方、もし三次元的延長を物体の共通点とするのであれば、彼らは数学的な物体のことを言っていることになる。これに対して、三次元的延長に抵抗を加えて、これを物体の共通点とするのであれば、彼らは一つのことを述べているのではないことになる。また抵抗とは、ある性質か、あるいは性質に由来するものである。ただ、その抵抗はどこからきたのであろうか。そして、その三次元的延長はどこから来たのであろうか、あるいは誰が延長したのであろうか。

¹¹¹ 10(V.1) 5,10-11., 26(III.6) 6,33-36.

¹¹² Chiaradonna(2012), 84.

εἰ δὲ κοινὸν ἐπὶ σώματος τὸ τριχῆ διαστατόν, μαθηματικὸν λέγουσιν· εἰ δὲ μετὰ ἀντιτυπίας τὸ τριχῆ, οὐχ ἓν λέγουσιν. ἔπειτα ἢ ἀντιτυπία ποῖον ἢ παρὰ ποιότητος, καὶ πόθεν ἢ ἀντιτυπία; πόθεν δὲ τὸ τριχῆ διαστατόν ἢ τίς διέστησεν.

42(VI.1) 26,20-24.

プロティノスが念頭に置く問題点は明確だろう。物体の成立を質料・形相の複合に求めることはストア派と共有しない前提だとしても、ストア派が措定する「無性質なる質料」としての物体にも必然的に認められる三次元的延長は、その成立の原因が問われなければならないと考えているのである。またそこには「抵抗」という性質が言及されており、ストア派がそれらの複合を物体の構成と見なすのならば、物体を成立せしめているそれらの要素各々についてもその出所を問う必要があるのだとプロティノスは考えている。

ここで興味深いのは、以上の仕方では批判を行う一方で、プロティノスもまた抵抗という性質をもたらす「物体性(σωματότης)」を、物体を物体ならしめる性質に含めていることである。例えば、第37論攷「全体的混合について」の末尾において物体性が論点として取り上げられる場面を確認してみよう。ここでの物体性とは、ある物体が別の物体を通り抜ける、すなわち場所に関して二つ以上の物体が共在することを拒む「濃密さ(πυκνότης)」に等しいものとして持ち出されている¹¹³。そこでの問題は、以下のような形式で問われる。

さて、我々は物体性について言及を行ったのだから、果たして物体性とは全て（の物体の構成要素）から成り立つものか、あるいは物体性とは何らかの形相であり、何らかのロゴスであって、これが質料の内に入って物体を作り上げるのかどうかを考察しなければならない。

ἐπεὶ δὲ ἐμνήσθημεν σωματότητος, ἐπισκεπτέον πότῆρα ἢ σωματότης ἐστὶ τὸ ἐκ πάντων συγκείμενον ἢ εἶδος τι ἢ σωματότης καὶ λόγος τις, ὃς ἐγγεγόμενος τῇ ὕλῃ σῶμα ποιεῖ.

37(II.7) 3,1-4.

この二つの選択肢の根本的対立は、物体性が存在することを物体の成立以前に認めるか否か、という点に見出されるだろう。プロティノスがここでロゴスの語を持ち出すこと背景には、いくつかの動機が隠れていると考えられる。一つには、既に存在している物体を分析した結果現れる名目的な「定義」を示すものとしてのロゴスに関わる。可感的事物に関わる定義づけに関しても、それが「何か」のみを示すのではなく、「何故か」を同時に示さなければならないと考えるプロティノスにとって¹¹⁴、この名目的定義は不十分なものである。言い換えれば、プロティノスが十全と考える定義は、その被定義項の範囲内で説明されるもの

¹¹³ 37(II.7) 2,37-38.

¹¹⁴ 38(VI.7) 2-4. この論点は、第5章にて詳しく扱う。

であってはならない。

Roux が指摘するように、この点に関してプロティノスが提示する問題枠組みに一致する記述が彼に先立つセクストス・エンペイリコスの著作の内に見出されることは、以上を考察する上で重要だろう¹¹⁵。セクストスは、『幾何学者達への論駁』にて以下の問いを提示している。

以上に加えて、もし長さや幅と深さの結合が物体を作るのだとすれば、それらの各々は、結合以前に自らの内に物体性といわば物体的なロゴスを含んでいるもののように思惟されるか、あるいは、それらが集まった後に物体が付加的な仕方で構成されたかのいずれかである。

πρὸς τούτοις, εἴπερ μήκους καὶ πλάτους καὶ βάθους σύννοδος ποιεῖ σῶμα, ἤτοι πρὶν τῆς συνόδου ἕκαστον τούτων νοεῖται περιέχον ἐν ἑαυτῷ τὴν σωματότητα καὶ τοὺς ὡσπερ σωματικούς λόγους, ἢ μετὰ τὴν τούτων συνέλευσιν ἐπισυνέστη τὸ σῶμα.

Adversus Mathematicos III 85,1-5.

このようにプロティノスのものと類似する選択肢を列挙した上で、セクストスはいずれの正当性も認めない。というのも彼によれば、前者の場合、その構成要素は既に物体性を有している物体ということになるし、また後者の場合、物体以前の長さ・幅・深さが集合した後何らかの仕方で物体へと変化することを認めざるを得ないが、そもそも変化を被るのは物体だという前提に違反することになるからである。ここからセクストスは、物体の認識不可能性を主張することになる。

こうしたアポリアに対するプロティノスの戦略は、物体としてのあり方を物体の構成要素に求めるのではなく、むしろその物体の外部にこそ物体性を保証する非物体的原理があると考えることである。このプロティノスの応答が直接セクストス及び懐疑派一般に向けられたものか否か、また仮にそうだとした場合、その間の議論が噛み合っているのか否かは、別の機会に検討すべき問題である。ただここで重要なのは、セクストスが物体というあり方の原因を考察するにあたって、現にある物体を直接構成する要素のみを検討対象としていることであろう。

またアフロディシアスのアレクサンドロスも、『問題集』II.14 という箇所、物体の定義を巡る問題提起を行っている。そこでの彼の論点は、物体の定義はあくまで思惟対象(νόημα)なのであって、物体から抽象されるかたちでしかあり得ないと考えることにある。その上で紹介される物体の定義が「三次元的な広がりを持つ可触的なもの(τὸ τριχῆ διεστὸς ἄπτόν)」というものである。アレクサンドロス自身の立場については不明瞭な要素を多く残すものの、ここで重要なのは、この物体の定義が諸物体間の差異を「取り去る(ἀφαιρεῖν)」中で「残された共通点(τὸ καταλειπόμενον κοινόν)」を析出させることにより成立するもの

¹¹⁵ Roux(2016), 19-20.

と考えられていることである。このやり方は、既に成立した物体の存在を前提としているだろう。プロティノスが批判しているのは、このような名目的定義としてのロゴスのあり方なのだと考えられる。

それではプロティノスを満足させるロゴスのあり方とはどのようなものなのか。先に挙げた選択肢に対する応答を確認してみよう。

一方で、もし物体とは質料とともにある全ての諸性質から成るものであるならば、物体性とはまさにその（諸性質と質料から成る）総体のことであろう。他方、もし（物体性とは）ロゴスであって、これがやってきて物体を作り上げるのであれば、このロゴスが全ての性質を包み込むようにして持っていることは明らかである。ただ、もしこのロゴスが、事物の何であるかを明らかにする定義という意味でのそれではなく、事物を作り上げるロゴスであるとすれば、それは質料を含み込まない[...]

εἰ μὲν οὖν τοῦτο ἐστὶ τὸ σῶμα τὸ ἐκ πασῶν τῶν ποιότητων σὺν ὕλῃ, τοῦτο ἂν εἴη ἡ σωματότης. καὶ εἰ λόγος δὲ εἴη ὅς προσελθὼν ποιεῖ τὸ σῶμα, δηλονότι ὁ λόγος ἐμπεριλαβῶν ἔχει τὰς ποιότητας ἀπάσας. δεῖ δὲ τὸν λόγον τοῦτον, εἰ μὴ ἐστὶν ἄλλως ὥσπερ ὀρισμὸς δηλωτικὸς τοῦ τί ἐστὶ τὸ πρᾶγμα, ἀλλὰ λόγος ποιῶν πρᾶγμα, μὴ τὴν ὕλην συμπεριεληφέναι[...]

37(II.7) 3,4-10.

明言はされないものの、プロティノスのとる立場は後者に近いことが予想される。ここで言及されるロゴスは、引用部からも理解される通り、いわゆることばを用いた定義のことではない。質料と相対する中で可感的事物の成立に寄与する「形成原理」としてのロゴスである。ここで注意しなければならないのは、このロゴス自体は、物体において現実化することになる可感的な諸性質とは別のものだということである。この物体の成立に関わるロゴスは、物体性や三次元的延長といった物体特有の性質を含め後に現れることとなる可感的な全性質を備え、またそれを可感的なものとして与えると考えられているが、他方それ自体は可感的な事物から切り離された可知的な段階にあるとされ¹¹⁶、それ故非物的なものである。このようなあり方をとるロゴスと質料との関係に、物体の成立を問う鍵があるだろう。次節では、非物的な性質という段階から物的なあり方に基づく性質への移行という場面に着目し、その最中に認められる三次元的延長の成立、及びその成立に際して質料が果たす役割を検討する。

第三節：性質の量化

それでは、上位のロゴスという段階から可感的性質への移行とは、どのような事態として

¹¹⁶ 37(II.7) 3,14-15.

説明されるのか。ここには、質料との関係が重要な役割を果たす。前述したように、プロティノスの理解する質料概念は、非受動性という否定的な特徴づけをもって説明される。それ故、それ自体では「嵩を持たない(ἀογκος)」もの、つまり三次元的延長すら持たない非物体的なものであり、また未来永劫そのあり方が変わることはない。このこと故に、その質料が物体の成立に関して如何なる貢献を為すのか、延いてはそもそも存在論的に不要な概念なのではないか、という疑念が生じるだろう。これは、プロティノス自身が自覚していた論難である。というのも、プロティノスはこの点を巡る問題を想定問答の形式で検討しているからである。第 12 論攷では、以上の反論を念頭に置き、むしろ質料が物体の成立過程において果たす役割が語られる。

他方、質料が受け取るものを広がりにおいて受け取るのは、それが広がりを受け入れ得るものだからである。

ἡ δὲ ὕλη διὰ τοῦτο ἐν διαστήματι ἂ δέχεται λαμβάνει, ὅτι διαστήματός ἐστι
δεκτική·

12(II.4) 11,17-19.

これは、魂が示す「全ての形相を一挙に持つ」ような受け取り方との対比の上で強調される、より劣った仕方での受け取り方である¹¹⁷。ただ、「広がりを受け入れ得る」という表現により、質料自体が三次元的延長を獲得するのだと理解してはならない。プロティノスは第 26 論攷で、質料は如何なる点においても、それに相対する形相から影響を被ることはなく、現実的に何かになることもないということを主張しているからである。また前節末尾に引いたロゴスに関する記述では、物体性を「質料を含み込まない」仕方で説明していた。従って、物体が物体として有する特徴に質料が直接関わってはならず、またその全てが質料へとやってくる性質の側で保持されるものとならなければならない。

それでは、上で言及された広がりとはどのように理解されるべきか。Kalligas は、プロティノスが強調する質料の重要な特徴を踏まえて考えるべきだと指摘した¹¹⁸。すなわち、質料は上位原理であるロゴスから特定の事物を構成する諸性質を受け取るものの、それ自体の「無力さ」故に、その諸性質をかつてそうあったような渾然一体のものとして引き受けることが叶わないのである。また既に見たように、プロティノスは質料に相対する上位原理としてのロゴスに関して、それがそのロゴスに対応する物体を構成することになる全ての性質を含むものだという点を強調する。これは、第一節で確認した非物体的なものの特徴である、「広がりを持たず、場所を必要としない」あり方を反映したものである。すなわち、反対性質を含むあらゆる性質が共在することを許容するあり方である。だからこそ、可知的レベルでは「熱であり冷である」の如き事態が生じるのだと考えられる。他方、そのロゴスと質料

¹¹⁷ 12(II.4) 11,15-16.

¹¹⁸ Kalligas(2011), 767-768.

が相対するとき、質料はロゴスが含む全ての性質を一挙に現実化させることは出来ない。その結果、例えば熱・冷の如き反対性質に関しては、その一方が他方を弾き出すという仕方では存在することが出来ず、双方の共存は許されないことになる¹¹⁹。Kalligas は、この性質の一部のみしか現実化させられない質料の特性から三次元的「空間」が成立するのだと考えた。従って、あくまで大きさが備わるのは性質の方であり、質料の側ではない。こう考えるとき、少なくとも Brisson が想定したように、物体の成立は無性質なる嵩への性質の付与に基づくと考えることは正しくない。むしろ、物体を構成する要素そのものが P-形相としての性質の束なのであり、それらと同時に嵩というあり方も成立するのである。Emilsson が正確に指摘する通り、「初めに延長があり、その後に内在形相がやってきたのではない」と考えるのが妥当であろう¹²⁰。このことは、「場所は、質料と物体よりも後なるものである(ὁ δὲ τόπος ὕστερος τῆς ὕλης καὶ σωμάτων)¹²¹」とするプロティノスの見方とも一致する。Kalligas の如く三次元的延長の成立を説明することは、質料の非受動性という原則に抵触することなく、質料を三次元的延長の成立に関与させることを可能にする。またこの図式は、第一節で確認した第 4 論攷における一から多、凝集から分散という連続的階層の見取り図とも平仄が合うように思われる。

ここまですを踏まえ、嵩というあり方はどのように理解されるべきか。以上のように考えるとき、嵩概念の解釈はいくつかの可能性に絞られるように思われる。一つには、Brisson と異なり性質同士の交わりと三次元的延長の出現は同時的と考えるが、そこに後から論理的な先後関係を見出し、既に成立した物体を分析する中で得られる数学的実体に類するものとして嵩を捉えるやり方である。しかしながら、この方向性の解釈は、結局のところ特定の物体に備わる一定の量を抽象するのみに留まり、その成立過程を質料と形相の関わり合いにおいて上手く説明することは出来ない。

本稿が提案する解釈は、特定の物体が成立する場面のみならず、可感的世界全体が構成される場面を考える中で浮かび上がってくる。『ティマイオス』に範をとるプロティノスは、可感的世界の全体が上位原理により産み出されるものと考えた。特定の事物に限定されず、全宇宙を構成することになる全性質が三次元的延長を生み出すのだとすれば、それは、いわゆる「幾何学的空間」と一致するものとなる。つまりこのように、質料からも特定の物体からも離れた仕方でも成立し、あらゆる可感的事物を含み込む仕方で受け入れる空間のことを嵩として理解するやり方である。

数学的実体と言うとき、それはあくまで「何らかのもの」のそれであり、いわば限定された領域の内に見出されるものであろう。これは、De Risi が指摘するように、特定の（ペリパトス派的な意味での）実体の内にあるカテゴリーとしての量、すなわち一つの物体の内に見出される連続量を研究する幾何学のやり方である¹²²。他方、幾何学的空間というとき、そ

¹¹⁹ Cf. 26(III.6) 9.

¹²⁰ Emilsson(1990), 216-7.

¹²¹ 12(II.4) 12,11-12.

¹²² De Risi(2012), 145-146.

れは特定の事物に限定されることがない。このように、可感的事物に付帯する量という枠組みを離れ、独立した量一般として空間を扱うやり方は「完全に非アリストテレス的¹²³」であり、「場」概念を基礎に据えるプラトンの存在論の先鋭化を試みた結果として生まれてくる解釈なのだとと言える。

結

プロティノスの嵩概念は、Brisson が想定したように質料から地続きの段階として想定されるべきではなく、むしろ質料に相対するロゴスとしての諸性質が量化されるプロセスに即して理解されなければならない。従って、既に成立した嵩、物体が直接性質の土台となるのではなく、渾然一体となったロゴスとしての形相が質料の無力さ故に分散し、可感的性質として現れるときに三次元的空間としての嵩が同時に成立するのだと考えられる。こう想定するとき、そのプロセスにおいて質料が直接的な仕方で物体の構成要素に含まれることはないため、プロティノスが強調する質料の非受動性は保証され、また同時にその無力なる質料の存在を三次元的延長が成立するにあたっての要件に含めて解釈することが可能となるのである。またこの場合の質料は、特定の物体のみに関係する個別的なものではなく、いわば可感的世界の全体を下支えしている。その質料が形相を受け止めようとするときに嵩、つまり三次元的空間を伴う可感的世界の全体が成立するのだと考えられる。

従って、プロティノスの可感的世界と可知的世界は、物体・非物体という対立軸のもとに区分される一方で、視点を変えればその全体が形相的原理から成っているとも言い得るだろう。以下のようにプロティノスが、可感的世界はその「最初から最後まで」形相により占有されていると述べるのにはそのような理由が隠れているのだと考えられる。

いや、従って、(この世界の事物は) 最初から最後まで形相によって占有されているのである。すなわち、はじめに質料が元素の形相によって、次いでその形相の上に別の形相が、その上で更にまた異なる形相が、というように。それ故、質料は多数の形相により隠されているので、発見することが難しいとも言えるのである。更に言えば、その質料自体もまた終極にある一種の形相なのだから、この万有は形相であり、全てが形相なのである。というのも、その範型は形相だったのだから。

ἀλλ' οὖν εἶδεσι κατέσχηται ἐξ ἀρχῆς εἰς τέλος, πρῶτον μὲν ἢ ὕλη τοῖς τῶν στοιχείων εἶδεσιν, εἴτ' ἐπὶ εἶδεσιν εἶδη ἄλλα, εἶτα πάλιν ἕτερα· ὅθεν καὶ χαλεπὸν εὐρείν τὴν ὕλην ὑπὸ πολλοῖς εἶδεσι κρυφθεῖσαν. ἐπεὶ δὲ καὶ αὕτη εἶδος τι ἔσχατον, πᾶν εἶδος τόδε καὶ πάντα εἶδη· τὸ γὰρ παράδειγμα εἶδος ἦν·

31(V.8) 7,18-24.

¹²³ De Risi(2012), 148.

この視点に立つとき、プロティノスが主張する世界像の説明の内に、物体・非物体、あるいは可感・可知という厳格な二分法を持ち込むことはあまり意味を為さない。むしろ、直観的にはイデア的原理と相対するものにも思われる物体であるが、それをイデアに端を発する形相の集積と捉えるところに、プロティノスに独自と言い得るイデア的原理に基づいた可感的世界の説明が成り立つのだと言えよう。

第五章

プロティノスにおける「何であるか(τί ἐστίν)」の探求

序

「何であるか(τί ἐστίν)」と問うことは哲学的思索の出発点だろう。ソクラテス以来のこの原則をプロティノスも共有していることは、実際に彼の記述からもうかがい知ることが出来る¹²⁴。ただし、その探求の果てにある明確な「達成」と呼び得る段階とそこに至るまでの過程が一種独特の様相を呈していることは、彼の哲学観を推し量る上で注目に値すると思われる。それはすなわち、魂の可知的世界への上昇と、その結果として控える一なる究極原理の感得のことである。「何であるか」という探求のプロセスを一者への上昇というモチーフに重ね合わせて説明する様は、プロティノスの思想を所謂「新プラトン主義」的ならしめる重要な一側面である。

ときに「神秘的合一(unio mystica)」とも表現されるこの到達点は、我々の言語を絶する事態であり、仮に語られる場合でも、あくまで普遍性を欠く個人的経験としてのものに留まるかもしれない。少なくとも、言語による表現をもって他者にその境地を十全に伝達することは、原理上不可能である。ただその一方で、そこに至るまでの道筋について語ること、またその語りを耳にしたものが先駆者の轍を辿ることは、哲学的探求という仕方に即して万人に開かれた営みだとも言える。本章では、この点について、プロティノスの考えるディアレクティケーという営みが為し得ることを検討する。

とはいえ、ディアレクティケーという語に与えられる内実は、学派ごと、ときには同一学派内においても多様性を見せるが、プロティノスも例に漏れず、上述した彼独特の到達点の設定に連動するかたちで独自性を持つディアレクティケー理解を示していることも事実である。本章は、このプロティノス的ディアレクティケーの特徴を確認することからはじめ、その営みに与えられた意義を正確に見積もることを目標とする。その中で必然的に登場する「何であるか」という形式の問いに潜む、プロティノスに独自の視野を取り出してみたい。

既に何度か言及したように、プロティノスにとっての探求の果ては以上のような地点に求められる一方で、その出発点は可感的世界にある。「何であるか」の問いと密接に結びつくディアレクティケーは、この探求の道筋に重要な指針を与えるものである。またその後の

¹²⁴ 23(VI.5) 2,24-26. 「いかなるところでも『何であるか』は始点(ἀρχή)であり、また見事に規定されたものどのによって、多くの付帯性もが知られることになると言われているのだから。」

上昇という事態をプロティノスの問題意識に沿って言い換えるならば、それは互いに異質な二領域、つまり可感的世界と可知的世界を跨いだ跳躍である。後に見るように、この跳躍を可能にするものとしてプロティノスのディアレクティケーは構想されているのである。プロティノスにとって「何であるか」という問いが対象とするものを彼の構想する世界像との関係において正確に見定める中で、その意義を確認することが本章の目的である。

第一節：プロティノスのディアレクティケー

「何であるか」を知ることは、何かしらの本質を知ることと直結している。加えて、プラトン主義的世界観に従えば、「何(τι)」が示す領域はイデア的实在の為に確保されるものであり、あくまで可感的事物のあり方は「どのような(ποιόν)」を示すに過ぎない。これは、プロティノスがプラトンの記述を明確に意識しつつ踏襲する世界像である¹²⁵。従って、プロティノスの考える本質の探究は、専らイデア的实在の領域を対象とするものとなることが予想される。他方、否応なしに可感的世界に産み落とされる我々としては、イデア的实在としての本質を知ろうと欲するとき、何らかの手段をもってその上位の世界へとアクセスしなければならない。プロティノスは、この領域の探求と関係する手立てをディアレクティケーという名で呼んでいる。先ずは「ディアレクティケーについて」と題される第20論攷において、「何であるか」の問いを含むディアレクティケーというプロセスをどのように捉えているか確認しよう。

(ディアレクティケーとは、) 言葉を用いつつ各々のものについて、それが何であるか、またどの点において他の事物と異なっているのか、共通点は何なのかを語る事が出来る技能のことである。そうした手続きの中には、それらのうち各々のものがどこに位置するのか、それは「それであるところのもの」なのか、そして有るものどもはどれほどであり、また有るものとは異なる有らぬものどもについても、それらがどれほどなのか(という問いがある)。

ἔστι μὲν δὴ ἡ λόγῳ περὶ ἐκάστου δυναμένη ἕξις εἰπεῖν τί τε ἕκαστον καὶ τί ἄλλων διαφέρει καὶ τίς ἡ κοινότης ἐν οἷς ἔστι καὶ ποῦ τούτων ἕκαστον καὶ εἰ ἔστιν ὃ ἔστι καὶ τὰ ὄντα ὅποσα καὶ τὰ μὴ ὄντα αὖ, ἕτερα δὲ ὄντων.

20(I.3) 4,2-6.

この箇所はプロティノスのディアレクティケー観を端的に示す記述であるが、そこにプラトン由来の要素とアリストテレス由来の要素がともに見られることは注目に値する。すなわち、「何であるか」の答えとして定義を持ち出し、恐らくその方法として、他のものとの関係において共通点(類)と差異(種差)を見出すのである。ただその一方で、ディアレク

¹²⁵ 44(VI.3) 15,24-27. Cf. *Tim.* 49d-e.

ティケーを語る中で言及される以下のプラトンの(あるいはプロティノスの)要素とそれ以外の要素の区別を見逃してはならないだろう。

そして(ディアレクティケーは)、可感的事物の周りを彷徨うことを止め、可知的なものの中に落ち着き、そこで虚偽を手放して、「真理の野¹²⁶」で魂を養いつつ、そこで為すべき営みを得るのだが、それはプラトンの分割法を、あるときは諸形相の区別のために用い、あるときは「何であるか」という問いのために用い、またあるときには第一の類に対して用い、それら(の類)から成るものを知性的な仕方編み上げ、その結果可知的なもの全てを巡りゆくのだが、また反対に(編み上げられたものを)ほどいて、出発点へと赴くのである。そして、(可知的世界に至る)そのときには、平穩に過ごし——それはかのところにある限り平穩のうちにあるのだから——もはや余計なことにかき乱されることなく、一なるものとなって眺め、命題や推論に関わる論理的な営みと言われるものを、書くことの術と同様、別の技術へと任せるのである。

παύσασαν δὲ τῆς περὶ τὸ αἰσθητὸν πλάνης ἐνιδρύει τῷ νοητῷ κάκει τὴν πραγματείαν ἔχει τὸ ψεῦδος ἀφείσα ἐν τῷ λεγομένῳ ἀληθείας πεδίῳ τὴν ψυχὴν τρέφουσα, τῇ διαίρει τῇ Πλάτωνος χρωμένη μὲν καὶ εἰς διάκρισιν τῶν εἰδῶν, χρωμένη δὲ καὶ εἰς τὸ τί ἐστὶ, χρωμένη δὲ καὶ ἐπὶ τὰ πρῶτα γένη, καὶ τὰ ἐκ τούτων νοερῶς πλέκουσα, ἕως ἂν διέλθῃ πᾶν τὸ νοητὸν, καὶ ἀνάπαλιν ἀναλύουσα, εἰς ὃ ἂν ἐπ' ἀρχὴν ἔλθῃ, τότε δὲ ἡσυχίαν ἄγουσα, ὡς μέχρι γε τοῦ ἐκεῖ εἶναι ἐν ἡσυχίᾳ, οὐδὲν ἔτι πολυπραγμονοῦσα εἰς ἓν γενομένη βλέπει, τὴν λεγομένην λογικὴν πραγματείαν περὶ προτάσεων καὶ συλλογισμῶν, ὡσπερ ἂν τὸ εἰδέναι γράφειν, ἄλλη τέχνη δοῦσα·

20(I.3) 4,9-20.

このように、ディアレクティケーは我々の魂の段階と知性の段階に跨る落差を埋める役割を有するものとして規定されている。既に言及した通り、魂の上昇はプロティノスの哲学にとっての最重要課題である。それ故、プラトン対話篇への明示的な参照も相俟って、上の引用部はプロティノスにとってのディアレクティケーの重要性を伝える記述という印象を読み手に与えるだろう。ここで注目されるのは、ディアレクティケーがプラトンの分割法を基礎に置いているということであり、その対象として「何であるか」という問い、そしてアイデアとしての諸形相、更にはプラトン『ソフィスト』篇で導入される最高類(μέγιστα γένη)に相当するであろう第一の類が列挙されていることである。アイデアと最高類については、プロティノスがそれらを可知的世界の構成要素と考えていることは明らかであり、それ故ディアレクティケーは専ら可知的世界の探求に関わるものとして理解されている。そしてこれが、「論理的な営みと言われるもの(τὴν λεγομένην λογικὴν πραγματείαν)」と明確に区

¹²⁶ *Phdr.* 248b6.

別されているのである。

この区別に関して、先行する解釈を確認しておこう。Leroux は、可感的世界と可知的世界という二世界に跨る存在論的差異を、それぞれを対象とする思考様式に対応させた上で、プロティノスの問題意識にはプラトンのディアレクティケーと（ペリパトス派的）論理学との鋭い対立があると見た¹²⁷。つまり、可知的世界に知性的把握としてのディアレクティケーを、可感的世界に推論的思考に対応させ、それらを平行的な営みとして捉えるのである。従ってこの場合、巨視的に見るならば、ディアレクティケーは上位の認識様態として、可知的世界にのみ関わるものとして理解されるだろう¹²⁸。

この解釈には一定の正統性があると思われる。何故なら、プロティノスはこのディアレクティケーという知識を成立せしめている原理を問う中で、それを知性だと明言しているからである。

しかし、この（ディアレクティケーという）知識は、どこから諸原理を得るのだろうか。いや、ある魂がそれを把握出来るような場合、知性が明確な諸原理を与えるのだ。またそれに次いで、（諸原理に）続くものどもを組み上げ、編み合わせ、また分割し、その結果完全なる知性へと至るのである。というのも、プラトンは言うのだが、これは「知性と思慮の最も純粋な部分¹²⁹」だからである。従って、これは我々の内にある最も誉れ高い技能なのだから、真実在及び最も誉れ高いものに関わっていることが必然なのであって、思慮は真実在に、知性は真実在を超えた彼方のものに関わっているのである。
ἀλλὰ πόθεν τὰς ἀρχὰς ἔχει ἡ ἐπιστήμη αὐτή; ἡ νοῦς δίδωσιν ἐναργεῖς ἀρχὰς, εἴ τις λαβεῖν δύναιτο ψυχῇ¹³⁰. εἶτα τὰ ἐξῆς καὶ συντίθησι καὶ συμπλέκει καὶ διαίρει, ἕως εἰς τέλος νοῦν ἤκη. ἔστι γὰρ, φησιν, αὐτὴ τὸ καθαρώτατον νοῦ καὶ φρονήσεως. ἀνάγκη οὖν τιμιωτάτην οὖσαν ἕξιν τῶν ἐν ἡμῖν περὶ τὸ ὄν καὶ τὸ τιμιώτατον εἶναι, φρόνησιν μὲν περὶ τὸ ὄν, νοῦν δὲ περὶ τὸ ἐπέκεινα τοῦ ὄντος.

20(I.3) 5,1-8.

¹²⁷ Leroux(1974), 182-185.

¹²⁸ ただし Leroux(1974), 181-182 では、第 44 論攷に見られる可感的事物の分析がプロティノスによる真のディアレクティケーの実践と考えられている。他方、そこでもあくまでディアレクティケーの狙いは可知的実体だと考えられており、直観的(intuitive)と見なされる点で、可感的世界との関係を十分に説明していないように思われる。Strange(1981), 29 は、Leroux が第 44 論攷における可感的事物を対象とした特殊なディアレクティケーの実践と考えていることについて、この区別を必要のないものとして退けている。その上で、20(I.3) 6,1-4 の「ディアレクティケーは自然学の必要不可欠な部分である」という記述に基づき、ディアレクティケーの考察対象に可感的事物を含めることの可能性を指摘している。とはいえ、第 6 章には偽作の疑いがかかけられており、その内容をプロティノス自身の見解に含めるか否かについての是非が問われることになる。

¹²⁹ *Phlb.* 58d6-7.

¹³⁰ Harder が提案し底本も従う ψυχῇ を採らず、写本が伝える ψυχή を読む。

ここでは「ある魂がそれを把握出来るような場合」という留保がつけられ、全ての魂がはじめからディアレクティケーの知識を獲得しているのではないということが示唆されている。その上で、魂に対してディアレクティケーの知識を授けるのは知性であること、またその知識の対象は可知的世界の構造であることが確認される。

またプロティノスがディアレクティケーの語を持ち出すにあたって、意図的な仕方で知性的把握と推論的思考の間に距離を設けていることは、彼以前のプラトン主義者の説明との差異を確認する中にも推測されるものである。例えば、後2世紀の中期プラトン主義者、アルキノオスがディアレクティケーについて語る時、その具体的要素の中に推論(συλλογισμός)が含まれていることを確認することが出来る。

さて、ディアレクティケーにおいて最も基本となる要素は、第一に、何であれあらゆるものの本質をよく観察すること、次いで、付帯性についてそうすることであると考えられている。そして(ディアレクティケーは)、各々の『まさにそれであるところのもの』を、上位から分割的に定義的に、下位からは分析的に考察し、また種々の実体に備わる付帯性を、包括されるものどもから帰納を通じて、あるいは包括されるものどもから推論を通じてそうするのだ。従って、以上に対応するかたちで、分割に関するもの、定義に関わるもの、分析に関わるもの、更には帰納及び推論に関わるものが、ディアレクティケーに属することになる。

τῆς διαλεκτικῆς δὲ στοιχειωδέστατον ἡγεῖται πρῶτον μὲν τὸ τὴν οὐσίαν ἐπιβλέπειν παντὸς ὄτου οὖν, ἔπειτα περὶ τῶν συμβεβηκότων ἐπισκοπεῖ δὲ αὐτὸ μὲν ὁ ἕστιν ἕκαστον ἢ ἄνωθεν διαιρετικῶς καὶ ὀριστικῶς ἢ κάτωθεν ἀναλυτικῶς, τὰ δὲ συμβεβηκότα καὶ ὑπάρχοντα ταῖς οὐσίαις ἢ ἐκ τῶν περιεχομένων δι' ἐπαγωγῆς ἢ ἐκ τῶν περιεχόντων διὰ συλλογισμοῦ ὡς κατὰ λόγον εἶναι τῆς διαλεκτικῆς τὸ μὲν διαιρετικόν, τὸ δὲ ὀριστικόν, τὸ δὲ ἀναλυτικόν, καὶ προσέτι ἐπαγωγικόν τε καὶ συλλογιστικόν.

Didaskalikos 156, 24-33.

このことを受けたプロティノスが、ディアレクティケーという語の内部に本来異なる領域に属するはずの認識様態が混在しているものと考え、そこに問題意識を抱いたという想定は成り立ち得るだろう¹³¹。というのも、既に引用したプロティノスによるディアレクティケーの説明には、(プロティノスの立場からは)推論的思考を前提とする手続きは含まれてお

¹³¹ ただし、ここで言及したディアレクティケーの位置付けについての話題はあくまでプラトン主義内部の変遷に限定されたものであって、この点に関してプロティノスが明示的に先行プラトン主義者との差異を強調しているわけではない。第20論攷の主眼はむしろ、ディアレクティケーという語と哲学の関係、言い換えればディアレクティケーを論理学と哲学のどちらに関係づけるのかという問題にあることは注意が必要である。この論点については Schiaparelli(2009)や Gourinat(2016)を参照。

らず、更にはそれに続く箇所において、推論を含む論理的な道具立てがディアレクティケーに下属するものとして描写されていたからである。ここからはあくまで下位の位置づけを与えられながらも、プロティノスにとっての推論的思考は、ディアレクティケーとは別の、ある種独立した営みとして扱われていることが確認されるだろう¹³²。これを素直に受け取るとすれば、可感的世界に住まう魂は推論的思考を行い、何らかの仕方で可知的世界への上昇を達成した魂はディアレクティケーを用いてイデア的实在の認識を享受する、という単純な筋立てがあり得ることになる。

しかしながら、既に言及した通り、プロティノスがディアレクティケーを上昇プロセスと密接に関連するものとして捉えていることを踏まえれば、二世界及びそれぞれの世界に関わる探求の道筋を平行的に捉える中にも、それら異質な領域同士を繋ぐ結節点を見出さなくてはならないだろう。また直近のプロティノスからの引用にもある通り、ディアレクティケーは「我々の内にある最も誉れ高い技能」なのであり、それ故我々の魂がどこかの時点でその技能を獲得し、ディアレクティケーを駆使する段階へ至るための方途が示されなくてはならない。そうでなければ、魂の上昇とは、一足飛びに可知の実体の把握へと至る体験としてのみ描かれ得るものとなり、その方途としての哲学的探求が果たすはずの役割が不明確、あるいはそもそもそれ自体が不必要なものとなってしまうからである。もし、突然に異質な世界へのアクセスを獲得するという類の瞬間的跳躍を神秘主義と見なすのであれば、少なくともそれはプロティノスが構想していた上昇のあり方ではないだろう。

このように考えるとき当然問われるのは、可感的世界の探求とディアレクティケーとの関係である。以下ではその関係を、ディアレクティケーの主たる対象である「何であるか」という問いを手掛かりに探っていきたい。もちろん、可感的物事についてもそれが「何であるか」と問い、そこに答えを与えることは可能である。むしろそのようなかたちで問うことの方が、我々の日常的感覚に沿う言語の使用だとすら言えるだろう。他方、その問いの段階に留まるか否かが、プロティノスにとってその探求をディアレクティケーと見なし得るか否かの分水嶺となるように思われる。プロティノスが可感的物事と可知の実体それぞれの探求を連続的に捉えていることを示す以下の記述を見てみよう。

さて、以上の難問の為に、もう一度出発点から、かの（可知的）人間についてそれが何であるかを把握しなくてはならない。だが恐らくその前に、ここ（可感的世界）におけ

¹³² 観点は異なるが、Emilsson(2021)は、我々が日常的に関わる認識一般に際して、その都度イデア的实在をその基礎として要請する必要がないことを論じている。つまり、可感的世界における認識行為は、可感的世界を直接的に構成する事物の範囲内でその成立が保証される。たしかにイデアが我々の認識を基礎づけるという構造は、それ自体認められるべきである。しかしながら、それは感覚的なものを含む我々の認識一般をその都度可能にするという意味ではなく、以下で見ていく通り、感覚の対象となる可感的物事の形相は可知的世界に原因を持ち、そこから産出されたものだという世界像において理解しなくてはならないだろう。

る人間とは一体何であるかをまず述べる必要があるだろう。我々は、こちらの人間すら厳密な仕方では知らないのに、こちらのことは知っているものとした上で、かの人間を探求している。それにまた、ひょっとするとある人々にとっては、このものとかのものが同じものに見えているかも知れない。

πάλιν οὖν πρὸς ταύτην τὴν ἀπορίαν ἄνωθεν ληπτέον τὸν ἄνθρωπον ὅστις ἐκεῖνός ἐστιν. ἴσως δὲ πρότερον χρὴ τὸν τῆδε ἄνθρωπον ὅστις ποτέ ἐστιν εἰπεῖν — μήποτε οὐδὲ τοῦτον ἀκριβῶς εἰδότες ὡς ἔχοντες τοῦτον ἐκεῖνον ζητοῦμεν. φανείη δ' ἂν ἴσως τισὶν ὁ αὐτὸς οὗτός τε κάκεῖνος εἶναι.

38(VI.7) 4,1-6.

ここでは、形式上同一の主語である「人間」の探求を進めてゆく場面に焦点が当てられている。ここでのプロティノスは、その作業にあたっての注意書きを付すかの如くである。彼が警告するのは、可感的人間の規定に先立って可知的人間の探求を行ってはならないということ、そしてそれら両者を区別しないまま人間を探求してもならないということである。またその上で、我々にとってより身近なはずの可感的人間についてすら、その探求は不十分なことが常であるという実情を暗に伝えているようにも思われる。

このように、「何であるか」という問いが二つの相異なる領域に同時に関わり得るものだという事は、ここで注目されてよい点だろう。ディアレクティケーという営みの目指す先が可知的実体としての探求対象であることを受け入れたとしても、何かについて「それが何であるか」というかたちで問う限りでは、可感的世界における我々の言語使用との共通点が生まれる。我々としては、その瞬間をディアレクティケー的探求の糸口として掴み取らなくてはならないのである。ただ、これを「何であるか」という問いが可感的事物の段階から可知的実体の段階へと移行することと捉えるとして、プロティノスはその内実をどう説明するかについては、ディアレクティケーとはまた別の角度からその問いを検討しない限り不明瞭なままに留まる。

実際、ディアレクティケーという語を手掛かりに「何であるか」という問いの検討を進める中には障壁があることも事実である。というのも、ディアレクティケーという語はプロティノスが頻繁に用いるものではないからである。それどころか、プロティノスの語彙辞典を繙けば分かるように、この語及びその直接的類語と言い得る *διαλεκτικός* が見出されるのは第 20 論攷においてのみである¹³³。このことを受けて、プロティノスにおけるディアレクティケーという話題は解釈の余地を多分に残すものとなっている。従って、この語の使用をプロティノスが重要視していたか否かとは独立に、その語が指し示す知的営為の内実を検討し、そこに与えられた重要性を正確に見積もるためには、他の論攷を参照しつつ総合的に判断しなければならないだろう。次節以降は、この問題意識に即して議論を進め、「何であるか」という問いが二つの段階を繋ぐ局面について、更にプロティノスの問題意識を探って

¹³³ Sleeman&Pollet(1980)の *διαλεκτική* 及び *διαλεκτικός* の項を参照のこと。

ゆく。

第二節：「何であるか」と「なぜ」の探求

前節で確認した通り、プロティノスにとっての「何であるか」の探求は、その出発点を可感的事物に据えるものである。ただし、それはペリパトス派的なやり方との共通点と言い得る一方で、プロティノスがそこを探求の終着点と考えていないこともまた確かである。何故なら、ペリパトス派的探求の対象は、常にアリストテレスの言う「第一実体」、あるいはそれに依存するかたちでしか存在できない形相であるが、プロティノスはその点に自身の形相観との相違を見出すからである。つまり、プロティノスに言わせれば、ペリパトス派的探求にはイデア的実在、すなわち可感的事物から解き放たれた純粋な可知的実体、を探求する段階が欠落しているのである。ただ、仮にその段階の検証が欠落しているとして、プロティノスにとってはその何が問題となるのだろうか。ここでプラトン主義者という立場を押し通し、イデアの存在とその優位性を批判の前提として持ち出すのは独断的である。そのようなやり方を避けつつ生産的な議論を展開するためには、ペリパトス派的探求に関わるより根本的な不備を発見し、そこを出発点としなければならない。

例えば Lloyd は、プロティノスが念頭に置くペリパトス派的探求の問題点の一つとして、種類関係と密接な結びつきを持つ「何であるか」という問いに対し、本質的述定を保証する必然性が無いという点を指摘する¹³⁴。Schroeder がまとめるように、「ある対象を、予め定められた種類関係の分類図の内へ位置付ける」仕方と表現してもよいだろう¹³⁵。これは、Rutten の言葉を借りるならば、可感的事物を「論理学的主語の役割(*fonction de sujet logique*)」に還元されたものとして理解する仕方である¹³⁶。この場合の「論理学的」という語は、その場合の可感的事物の分析があくまでその対象の名目的な規定だという含意を持つ。つまり、特定の可感的事物を特定の類・種に属するものとして理解するとき、その所属関係を必然性のない慣習的、便宜的なものとするのである。これは、可感的事物に副次的な存在性のみを認めるプロティノスの立場にある程度符合し、またアリストテレスがそこに与えた「第一」実体という名付けとの好対照を為す。

可感的事物の認識に際して、プロティノスがアリストテレス的な論理学やカテゴリー的
分類の運用を認めている可能性を既に指摘した。つまり、特定の可感的事物について、それ

¹³⁴ Lloyd(1955), 68-72.ただし、当該論文で Lloyd が焦点を当てるのは、類及びその類の外部からとられた種差で定義を構成するやり方であり、またそれらの結びつきに関する必然性の欠如である。

¹³⁵ Schroeder(2004), 112.

¹³⁶ Rutten(1961). ただし、プロティノスの可感的事物を完全に自立性のないものとして理解する解釈には反対する。あくまでその自立性、つまり可知的実体から引き継いだ痕跡を持つことに気付かない限り、プロティノスの可感的事物も必然性を欠いた複合体として成立するものと理解され得るというだけだろう。

らを特定の類種関係の内にまとめ上げ、共通の名を付す作業自体をプロティノスは否定しないのだと考えられる。見方を変えれば、プロティノスにとっては、可感的世界において名目的な規定に即した論理的営みが成立してしまうこと自体が、本来追及されるべき探求の道筋を見誤らせる可能性を孕んでいるとも言えよう。プロティノスが危惧を抱くのは、こうした恣意性が入り込む言語の操作である。

必然性という点に話題を移そう。以上のような恣意性を取り除くためには、語る対象が属する類種関係の必然性を知らなければならないからである。ここでの必然性は、可感的事物の考察における、「なぜ(διὰ τί)」という原因を対象とした問いに関係している。プロティノスの基本戦略は、ペリパトス派の探求範囲では保証することの出来なかった(あるいは少なくとも彼にとってそう思われた)、本質的述定を成立させるための根拠をイデア的实在の側に求めることである。言い換えれば、イデア的实在を措定し、その類種関係に基づく構造を認識することで初めて、我々は本質的述定を行う可能性を得るのだと言える。

以上の論点に関わる記述を確認してみよう。第38論攷「如何にして多数のイデアが成立したか、及び善について」の議論は、『ティマイオス』において「生成した」と言われる可感的世界と、そこに認められ得る目的論的解釈の検討から始まる。そこでは、生み出された可感的事物の各々、更にはその諸部分が「なぜ」そのようなのか、という点が問われる。プロティノスが、可感的事物における「なぜ」の例としてアリストテレス由来の月蝕を持ち出しつつ、そこにいわば彼なりの修正を施すことは注目に値するだろう。

しかし、かのところでは、あらゆるものが一においてあり、その結果として事物とその事物の「なぜ」とが同一なのである。だが、ここにおいても至る所で、事物とそれの「なぜ」とが同一なのだ。例えば「月蝕とは何であるか」がそうである。では、その他の諸事物の各々についても、(それがそれ自身の)「なぜ」であることを、またその「なぜ」が各々のものの本質であることを何が妨げるだろうか。いやむしろ、そうなることが必然なのだ。そして、「(何かにとって)あるとは本来何であるか」を以上のように理解しようと試みる人々は、真つ当なやり方である。

ἐκεῖ δ' ἐν ἐνὶ πάντα, ὥστε ταῦτόν τὸ πράγμα καὶ τὸ “διὰ τί” τοῦ πράγματος. πολλαχοῦ δὲ καὶ ἐνταῦθα τὸ πράγμα καὶ τὸ “διὰ τί” ταῦτόν, οἷον τί ἐστὶν ἐκλειψις. τί οὖν κωλύει καὶ ἕκαστον διὰ τί εἶναι καὶ ἐπὶ τῶν ἄλλων, καὶ τοῦτο εἶναι τὴν οὐσίαν ἑκάστου; μᾶλλον δὲ ἀνάγκη καὶ πειρωμένοις οὕτως τὸ τί ἦν εἶναι λαμβάνειν ὀρθῶς συμβαίνει.

38(VI.7) 2,10-15.

月蝕は、可感的事物(あるいは事象)の「何であるか」と「なぜ」が一致するケースとして、プロティノスも承認する例だと考えられよう。月蝕の「何であるか」と「なぜ」そうであるかの間に必然性が存在するからである。その一方で、これと同じことが月蝕以外の諸事物に

も当てはまると見なされていることは、読み手に驚きを与えるだろう。つまり、月蝕は特殊なケースとして扱われるべきではなく、むしろ月蝕の例に見られるような「何であるか」と「なぜ」の一致という事態は、本来他の可感的事物、出来事を対象とした問いにおいても認められるものだと考えているのである。月蝕の例が引かれている上、「(何かにとって) あるとは本来何であるか(τὸ τί ἦν εἶναι)」というペリパトス派特有の本質表現を持ち出すことから、プロティノスがここで念頭に置く『(何かにとって) あるとは本来何であるか』を以上のように理解しようと試みる人々(πειρωμένοις οὕτως τὸ τί ἦν εἶναι λαμβάνειν)はペリパトス派に属すると推定されるだろう。この想定が正しいとすれば、やはりプロティノスはペリパトス派的探求の道筋をある程度まで共有しており、またあるタイミングで彼らとの袂を分かつべきと考えているのだろう。そのタイミングがどこかを示す記述が直後に続いている。

ただし、ここで私が言うのは、形相が個別的なものにとって、その存在することの原因だということではなくて——とはいえ、そのことは真実なのだが——、もし君がその形相そのものすらも、各々それら自身との関係において展開するならば、君はその内に「なぜ」を見出すことだろう、ということである。

λέγω δὲ οὐχ ὅτι τὸ εἶδος ἐκάστῳ αἴτιον τοῦ εἶναι—τοῦτο μὲν γὰρ ἀληθές—ἀλλ’ ὅτι, εἰ καὶ αὐτὸ τὸ εἶδος ἕκαστον πρὸς αὐτὸ ἀναπτύττει, εὐρήσεις ἐν αὐτῷ τὸ “διὰ τί”.

38(VI.7) 2,16-19.

ここで二度用いられる形相(εἶδος)について、既存の翻訳及び解釈は見解の一致を見ない。争点は、それぞれの内実が可感的事物の形相なのか、あるいは可知的実体としてのプラトンのイデアなのか、である。少なくとも後者に関しては、既存の翻訳の多くが明確にプラトンのイデアとして訳出を行っている¹³⁷。しかしながら、この文脈において後者をプラトンのイデアと理解することは難しいだろう。前者と関連付けられた「個別的なもの」がいわゆる個物としての可感的事物だとすれば、当然その形相は可感的事物のものである。その上で、この近接する行同士で同一の、かつ最重要とも言い得る語の意味が暗黙の内にすり替わるということは考えにくいだろう。また「その形相そのものすらも」と表現するときの καί の意味を汲み取るならば、後者の形相は前者と同じ可感的事物の形相のことを指しており、ペリパトス派的なやり方との比較の上で、その形相の考察を更に推し進めることへのプロティノスの問題意識を読み取ることが出来るだろう。その更なる考察は、形相を「各々それら自身との関係において(πρὸς αὐτὸ)展開する」中で遂行されるが、この αὐτό はその可感的形相に対応するイデアを指しているものと考えられる。このように理解するとき上の引用部は、

¹³⁷ Hadot(1988)を起点として、彼に追従する訳者が多い。Schiaparelli(2009)は、この箇所に関わる解釈の可能性を網羅的に列挙しようと試みるが、後者の形相については一貫してプラトンのイデアを指すものと理解している。

可感的世界の構造をその範囲内で理解するのではなく、更にその原因へと遡り、イデア的実在との対応関係において探求することの重要性を伝えるものとなる。認識する者の立場に立てば、ここに至って初めて、その原因という役割を担う可知的実体の存在が要請されるのである。

ここで、プロティノス流の『ティマイオス』解釈を前提に、可知的実体と可感的事物の関係を原因という観点から描いた記述を確認してみよう。プロティノスは、この様子を凝集した知恵の展開というイメージを用いて以下のように説明している。

だが後に、凝集したこの知恵から、その影像が別のものの内に、既にほどかれたかたちで生じたのである。そしてこの影像は、自己を逐次的な仕方では表出しているのだが¹³⁸、また自身がなぜこのようなのかという諸原因を見つけ出してもいる。それ故、生じたものはこのように美しい状態にあるのだが、人は（この影像の成り立ちを¹³⁹）知ると驚くのである。つまりその人は、この（ほどかれた）知恵が如何にしてそれ自身ではなぜそのようなものであるかというあり方の諸原因を有していないにも拘らず、その知恵に従って作り出されたものに（原因を）もたらすことが出来るのか、と言って驚くのである。

ὑστερον δὲ ἀπ' αὐτῆς ἀθρόας οὐσης εἰδωλον ἐν ἄλλῳ ἐξειλιγμένον ἤδη καὶ λέγον αὐτὸ ἐν διεξόδῳ καὶ τὰς αἰτίας, δι' ἃς οὕτω, ἐξεύρισκον, ὥστε καλῶς οὕτως ἔχοντος τοῦ γεγεννημένου θαυμάσαι εἰ τις οἶδε, θαυμάσαι ἔφη τὴν σοφίαν, πῶς αὐτὴ αἰτίας οὐκ ἔχουσα τῆς οὐσίας, δι' ἃς οὕτω, παρέχει τοῖς ποιουμένοις κατ' αὐτήν.

31(V.8) 6,9-16.

ここには、可知的世界から可感的世界が産み出される場面が記述されている。また、これに先立つ箇所では言及される象形文字と表音文字の例示では、それぞれが知性的把握と推論的思考に関係づけられており、前節で触れたディアレクティケーと論理学の二分法を思い起こさせる。それらに対応する「凝集した」「ほどかれた」という語は、それぞれの世界に備わる特性と対立をよく反映したものとして読み手の目を引くだろう。そしてそこから可知的世界へ認識の転換が起きるとき、先ほどまで話題としていた「なぜ」が、美という経験を通じて驚嘆という結果に繋がる。その美の原因を求めるとき、上位の世界を探求するための足掛かりが生まれるのだと考えられる。プロティノスがしばしば言及する人々の可感的美に対する感度の差も、この可感的世界の眺め方に応じて変容を見せるものと推察されよう。この論点には次章で触れる。

以上のように、可知的世界と可感的世界の双方に「形相」と呼ばれ得る原理が見出される

¹³⁸ ἐξεύρισκον は λέγον と同格の分詞と理解し、εἰδωλον が意味上の主語として続いていると理解する。この読み方は、Smith(2017), 106 から示唆を受けた。

¹³⁹ οἶδε の目的語として εἰδωλον を読み込む。この点についても Smith(2017), 106 を参考にした。

ことは、認識の主体を惑わせる要因でもある。可感的世界にもある種の形相原理を立てることは、可感的物事に与えられたある種の確実性を保証する点で、プロティノスにとっての重要性を有する。既に言及した通り、それすらもないとなれば、可感的世界は流動としての様相を呈することになり、そこに対する認識可能性そのものを放棄することに繋がるからである。ただし、その措定は必然的に次の問題を生み出す。すなわち、Lloyd がかつて指摘したように、「普遍の複数化(multiplication of the universal)」をプロティノスも行っていたのだとすれば、つまりイデア的實在の措定は大前提として、プラトンが仄めかしつつあった可感的物事の側の内在形相に相当するものも同時に構想されていたのだとすれば、両者の関係を正しく説明する義務が生じるのである¹⁴⁰。後者の導入に際してペリパトス派の質料・形相論が及ぼした影響は決定的と言えるが、これら二種類の普遍同士の間を問う局面に至れば、それはもはやプラトン主義内部の問題、つまり分有という図式の問題として新たな様相を呈するのである。

第三節：「何であるか」の終極

ペリパトス派に対する不満がこれまでに挙げた諸点に向けられているとして、プロティノスの議論は対人的に他学派の説を論難することに終始しない。そのやりとりを生産的なものとし、そこから止揚する何かがあるとすればそれは何なのか、またそれを支える真の問題意識はどこにあるのか。既に確認した通り、彼の主張の起点は、可感的世界の範囲内で可感的物事の考察を行うのではなく、むしろそれを可知的実体との関係において遂行すべきだとすることにある。端的に言えば、可感的物事は可知的実体から生み出される、という両者の原因関係までを含み込むかたちで探求を進めるべきだということである。

しかしながら、ここでの探求のあり方は、単純な原型・模像の一对を想定した上で、原型が何らかの仕方で可感的世界に入り込み、それに対応する模像としての可感的物事を成立させるというものではないことに注意しなくてはならない。このあまりに粗雑な形式で語られる原型・模像関係としての分有論について、プロティノスは様々な角度から幾度も批判を行っている¹⁴¹。この誤りの原因の一つは、可知的実体が分有に際してとるあり方を、可感的物事の特性に還元して理解しようとするところにある。すなわち、プロティノスにとってイデア論を批判する人々は、可知的実体が「至る所に一つのものとして」あるという事態を物的に解することでアポリアに陥っているのである。このように、非物体・物体という二分法を明確化した上でそれぞれの特性を規定する戦略は、いわゆる「第三人間論」的アポリアに触発されたものであり、またプロティノスにとってその困難を回避するのに有用であったことは、既に有力な先行研究の示すところである¹⁴²。その要点を述べれば、可知的実体は

¹⁴⁰ Lloyd(1955), 59-64.

¹⁴¹ 例えば、26(III.6) 7.

¹⁴² Regen(1988), D'Ancona(1992).

可感的事物に対して自身が持っていない性質を与えることが出来るため、自己述定の可能性を回避し、その両者が全く同一の述語づけを共有することはないのである。しかしながら、その中で D'Ancona が指摘するように、この二分法に従う対立を突き詰める中にはまた新たな問題が生じる余地がある。つまり、異なる存在論的領域にあるもの同士に関して、一方が他方の「写し」であるということの実態を突き詰める必要が出てくるのである¹⁴³。

『パルメニデス』篇のアポリアとプロティノスによる解決、というテーマを本稿の中心主題として取り上げることは出来ないため、現在の議論に関連する限りで重要な点を指摘しておきたい。それは、分有という考え方に必然的に伴われる類似性に関するものである。例えばプロティノスは、分有関係において認められる類似性についてこのように述べている。

(形相に与るものは) その与る程度に応じて、形相なきものではあるが、かのものに似るのである。

καθ' ὅσον δὲ μεταλαμβάνει εἶδους, κατὰ τοσοῦτον ὁμοιοῦται ἀνειδέω ἐκείνῳ ὄντι.
19(I.2) 2,21-22.

ここで示されるのは、形相を分有する中で形相なき「かのもの」、つまり一者へと似てゆく、という矛盾した事態である¹⁴⁴。また後に見るように、ときに形相自体が無形相と形容されることもあり¹⁴⁵、プロティノスはイデア的実在へとアクセスする中に何らかの無形相性との出会いを予期しているように思われる。この点について、『パルメニデス』篇解釈という問題がプロティノスの形而上学全体を覆うものと評価し、その重要性を高く見積もった Regen は、以上の矛盾の許容を不可避のものに見なす。彼のまとめ方を引くならば、『パルメニデス』篇のアポリアの解決を試みる中でプラトン主義は、イデアの認識可能性及びそのイデアの無形性という二つの相反する仮定に関して、中間的な立場をとらざるを得ないのである¹⁴⁶。ただ、今我々にとって重要なのは、その分有の過程を辿り直し、探求という道筋に即して考えることである。これまでに得られた事項を整理しよう。

①特定の可感的事物(例えば人間)を根拠づけているのは、それに対応する可知的実体(人間のイデア)である。

¹⁴³ D'Ancona(1992), 92.

¹⁴⁴ 既存の諸説の殆どが、「かのもの(ἐκείνῳ)」を一者と解した上で、この場面を魂と一者の関係を描いたものとして見ている。しかしながら、Schroeder(2004)は、当該論攷のこの箇所における文脈は、可知的世界において徳ではないものが可感的世界へ至って徳と呼ばれるに至る、いわば二世界間の非対称性に関するものであり、この箇所の ἐκείνῳ はイデア、つまり可知的世界の領域にあるものを指すものと考えた。筆者はかつてこの読み方に影響を受け同様の解釈をとっていたが、山口義久氏の指摘を受け、多数派の解釈をとるよう考えを改めるに至った。この場でご指摘に感謝を申し上げたい。

¹⁴⁵ 38(VI.7) 33,1-7.

¹⁴⁶ Regen(1988), 26.

②「何であるか」を問う探求の順序としては、可感的事物を先に考察し、またその段階に留まることなく更なる原因としての可知的実体の考察へと移らねばならない。

③その可知的実体は形相でありながら、それを分有した結果として無形相性が自身に備わることになる。また、その形相自体が無形相なるものと形容されることもある。

このように考えるとき、我々の眼前にある可感的事物をコピー品として拒絶し、そのプロトタイプを獲得することで万事が解決する、という単純な図式へと問題を帰着させることは一層難しくなるだろう。何故なら、可感的事物を入り口として、それとの類似性を持つ可感的事物の探求へと至った結果、そこには当初の可感的事物との根本的相違を持つ対象が現れるからである。形相一般が何かを規定する原理であることはプロティノスも承認するが、イデア的實在の段階に何かしらの無形相性、言い換えれば無規定性を見出すことは、探求の過程において大きな問題点となる。というのも、無規定性を備えた対象に関して確実な認識は成立し得ないからである。この点を踏まえるとき、プロティノスの可知的世界は、プラトンがイデアに与え、またプロティノスもそれを引き継ぐかたちで説明する規定的性格、あるいは同一性といった特徴との乖離を見せるようにも思われる。

ここで、魂の上昇を描いた別の場面をプロティノスの記述から引用してみよう。

それでは、一者とは何なのだろうか。どのような本性を持つものなのだろうか。いや、これに答えるのが容易でないことは、驚くまでもない。有るものや形相についてすら容易ではないからには、我々の認識は形相に依ったものであるのだが。ところが、形相のないものへと魂が向かうとなれば、刻印者から刻印を受けるが如く規定されることがないので、(その形相のないものを) 掴み取ることが到底出来ず、得るものが何もないのではないかと恐れ、滑り落ちてしまうのである。

τί ἄν οὖν εἴη τὸ ἐν καὶ τίνα φύσιν ἔχον; ἢ οὐδὲν θαυμαστὸν μὴ ῥάδιον εἰπεῖν εἶναι, ὅπου μὴδὲ τὸ ὄν ῥάδιον μὴδὲ τὸ εἶδος· ἀλλ' ἔστιν ἡμῖν γνῶσις εἰδεσιν ἐπερειδομένη. ὅσω δ' ἄν εἰς ἀνείδεον ἢ ψυχὴ ἦ, ἐξαδυνατοῦσα περιλαβεῖν τῷ μὴ ὀρίζεσθαι καὶ οἶον τυποῦσθαι ὑπὸ ποικίλου τοῦ τυποῦντος ἐξολισθάνει καὶ φοβεῖται, μὴ οὐδὲν ἔχη.

9(VI.9) 3,1-6.

ここには、非物体的なものの探求を推し進めてゆくこと、つまり物体的なものを離れ認識の純度を高めてゆくことの末に控えている「認識対象の喪失」が描かれていると言えよう。この文脈自体は一者と魂の関係を切り取ったものであるが、既に言及した通り、プロティノスがイデア的實在をもある意味で無形相なるものと理解していることを踏まえれば、この引用部が我々に伝えるところは大きいはずである。この場合の存在及び形相への言及は、より上位にある一者の無規定性、不可知性を強調するための単なるレトリックと解することも

可能だろう。しかしながら、他の論攷においても可知的世界を構成するイデア的実在の無形相性がしばしば取り上げられることを踏まえれば、この形相としてのあり方及び無形相なるものとしてのあり方が可知的世界においてある種の共存を見せていることが分かる。完全なる無形相としての一者、そして可知的世界に由来する P-形相により構成された可感的世界という両者の中間にあって、可知的世界が形相・無形相という二面性を備えることには、何らか積極的な意味付けがあり得るはずである。

この場面で言及される形相がイデア的実在を指すのか、あるいは可感的事物に備わるものなのかを断定することは難しい。とはいえここで重要なのは、我々の認識を支えるはずの原理についてさえも、その本性を探るにあたっての困難が示唆されていることである。興味深いことに、引用部の末尾に描かれたのは、魂の可感的事物への再転落である。この引用部にも明示されている通り、我々の認識がイデア、あるいは形相を拠り所としていることは動かない。そしてそれが、それら可知的実体に本質的に備わる規定的性格や同一性に起因するものであることもたしかだろう。ただし、仮に確実な認識を支えるものがこの可知的実体なのだとして、上の引用部がその段階に至った魂と一者の接触を描く場面だとするならば、何故その認識対象を喪失した魂は可知的世界に留まらないのだろうか。可知的世界で獲得した確実な認識を捨て去り、再び可感的事物に備わる偽りの「確かさ」「堅固さ」へと舞い戻ってゆく不可解な振る舞いには、何らか必然的と言い得る説明を付さなければならないだろう。そのためには、この「形相が無形相である」という明らかな矛盾を積極的に引き受け、そこに何かしらの意義を見出さなければならない。つまり、プロティノスの考える可知的世界の内部にも、魂がとるべき指針を見失わせる何かがあると想定するのである。

例えば **Schroeder** は、プロティノスの探求が持つ発見的な側面を強調する解釈を提示している¹⁴⁷。つまり、「何であるか」の問いの先に確固たる存在や知識の基盤を求めるのではなく、むしろその問いを推し進めるプロセスの中にこそ真価があると見なすのである。「可知的なものの中に落ち着く」と表現され得るような安定がそこにはあるかも知れない。しかしながら同時に、一旦はそこに到達しながら、再び可感的世界へと滑り落ちる魂が存在することもまたプロティノスの記述が示すところである。そこからは、プラトン主義を標榜しつつも、他方我々の探求はかのイデア的実在との接触にすら留まるべきではないというプロティノスの警鐘を聞き取ることが出来るだろう。極端に言えば、何かを知ろうとする営みの終極には、何も待っていないのである。しかし、それはあくまでポジティブな意味合いと言えるだろう。このプロセスを、**Schroeder** が表現する限りの「否定神学」的な側面としてまとめられるか否かについては議論の余地がある。しかしながら、以上のように考える限り、可知的実体の段階に一者から引き継がれる無規定性というあり方を見出すことには、プロティノスの哲学においてアポリア回避を見込んだ道具立て以上の意味付けを与えることが出来るだろう。またここには、可知的実体の上に、更に究極の無規定性としての一者という上位段階を設けることの意義を認めることが出来るかも知れない。

¹⁴⁷ Schroeder(2014).

既に検討したプロティノスのディアレクティケー論をこの点と関連させることも可能だろう。以上の問題について、ディアレクティケーが為し得ることは何か。それは、可知的人間に関しても、それを構成する要素への分解を試みることではないだろうか。つまり、第一節に引いたプロティノスのディアレクティケーの特徴を伝える記述にも見られる「類」及び「種差」のことである。つまりプロティノスは、イデア的實在の段階においてもなお複合的な構造が認められることを重く受け止め、その「多」としての複合性を「一」という単一性へと限りなく純化してゆくことが必要だと考えているのである。また興味深いことに、彼はそのイデア的實在に備わる複合性の一要素を「ことばにおける形姿」という仕方で表現している。

従って、美（そのもの）が語られるときであっても、なおそのような形姿から逃れなければならないし、眼前に（その形姿を）作り出してもならない。それは、美しいもの（そのもの）から臃げな分有によって美しいと言われているものへと転落しないためである。他方、無形の形相は、実際それは形相であるため、美しいものである。その上、君があらゆる形姿を取り去ってゆく程度に従ってそのように（美しいものと）なる。それは、ことばにおける形姿をもそうするが如くである。すなわち、その点においてあるものが別のものから異なる、と我々が言うところのものであるが、例えば正義と節制が（ともに）美しいものでありながら互いに異なる、というようなことである。

διὸ καὶ ὅταν κάλλος λέγηται, φευκτέον μᾶλλον ἀπὸ μορφῆς τοιαύτης, ἀλλ' οὐ πρὸ ὀμμάτων ποιητέον, ἵνα μὴ ἐκπέσης τοῦ καλοῦ εἰς τὸ ἀμυδρᾶ μετοχῆ καλὸν λεγόμενον. τὸ δὲ ἄμορφον εἶδος καλόν, εἴπερ εἶδος ἐστὶ, καὶ ὅσῳ ἂν ἀποσυλήσας εἴης πᾶσαν μορφήν, οἷον καὶ τὴν ἐν λόγῳ, ἣ διαφέρειν ἄλλο ἄλλου λέγομεν, ὡς δικαιοσύνην καὶ σωφροσύνην ἀλλήλων ἕτερα, καίτοι καλὰ ὄντα.

38(VI.7) 33,1-7.

既に確認した通り、イデア的實在はその全体が可知的世界に一致するかたちで混然一体となつてあるのだが、それでもなおその構成要素一つ一つは互いに差異を持っており、それ故ある意味では多性を有すると言われる。上の引用から予想される通り、プロティノスはイデア的實在の内にも類と種差に基づいた存在論的構造を見てとっているからである。「ことばにおける形姿」とは、その構造を言語表現へと置き換える中で現れる、類種関係としての規定のことであろう。この構造の探求がプラトンの分割法の対象となることは、第一節で検討したプロティノスのディアレクティケー観に確認される。またその上で、プロティノスの探求はその構造の発見に留まらない。つまり、そのそれぞれから差異化の要因を取り去ってゆく、つまり可知的世界の構造に見出される複合性をその要素へと分解してゆく中で、より単一性の程度が高い認識対象へと至るのである。そしてそのプロセスの中で、それぞれの主体は、より根本的でより単純な實在に接近することを美しさの増強という体験をもって感得

するのだと言える。ディアレクティケーはこの体験へと繋がる重要な起点である。

結

以上の検討を経て、明らかとなったことをまとめよう。プロティノスは、*τίεστιν* という問いの形式を哲学的思索の出発点として認めている。ただし、この形式自体を他学派含む彼の先人と共有する一方で、彼とそれ以前の伝統との間における内実の差異は大きなものであることを指摘した。中でも、プロティノスが意識的に自身との距離を強調するのがペリパトス派のものである。プロティノスによれば、ペリパトス派の実体分析は可感的事物のみを対象とするものであり、また可感的事物を対象とした考察に起点を据えること自体は彼も受け入れる一方で、彼らの探求がその段階に留まることは批判されるべきである。その決定的差異を生み出す要因は、やはり両者の *οὐσία* 理解に求められるだろう。すなわち、彼らの究極的な考察対象が形相であれ複合体であれ、ペリパトス派はあくまで可感的事物を基軸として成立するものを探求するのに対し、プロティノスの考察が向かうべきは、あらゆる意味で物体性から離れた可知的実体である。

「何であるか」と問うときの主語としての基体は、確かに探求の出発点ではある。当然それが無ければ、探求そのものが開始されないからである。しかしながら、それを認識に先立つ与件と捉えてはならない。もちろんそのように考える理由が、『ティマイオス』の世界制作神話を真摯に受け取りつつ解釈を施したプロティノスの、プラトン主義者としての自己認識に求められることは疑い得ない。ただその一方で、この論点を強調することの裏にはプラトンの知り得なかった後代のプラトン批判という文脈が隠れており、その批判への応答の中でプロティノス独自の視点が盛り込まれることになったのだと考えられる。アイデアの段階に認められる規定的性格や同一性の看取に留まることなく、その先に控える真の無規定性との関係において探求という営みを捉えることが必要であり、またその側面は、プロティノスの哲学をプラトンのそれから独立せしめる彼独自の要素として指摘され得るだろう。

ここまで、可知的世界への上昇プロセスを「何であるか」という問い、すなわち言語を介した思考を出発点として見てきた。しかしながら、プロティノスの視野はこの分析の対象を可知的世界へと延長させることだけに留まるのでもない。本章冒頭で示した通り、そこには合一という通常の認識様態を超えた境地が想定されているのである。次章では、プロティノス哲学の根幹を為すこの側面を、美という観点から更に掘り下げてみたい。

第六章

プロティノスの「神に似ること」と「美になること」 —徳(ἀρετή)と浄化(κάθαρσις)の関係に着目して—

序

プロティノスが『エンネアデス』において展開する哲学の終着点(τέλος)は、常に精神的師たるプラトンが目指したものと同一地平に位置すると自覚されている。プロティノスが念頭に置いていたプラトンの理想の淵源については、特に『テアイテトス』中の所謂「脱線部(176a-177c)」の記述に求められる比重が大きい。すなわち、この世からかの世へと逃げ(φεύγειν)、出来る限り「神に似ること(ὁμοίωσις θεῶ)」を目指すという図式がそれである。「神に似ること」は、プロティノスの哲学において、その根幹を成す魂の「上昇(ἀναγωγή)」モチーフと重ね合わせて解釈され、一者からの発出と表裏一体を成す還帰のプロセスとして極めて重要な位置を占めている。

ただし、生の理想を「神に似ること」として描く傾向自体は、ギリシャ思想の伝統の中でプラトンにおいてのみ確認されるものではない。それぞれが構想する「神的な生」を志向したという点では、ペリパトス派、ストア派、エピクロス派もある意味で理想を共有しているという見方も可能であろう¹⁴⁸。さらに言えば、プラトン主義内部においてさえも、プラトン哲学が構想する理想をどのように理解するかについて一致した見解が存在していたわけではない¹⁴⁹。実際、プラトンが枠組みを提供してからプロティノスの生きた後3世紀に至るまで、「神に似ること」の内実は様々に説明されてきた。こうした事情から、プロティノスは、まず何よりプラトン自身が構想したかたちでの「神に似る」とはどのような事態か、という問いを深化させ、解釈上の困難を解消した上で再定式化を行う必要があったのだと考えられる。すなわち、どのような仕方、どのような意味での神に、如何なる意味で似るのか、という問いをプラトン自身のテキストに投げかけた上で、その問いへの回答を通じて、プラトン主義者たるプロティノスにとっての「神に似ること」という図式を再構成しなければならなかったのである。

本章では以上の問題意識に基づき、プロティノスが構想する「神に似ること」の内実を検討したい。まず足掛かりとして、『テアイテトス』において「神に似ること」を語る際

¹⁴⁸ プロティノスに至るまでの、神に似る、あるいは神的な生を送るという哲学的理想については O'Meara(2003), 31-39 における整理を参照。プラトン及びアリストテレスによる理解に焦点を当てたものとしては Sedley(2017)、帝政ローマ期から古代後期に至るまでの「神に似ること」の解釈史については Männlein-Robert(2013)が詳しい。

¹⁴⁹ Männlein-Robert(2013), 99-102.

のプラトンの言葉遣いを、次いでプロティノスによる当該箇所解釈を確認し、そこで用いられる徳(ἀρετή)概念の位置づけに関して、二者間の相違を明らかにする。プロティノスは徳のあり方を説明する際の典拠として、『テアイテトス』の他に、『パイドン』に示される「浄化(κάθαρσις)」がすなわち徳である、という図式を持ち出し、その浄化を「神に似ること」の過程に当てはめるが、我々と神の両者を結ぶものは何かと問うとき、徳による説明では不十分であることを指摘する。そこで本章が特に着目するのは、上昇に際しての美の位置づけである。『饗宴』における美の階梯のモチーフに従うかたちで浄化は美そのものへのアプローチと関連付けられるが、プロティノスは複数の対話篇を跨いだプラトン解釈を行う中で、徳、浄化、美という諸概念の相互関係を調停し、それぞれを有機的な連関とともに説明する必要が生じる。徳を中途段階と見なした上で、人間と神という二者をつなぐものとしての役割を与えられた美の位相、及び浄化と美の階梯というそれぞれの関係を、プロティノスの手による整合的なプラトン解釈の成果として示すことが本章の目的である。

また以上の検討を踏まえて、「神に似ること」というプラトン主義を徹底する中で、徳を超えるものとして美に与えられた特権的位置づけから、プロティノスにとっての「神に似ること」の実現に寄与する美特有の役割についても考察を加えたい。

第一節：神に似るための手立て

プラトン自身は神に似るための手立てをどのようなものと考えていただろうか。対話篇中で必ずしも明示的に語られるわけではないが¹⁵⁰、主たる典拠となる『テアイテトス』の記述から、必要な要素、条件として考えられることを確認してみたい。

ソクラテス：いやしかし、テオドロスさんよ、諸悪が消滅することはありません。というのも善と反対のものが常にあることは必然ですから。そして諸悪が神々の内に落ち着くこともあり得ないでしょう、必然的にそれらは死すべきものとしての本性を、そしてこの場所を取り巻いているのです。だからこそ、ここからかの所へとできるだけ早く逃げようと試みることもせねばなりません。ところでその逃避とは、可能な限り神に似ることなのです。その「似る」とは、思慮をもって正しくかつ敬虔な者となることです。[...] すなわち、神はいかなる仕方でも決して不正なものではありません、むしろ出来得る限りで最大限に正しきものであり、そして我々の内でまた出

¹⁵⁰ 同様のモチーフが登場するプラトン対話篇中の箇所については Männlein-Robert(2013), 99 を参照。彼女は、これらの箇所における「神に似ること」の主眼は対話篇毎の主題に応じて微妙に異なっている一方で、プロティノスに至るまでのプラトン主義者達はその対話篇間の緊張関係に対してあまり注意を払わなかったと見ている。

来る限り正しきものとなった者に優って他の何かがより神に似るといふことはないのです。

ἀλλ' οὐτ' ἀπολέσθαι τὰ κακὰ δυνατόν, ὦ Θεόδωρε -ύπεναντίον γάρ τι τῷ ἀγαθῷ
ἀεὶ εἶναι ἀνάγκη- οὐτ' ἐν θεοῖς αὐτὰ ἰδρῦσθαι, τὴν δὲ θνητὴν φύσιν καὶ τόνδε τὸν
τόπον περιπολεῖ ἐξ ἀνάγκης. διὸ καὶ πειρᾶσθαι χρὴ ἐνθένδε ἐκεῖσε φεύγειν ὅτι
τάχιστα. φυγὴ δὲ ὁμοίωσις θεῷ κατὰ τὸ δυνατόν· ὁμοίωσις δὲ δίκαιον καὶ ὄσιον
μετὰ φρονήσεως γενέσθαι [...] θεὸς οὐδαμῆ οὐδαμῶς ἄδικος, ἀλλ' ὡς οἶόν τε
δικαιοῦτατος, καὶ οὐκ ἔστιν αὐτῷ ὁμοιότερον οὐδὲν ἢ ὅς ἂν ἡμῶν αὐτῶν γένηται ὅτι
δικαιοῦτατος.

Thi.176a5-c3

このように、神は最も正しきもの(δικαιοῦτατος)として描かれ、人間たる我々が、思慮(φρόνησις)とともに、正しきものとなることで、「神に似ること」が実現されると説明されている。上の引用において、その性質とは正しい(δίκαιος)ことである。すなわち、『テアイテトス』に示される限りでは、最上の正しさを備えている存在はあくまで神であり¹⁵¹、「神に似ること」とは、人間としての我々が神に備わるものと共通の正しさを出来る限り(κατὰ τὸ δυνατόν)身につけることで、神に似た人間として生を送ることだ、と説明される¹⁵²。

プロティノスは第 19 論攷「徳について」において、以上の図式を批判的に検討している。その冒頭部でプロティノスが提示する疑念は、上に示した「正しさによる類似」を「徳による類似」と理解した上で表明されたものである。つまり、我々と神を結ぶ共通項は果たして徳なのか否か、徳を持たぬものとしての神に徳を身につけることで似ることが出来るのか、という問いがそれである。プロティノスは『テアイテトス』の上掲箇所をパラフレーズした後、以下のように問う。

さて、もし我々が徳によって似るのだとしたら、徳を有した(神)に(似るのだろうか)。
さらに言えば、どのような神に(似るのだろうか)。

¹⁵¹ 『テアイテトス』の「脱線部」では、徳はあくまで人間が追求するものとして描かれており、神と徳一般の関係については触れられない。以下で示す通り、「脱線部」における神を徳あるものと理解した上で議論する方針は、プロティノス自身のプラトン解釈が反映されたものと言えよう。ただ、徳を有する神に関するプラトン自身の記述としては、例えば『法律』900d を挙げることができる。

¹⁵² 類例としては、「というのも、少なくとも正しき者になろうと熱心に望み、徳を実践しつつ人間に出来る限りで神に似ようと望むような人が、神々によって配慮されないということは決してないのだから。」(οὐ γὰρ δὴ ὑπὸ γε θεῶν ποτε ἀμελεῖται ὅς ἂν προθυμείσθαι ἐθέλη δίκαιος γίγνεσθαι καὶ ἐπιτηδεύων ἀρετὴν εἰς ὅσον δυνατόν ἀνθρώπῳ ὁμοιοῦσθαι θεῷ.), *Resp.613b1* が挙げられる。

εἰ οὖν ἀρετῇ ὁμοιούμεθα, ἄρα ἀρετὴν ἔχοντι; καὶ δὴ καὶ τίνι θεῷ;

19(I.2) 1,5-6

直後にプロティノスが指摘するように¹⁵³、神にとっては勇気を引き起こすような恐ろしいものや欲望の対象は存在しないのであって、そもそもそこに徳が介在する余地はない。このことを当然と認めるのであれば、プロティノスが『テアイテトス』の記述を文字通り受け入れることは困難である。すなわち、プロティノスにとっての「神に似ること」とは、少なくとも『テアイテトス』が示した仕方で、人間の徳を神の有する徳へと接近させていった結果として達成されるものではない。この困難に直面したプロティノスは、「似る」という事態そのものについて再考を迫られることになる。

それでは、プロティノスにとっての神への接近を可能にする類似とは、人間と神という両者に跨るどのような点に存すると考えられているのか。引き続き『エンネアデス』における記述を確認することにしよう。プロティノスは執筆の最初期にあたる第1論攷「美について」の時点で、魂の美しさを語る文脈で、魂の浄化を介して「神に似ること」についての言及を行っている。

さて、魂は浄化されると形相となりロゴスとなり、全くの非物体的なもの、知性的なものとなり、その全体が神的なものに属するようになる。美しいものの水脈はそこ（神的なもの）から発するのだし、また同族のものは全てそこに由来するのである。それ故、知性へと導かれた魂は、より一層美しいものとなるのである。ところで、知性及び知性を取り巻いているものどもは、魂にとって本来的な美であって、異質なものではない。そのときが真に魂だけであるときなのだから。従ってまた、魂が善いもの、美しいものとなることは、神に似ることである、と言われたのは正当である。美しいもの及びその他有るものどもに関わるものはそこに由来するのだから。

γίνεται οὖν ἡ ψυχὴ καθαρθεῖσα εἶδος καὶ λόγος καὶ πάντῃ ἀσώματος καὶ νοερά καὶ ὅλη τοῦ θεοῦ, ὅθεν ἡ πηγὴ τοῦ καλοῦ καὶ τὰ συγγενῆ πάντα τοιαῦτα. ψυχὴ οὖν ἀναχθεῖσα πρὸς νοῦν ἐπὶ τὸ μᾶλλον ἐστὶ καλόν. νοῦς δὲ καὶ τὰ παρὰ νοῦ τὸ κάλλος αὐτῇ οἰκειὸν καὶ οὐκ ἀλλότριον, ὅτι τότε ἐστὶν ὄντως μόνον ψυχὴ. διὸ καὶ λέγεται ὀρθῶς τὸ ἀγαθὸν καὶ καλὸν τὴν ψυχὴν γίνεσθαι ὁμοιωθῆναι εἶναι θεῷ, ὅτι ἐκεῖθεν τὸ καλὸν καὶ ἡ μοῖρα ἢ ἕτερον τῶν ὄντων.

1(I.6) 6,13-21

このようにプロティノスは、人間が①浄化によって魂だけになり、②善なるもの、美しいものになり、③その結果として神に似る、というプロセスを提示している。ここでは『パ

¹⁵³ 19(I.2) 1,10-13. また、神の徳と行為に関する同様の見解については『ニコマコス倫理学』1178b8-18などを参照。

イドン』に示される浄化(κάθαρσις)の説明に従う仕方、この世からの逃避に相当する過程が、肉体的なものを忌避し魂だけになることと重ね合わせて説明されている¹⁵⁴。浄化とは、魂にとって異質なもの(ἀλλότριον)あるいは外から加わったもの(ἐπακτόν)を取り去る過程なのであり、浄化の完了した状態(κεκαθάρθαι)、すなわち魂のみとなった状態に至って残るのは、魂にとって本来的なもの(οἰκειῖον)のみとなるはずである。上の引用では、それが「善いこと」及び「美しいこと」として語られている。ここではプロティノスの記述において、「神に似ること」が徳を備えることではなく、浄化を経て「美しいものとなること」だと理解されていることのみを確認するに留め、先に浄化と徳の位置づけについて触れておきたい。美については次節以降で扱うことにする。

さて、既に引用した『テアイテトス』の説明と異なり、浄化に関連する魂の持つ美しさこそが神への接近を可能にする類似なのであれば、徳はその過程で如何なる位置づけを持つだろうか。プロティノスは『テアイテトス』の図式をそのまま受け入れないが、徳による説明を全面的に放棄することはせず、他のプラトン対話篇を手掛かりに、徳を神へと接近するプロセスの内に当てはめている。第19論攷では、『パイドン』が「徳は浄化に他ならない¹⁵⁵」と説明していることを根拠に、徳を備えることと魂の肉体からの解放とが類比的に考えられている。つまり、浄化という連続的プロセスが進行するにつれ、魂が備える徳もまた段階的に推移するのである。Vorwerkの整理を参考に¹⁵⁶、第19論攷に現れる徳の段階を並べると以下のようなになるだろう。

1. 市民的徳¹⁵⁷(πολιτικὴ ἀρετή)

プロティノスはこの段階を『ポリテイア』で示される¹⁵⁸魂の非理性的部分の統制に対応するものであり、情念からの解放と見なす¹⁵⁹。

2. 上位の徳¹⁶⁰(μειζῶν ἀρετή)

¹⁵⁴ Männlein-Robert(2013)は、プロティノス以前のプラトン主義者達がプラトンにおける徳論の解釈に集中し、逃避の解釈を蔑ろにしていたという点を指摘し、ここにプロティノスとの隔たりを見て取っている。

¹⁵⁵ *Phd.* 69b-.

¹⁵⁶ Vorwerk(2001), 40-42を参照。Vorwerkはこの整理を行うにあたり、ポルフェリオスの『センチアエ』におけるより「厳密な」図式を参照している。プロティノスの記述が厳密にこの諸段階に対応している訳ではないが、少なくとも『パイドン』における二段階、および浄化の過程と完了した状態の区別はそれぞれ明確である(*ibid.*, n.37)。プロティノスにおいて問題となるのは、2b.と3.の関係である。

¹⁵⁷ 市民的という名称については *Phd.* 82a12-b1を参照。

¹⁵⁸ *Resp.* 431e7-432a9, 442c10-d3.

¹⁵⁹ *19(I.2)* 5-.

¹⁶⁰ 名称に関して、更に上位の範型を想定するプロティノスにとっては真なるものと呼ぶことはできない。Vorwerk(2001), 41を参照。

この段階が『パイドン』で言及される¹⁶¹真なる徳(ἀληθῆς ἀρετή)に対応する。この浄化に関わる徳は、更に二段階に分けられる。

a. 浄化 (κάθαρσις)

思慮(φρόνησις)に基づき、肉体的なものを避け、魂だけになろうとする段階。

b. 浄化された状態(κεκαθάρθαι)

異質なものを取り除くことで浄化が完了し、本来的なものだけになった状態。

3. 徳の範型(παράδειγμα)

後に徳へと展開するが、それ自身は徳とは呼ばれない段階。

これらの段階の内、プラトンの記述に即した浄化の到達点は、魂だけになった状態、すなわち 2b. までと考えられる。しかし、後述するように、プロティノスにとって魂は善きものにも悪しきものにもなり得る可能性を含み込むが故に、魂のみの段階は「神に似ること」の終極と見なすには不十分な地点であった¹⁶²。しかし、2b. 浄化が完了した状態を魂と同一視することが出来ないのであればそれは何なのか、そしてそれは 3. 徳の範型とどのような関係にあるのか、という点が第 19 論攷で明示的に語られることはない。この問題については他の論攷の記述を確認しつつ検討しなければならないだろう。

ここまで、「神に似ること」と浄化に関連する限りの徳の位置づけについてプロティノスの見解を確認してきた。Dillon が指摘するように、プラトンは『ポリテイア』において所謂魂の三分説及び四元徳の教説を提示する際に、魂の非理性的部分を理性的部分によって統制する様を徳のあり方として描いており、これは魂と肉体という対立の色濃い『パイドン』の記述と相容れない。その意味では、プラトンの対話篇は、一貫性を保つ仕方で徳の説明を提示しているわけではない。この一見矛盾した一連の記述を整合的に解釈する手立てとして、プロティノスは徳を範型から展開するものと見なし、複数の階層を設けたのである¹⁶³。その上で再三強調されるように、「神に似る」ことの末に達成されるべきは、決して市民的徳を備えた善き人間になることではない。

しかし、注力すべきは過ちを犯さぬことではなく、神であることなのだ。

ἀλλ' ἢ σπουδῆ οὐκ ἔξω ἀμαρτίας εἶναι, ἀλλὰ θεὸν εἶναι.

19(I.2) 6,2-3

¹⁶¹ *Phd.* 69b3.

¹⁶² 19(I.2) 4,13-14.

¹⁶³ Dillon(1983), 92-93.

というも、(ここでの「似ること」は) 善き人々にではなく、それら(神々)に対してだからである。それら(善き人々)に似ることは、どちらも同一のものに由来しているある像がまた別の像に、似ているが如くである。しかし、他方のもの(神)に似ることは、範型に似るが如くである。

πρὸς γὰρ τούτους, οὐ πρὸς ἀνθρώπους, ὡς εἰκῶν εἰκόνι ὡμοίωται ἀπὸ τοῦ αὐτοῦ ἑκατέρω. ἢ δὲ πρὸς ἄλλον ὡς πρὸς παράδειγμα.

19(I.2) 7,27-30

プロティノスにとって、ある人間が善き人間に似るケースと神に似るケースとでは、類似という言葉の内実異なるものである¹⁶⁴。すなわち、前者は範型を共有する模像同士が似ていると言われる場合であり、後者は模像が範型に似ていると言われる場合である。後者の引用文は、「神に似る」と言った時の「似る」という事態を取り違えないためのプロティノスの注意喚起である。徳を備えることはたしかに「神に似ること」への足掛かりであり、市民的徳を備えた人もまたある意味で「神のような」と形容され得ることはプロティノス自身も認めている¹⁶⁵が、あくまでプロティノスにとっての終極は、「(特定の) 人に似る」という段階に見出されるものではない。ただ他方で、神と人間をそれぞれ範型と模像として理解するならば、人間同士の類似とは異なり、その間の類似には断絶が見込まれることにもなる。つまり、模像は模像である限り、模像としてのあり方がいかに優れていても、範型の段階に至ることはないのである。既に示した通り、徳とは人間が人間である限りで備えるものなのだから、徳を身につけることの先に神との接触があるのではない。むしろ、浄化の過程で身につけた徳は、魂にとって本来的ではないという点で最終的に取り払われるべきものである。この点に、上記の類似関係及び断絶に関わるプロティノスの考え方を知る手掛かりがあるだろう。つまり、プロティノスが目指した終着点を正確に理解するためには、神と人間との類似関係に含まれる断絶を超えた浄化の完了という事態と、魂にとって本来的なものである美との関連が説明されなければならないのである。

第二節：魂の浄化、及び徳と美の相違

既に触れたように、プロティノスにとっての「神に似ること」とは、魂が浄化を経て美しいものとなることなのであった。徳による説明とは異なり、プロティノスは神や神的なものについて美しいと形容することを躊躇しない。つまり、神とその神に似る人間との間に見出される類似は、両者がともに「美しい」という点に存する。その意味で、美は『テアイテトス』の困難を回避しつつ両者を架橋する概念として有効だと言える。また、美を共通項として持ち出すことにより、プロティノスにとっての「神に似ること」は美の認識

¹⁶⁴ 類似の仕方を二種類に区別することについては 19(I.2) 2,1-10 を参照。

¹⁶⁵ 19(I.2) 2,24-26.

という側面を有するようになる。つまり、神の段階にある美を捉えることがまずもって「神に似ること」の条件として設定されるのである。その認識へ至る道のりは、浄化に伴う魂の変容と類比的に語られている。

というのも、太陽のようになっていない目は決して太陽を見ることが出来ないのであり、美しくなっていない魂もまた美しいものを見ることは出来ないのである。もし神や美しいものを眺めんとするならば、まず全体が神のようなものに、また全体が美しい者にならなければいけない。

οὐ γὰρ ἂν πώποτε εἶδεν ὀφθαλμὸς ἥλιον ἡλιοειδῆς μὴ γεγεννημένος, οὐδὲ τὸ καλὸν ἂν ἴδοι ψυχὴ μὴ καλῆ γενομένη. γενέσθω δὴ πρῶτον θεοειδῆς πᾶς καὶ καλὸς πᾶς, εἰ μέλλει θεάσασθαι θεὸν τε καὶ καλόν.

1(I.6) 9,30-34

ここから想起されるのは、「似たものが似たものに(ὅμοιον ὁμοίῳ)」という原則である。すなわち、任意の二者が似ていると言われるときは、両者それぞれに同様の性質が備わっていないかならぬが、その類似性は一方の他方に対する認識を根拠づけるものである。つまり、認識主体の内に認識対象との類似性がある初めて認識が成立するのである。ただし、ここで言及される美の認識については、浄化の段階毎に推移するものだという点に注意しなくてはならない。つまり、可感的な美を備えた者は可感的な美を看取することが出来ようが、神の段階の美を認識するためには、認識主体自身も神の段階の美を備えていなければならないのである。この変容の過程は、『パイドン』と同様、魂に付け加わった「汚れ」の比喻を通じて美との関連とともに説明されている。

私が思うに、不純な魂は感覚に落ち着くものどもに惹かれてどこへでも運ばれ、多くの物的なものや質料的なものや数多く関わりを持ち、自分と異なる種類のものを自分自身へと取り入れ、劣ったものとの混合により変わってしまったのである。それは、人が土や泥に落ちたとき、その人が持ち合わせていた美しさが現れず、土や泥によって覆われたものが見られるというようなことである。異質なものが付け加わることで醜いものがその人にやって来たのであり、もしもう一度美しい者になるとすれば、洗われ清められることであつてあつたようにあること、それがその人の為すべきことなのである。

ἀκάθαρτος δὴ, οἶμαι, οὖσα καὶ φερομένη πανταχοῦ ὀλκαῖς πρὸς τὰ τῆ αἰσθήσει προσπίπτοντα, πολὺ τὸ τοῦ σώματος ἔχουσα ἐγκεκραμένον, τῷ ὑλικῷ πολλῷ συνουσα καὶ εἰς αὐτὴν εἰσδεξαμένη εἶδος ἕτερον ἠλλάξατο κράσει τῆ πρὸς τὸ χεῖρον· οἷον εἰ τις δὺς εἰς πηλὸν ἢ βόρβορον τὸ μὲν ὅπερ εἶχε κάλλος μηκέτι προφαίνοι, τοῦτο δὲ ὀρώτο, ὁ παρὰ τοῦ πηλοῦ ἢ βορβόρου ἀπεμάξατο· ᾧ δὴ τὸ

αισχρὸν προσθήκη τοῦ ἀλλοτρίου προσῆλθε καὶ ἔργον αὐτῶ, εἴπερ ἔσται πάλιν
καλός, ἀπονιψαμένῳ καὶ καθηραμένῳ ὅπερ ἦν εἶναι.

1(I.6) 5,39-48

魂は元来美しいものだが、可感的な事物と関わる中で汚れが付け加わってしまう。プロティノスは、その汚れを落とし本来の自己をもう一度取り戻すことが人間の課題であると考えている。しかし、Bréhier が指摘するように、この「汚れ」の比喩的説明は浄化の中途段階までに適用されるべきであり、それ以降の段階においてもなお有効なものとは言えない¹⁶⁶。言い換えれば、プロティノスにとって「神に似ること」へとつながる浄化は、プラトンのような仕方で魂だけになることでは完結しないのである。その理由は、魂の本性という観点から説明される。プロティノスは善との一致を目指しているのだから、仮に浄化の結果として善なるものが残るのだとすれば、「神に似ること」は浄化によって達成されることになる。他方で、魂は可知的世界と可感的世界の両方に跨って生を送るいわば両生類(ἀμφίβιος)であり¹⁶⁷、それ故善にも悪にも向かい得るものである。真の意味で善なるものが悪しきものの内に降下するということはある得ない、と考えるプロティノスは¹⁶⁸、浄化の結果残るものの候補から魂を除外することになる¹⁶⁹。

また徳との関連で言えば、徳を有している状態もまた、魂にとって本来的ではない。既に見たように、プラトンにとっては神こそが徳の手本であり、徳を超えた段階は想定され得ないが¹⁷⁰、プロティノスによれば、徳とはもともと可知的世界にその範型(παράδειγμα)としてあるものであり、その段階においてはもはや徳とは呼ばれないようなものである、と説明される¹⁷¹。つまり、「神に似ること」の最終段階に至っては、浄化の主体であった魂は、肉体的なものだけではなく徳すらも身にまとうことを許されない。その点において、プロティノスの説明は『パイドン』の記述と明らかに異なっていると言えよう。そしてこの説明は、冒頭に示した『テアイテトス』の記述に見出される「神の徳」にまつわる困難を踏まえた対案でもある。ここに至って、この相違が導かれるに至った過程を見定める上で、我々は、魂に備わっている段階の徳及び範型としての徳という二つの段階を検討した後に、前者を取り去った結果として実現する「かつてあった」あり方での「自己自身」とはどのようなものか、という問題へと移らなければならない。

さて、徳を段階的に展開するものと見なした上で徳同士の相互関係を説明するというやり方はプロティノスの独創である、としばしば指摘される¹⁷²。また、この徳理解は一定の

¹⁶⁶ Bréhier(1940), 56.

¹⁶⁷ 6(IV.8) 4,32-.

¹⁶⁸ 19(I.2) 4,10-11.

¹⁶⁹ 19(I.2) 4,12-13.

¹⁷⁰ Rist(1964), 182-183.

¹⁷¹ 19(I.2) 6,18-22.

¹⁷² 例えば、Dillon(1983), Linguisti(2013)を参照。Dillon は、プロティノス及び彼に先行するアレクサンドリアのフィロン、オリゲネスは『テアイテトス』の記述に対する問題意識

影響力を保ちつつ、プラトン主義者を中心として後世の思想家に受け入れられたものと考えられている¹⁷³。ただし、一点の決定的相違がプロティノスと彼以降の理解の間に見出される。既に図式化したように、可知的世界に範型として存在する徳のあり方は、プロティノスに従えば、厳密には徳とすら呼ぶことの出来ないものである。「段階的に」という形容は「連続的に」という含意を予想させるが、少なくともプロティノスの構想する範型の段階と徳へと展開した後の段階との間には断絶が認められる。このことが「神は徳を備え得るか」という問いに直結していることは、既に指摘した通りである。他方、ポルフュリオス以降のプラトン主義者は、プロティノスの徳とは呼び得ない範型という段階を受け入れず、範型の段階に至っても連続性を保ちつつ徳としての身分を保証する傾向にある¹⁷⁴。本稿はプロティノス以外の論点には立ち入らないが、プロティノスに特有の徳理解を強調した上で美に与えられた役割との連関を考察することは、本章の目的に資する有益な作業と考えられよう。

それでは、プロティノスは似る対象としての神に関わる美と徳の範型との関係についてどのように考えているだろうか。神に関わる美については、可知的世界、すなわち美そのものであると考えられており、また魂はそこから可感的世界に降下したものだと思われている。また、徳も展開する以前は範型として可知的世界にあり、そこでは個別の徳へと分化する以前の渾然一体となったものとして、互いが互いを含み合っている(ἀντακολουθεῖν)と説明される¹⁷⁵。魂と徳はともに可知的世界に起源を持つが、可感的世界の段階で相互に関係する限りでは別個のもの、すなわち魂とその内に備わるものという関係になるのだと言える¹⁷⁶。ただし、内に備わるということは、魂が徳を後天的に獲得するということを意味するのではない。魂は可感的世界に降下した時点で、「活動せず、光を与えられることなく放置された¹⁷⁷」状態で徳を備えていたのである。浄化の結果見られることになる徳が可知的世界の印影(τύπος)と呼ばれる所以はそこにある¹⁷⁸。しかし、その徳はあくまで範型を可知的世界に持つ模倣なのであり、真の意味で魂が自身を適合させなければならないのは範型の方なのである。プロティノスの説明する浄化としての徳は、本来の自己の回復という特徴を持つ点で、獲得の対象としての徳という彼以前の伝統的な徳

を共有していたと見ているが、整合的なかたちで徳理論を提示したのはプロティノスに他ならないと考えている。

¹⁷³ Linguiti は、トマス・アキナスやボナヴェントゥラにまで波及したかたちでの徳の階層モデルは、プロティノスではなくむしろポルフュリオスの図式を取り入れたものと見ている。Linguiti(2013), 134-135 を参照。

¹⁷⁴ 例えば、ポルフュリオスは徳の最高段階を範型的徳(παραδειγματική ἀρετή)と呼ぶ。

¹⁷⁵ 19(I.2) 7,1-3.

¹⁷⁶ 知性の内にある段階のものは徳ではなく、魂の内にあるものが徳である、という点については 19(I.2) 6,14-15 を参照。

¹⁷⁷ 19(I.2) 4,21-22.

¹⁷⁸ 19(I.2) 4,24.

理解と大きく異なっている、と Bréhier は指摘する¹⁷⁹。その上で、プロティノスにとって浄化により実現される自己の回復は、魂としての自己を超えた更なる変容¹⁸⁰、つまり可知的世界にある範型の段階にまで達することをその射程に含み込んでいる点に注意しなくてはならない¹⁸¹。範型の段階へと到達した自己は、もはや徳が介在する余地のないものであり、美そのものと同じ地平に存在しているのである。

次節では、プロティノスにとって範型の段階への到達、つまり「美になること」が美の認識とどのように関係するか、そして、そのプロセスにおける実践的な側面がどのように構想されているかを確認する。それに先立ち、プロティノスは美を介した説明をもって、我々が「どのような意味での神」に似ると考えていたのかを先に見ておきたい。既に見た通り、プロティノスは、魂のみとなった状態は「神に似ること」の到達点として不十分だと考えていた。それでは、魂は浄化が完了した後にどのようなものとして存在するのか。

ここで、浄化の完了により到達する段階について、本稿では扱いきれない善との関係を確認し、考察対象を明確にしておこう。プロティノスは浄化と善との関係に言及し¹⁸²、これまで見てきた浄化の結果残るのは「善の姿を持つもの(ἀγαθοειδής)」であると述べる¹⁸³。つまり、その善は、一者たる善そのものではない。魂の本性が善きものなのだとしたら浄化だけで充分であったはずだが、ここで達成されたのは美そのものと同じ段階にある「ある種の善」への到達である。あくまで魂が最終的に到達すべきは善そのものとの一致であり¹⁸⁴、ここで示される段階は「善のようなもの」と見なされている限りで、善そのも

¹⁷⁹ Bréhier(1940), 57-58.

¹⁸⁰ Barnes(1942), 359.

¹⁸¹ Cf.しかし、もし人が自身によってか、幸運を受けてアテナ自身に引かれることによってか、向きを変えることが出来るならば、その人は自身を神として、また万有として見ることになる。はじめは(自身を)万有としては見ないだろうが、次いで如何にして自身を立て規定すればよいのか、またどこまでが自身なのかを掴めなくなり、有るものの全体から自身を括り出すのを止め、どこにも進むことなく、万有が座しているそこに留まりつつ、万有の全体へと向かうのである。

εἰ δέ τις ἐπιστραφήναι δύναίτο ἢ παρ' αὐτοῦ ἢ τῆς Ἀθηνᾶς αὐτῆς εὐτυχίᾳ τῆς ἔλξεως, θεὸν τε καὶ αὐτὸν καὶ τὸ πᾶν ὄψεται· ὄψεται δὲ τὰ μὲν πρῶτα οὐχ ὡς τὸ πᾶν, εἴτ' οὐκ ἔχων ὅπῃ αὐτὸν στήσας ὀριεῖ καὶ μέχρι τίνος αὐτός ἐστιν, ἀφείς περιγράφειν ἀπὸ τοῦ ὄντος ἅπαντος αὐτὸν εἰς ἅπαν τὸ πᾶν ἤξει προελθὼν οὐδαμοῦ, ἀλλ' αὐτοῦ μείνας, οὗ ἴδρυται τὸ πᾶν. 23(VI.5) 7,11-17.

¹⁸² Cf.しかし、浄化の完了した状態とはあらゆる異質なものの除去なのであるが、善はそのような事態とは異なるものである。いや、しかし、もし不浄な状態となる以前に善であったのならば、浄化で充分となろう。

ἀλλὰ τὸ κεκαθάρθαι ἀφαίρεσις ἀλλοτρίου παντός, τὸ δὲ ἀγαθὸν ἕτερον αὐτοῦ. ἢ, εἰ πρὸ τῆς ἀκαθαρσίας ἀγαθὸν ἦν, ἢ κάθαρσις ἀρκεῖ 19(I.2) 4,5-7.

¹⁸³ 19(I.2) 4,12. 『エンネアデス』中の用例では、この語は知性(νοῦς)の言い換えとしてしばしば用いられている。

¹⁸⁴ Cf. 9(VI.9) 10-.

のには至っていない¹⁸⁵。このことから、少なくともここまで考察してきた魂の浄化に関連して似る限りの神は、一者としての善そのものではなく、美そのものとしてある可知的世界のことであったことが分かる。プロティノスが神と呼ぶ対象は一者をはじめとして知性、魂、天体など一つに定まらないが¹⁸⁶、本章が検討対象とする徳と美を介して接近する対象としての神は、他から明確に区別されているのである。その点を了解した上で、以下では上昇の道において美が果たす役割を考察していきたい。

第三節：美を介した類似の特性

前節までで、プロティノスにとっての「神に似ること」を正確に理解するためには、それが徳の所有及び浄化の主体である我々の魂のみに関わる事柄ではなく、神と我々の魂はともに美しいという意味での類似を前提とし、魂が美の範型の方へと自身を適合させてゆく中で、可感的世界と可知的世界という存在論的に異なる世界を越境してゆくプロセスとして捉えなければならないことを確認した。また、美を共通項として類似を説明するにあたり、美の認識という段階を経なければならないこともまた指摘された。このことは、プロティノスが上位の徳を特徴づける記述の中で、知性認識(νόησις)、観ること(θεά)、視覚(ὄψις)といった認識に関わる語彙を豊富に用いていることから推察される。上位の徳を備えることは魂を自己自身へと向け変えることだが、その転換は魂と知性との関係を正しく理解することと密接に結びついている。魂は知性の方を向いているときに知性を有していると言われるが¹⁸⁷、どのようなことをきっかけとして魂は知性の方を向くのか、そしてこのときに発揮される知性作用によって何が理解され、何が達成されるのか。

ところで、徳や浄化がそうであったように、知性という点でも人間は生まれながらにして完成しているのではない。肉体をまとって生まれる限り、まず認識の対象として相対するのは可感的事物となるため、肉体的・物的なものを忌避するという浄化の原則とは裏腹に、我々は上昇の契機を掴むにあたり可感的事物を通じて上昇の手立てを探求しなければならない¹⁸⁸。プロティノスは、第20論攷「ディアレクティケーについて」において、可知的世界への上昇を達成するのはどのような者であるかを問い、可知的世界への接近度合いに応じて人間を三種類に分類している。ここにおいて、接近の初期段階にある人間について可感的美の看取という観点が取り上げられていることは注目に値する。つまり、可知的世界から遠ざかっている状態とは、可感的事物に捉われることで可知的世界の認識に至

¹⁸⁵ 美が善そのものの直前に位置しているということについては、1(I.6)9を参照。

¹⁸⁶ Cf. 10(V.1)2-.

¹⁸⁷ 19(I.2)4,25-29.

¹⁸⁸ Cf. あらゆる人間は、もとより知性に先立って感覚を用いるものとして生まれ、必然的に最初の対象として可感的なものどもに直面するのだが[...].

πάντες ἄνθρωποι ἐξαρχῆς γενόμενοι αἰσθήσει πρὸ νοῦ χρησάμενοι καὶ τοῖς αἰσθητοῖς προσβαλόντες πρῶτοις ἐξανάγκης[...] 5(V.9)1,1-3.

っていない状態に等しい。認識主体の変容に伴い認識の対象も推移するという点については既に触れたが、その変容に対しては可感的美の認識というプロセスが先行しているのである。

さて、可知的世界の美は魂にとって本来的なものであり、可感的世界へと降下した魂において、その内に残る徳は可知的世界の印影であるという点で上昇の契機として機能するのであった。可知的世界そのもの、つまり範型の段階において存在する美は、万人が享受し得る可感的な美しさの原因でもある。しかしながら、魂の上昇は、美しさを看取することそれのみで達成されるわけではない。可感的な美は可知的な美との連続性を保持しているが、あくまでプロティノスが魂にとって重要と考えるのは、まずその美しさの起源について問うことである。その上で、認識主体がこの点を適切に探求し理解するためには、魂の知性作用が必要なのである。可感的な美から出発し、美そのものを捉えるという図式と目標は『饗宴』と共通しているが、プロティノスにおける浄化と関連する限りでの美の位置づけは、魂の側の知性作用との連関が強調され、さらに最終的には可知的美の段階への移行とともに考察されねばならないことが示唆される¹⁸⁹。我々は様々な段階において美に相対すると言えるが、第20論攷は各々がそれぞれの段階で為すべきことを説明している。プロティノスは可感的世界から可知的世界へと上昇する場合とそこから一者へと到達する場合を区別した上で、前者を美に関連づけて説明する。

それをめぐって興奮していたものとはかのもの、すなわち知性的な調和、その内にある美しいものだったのだと、それは何か個別の美しいものではなく、全体として美しいものだったのだ、ということが教えられなければならない。そして哲学の言論を内に埋め込まなくてはならない。そこから知らずして持ち合わせているものの確信へと導かれなければならない。

διδασκτέον, ὡς περὶ ἃ ἐπτόητο ἐκεῖνα ἦν, ἡ νοητὴ ἀρμονία καὶ τὸ ἐν ταύτῃ καλὸν καὶ ὅλως τὸ καλόν, οὐ τό τι καλόν, καὶ λόγους τοὺς φιλοσοφίας ἐνθετέον· ἀφ' ὧν εἰς πίστιν ἀκτέον ὧν ἀγνοεῖ ἔχων.

20(I.3) 1,31-34

また（美が）技術、知識、徳の内にあることも（示されるだろう）。次いで、それらは一つのものでされなければならない、またどのようにしてそれらの内に生じるのかについても教えられなければならない。

¹⁸⁹ Cf. 可感的な事物の周りをさまようことを止め、可知的世界に住み[...].
παύσασα δὲ τῆς περὶ τὸ αἰσθητὸν πλάνης ἐνιδρύει τῷ νοητῷ κάκει[...] 20(I.3) 4,9-10.
もはや多事に煩わされることなく、一なるものとなって眺める。
οὐδὲν ἔτι πολυπραγμονοῦσα εἰς ἓν γενομένη βλέπει. 20(I.3) 4,17-18。また Rist(1964), 187
も参照。

καὶ ὅτι καὶ ἐν τέχναις καὶ ἐν ἐπιστήμαις καὶ ἐν ἀρεταῖς. εἶτα ἐν ποιητέον καὶ διδασκτέον, ὅπως ἐγγίνονται.

20(I.3) 2,10-12

すなわち、可感的美を看取する段階から、ディアレクティケーを用いて美とは何か、美とはどこに起源を持つものか、という問いへと進まなければならない。技術、知識、徳という順序で描かれるように、可感的世界の美の認識から始まり、可知的なものに備わる美へと認識が転じてゆくが、その転換の行きつく先は自己の魂である。それぞれに備わる美が如何にして生じるかを問う中で、「知らずして持ち合わせている」魂の美もまた可知的世界に由来することが理解される。つまり、プロティノスにとって美そのものを捉えることは、それが単に可感的事物の美しさの原因としてあるだけでなく、魂自身もまた美そのものとしての可知的世界とつながりを持っている、という事実をも知ることなのである。

そのため、『パイドン』で浄化の儀式(καθαρός)と見なされる思慮(φρόνησις)の働きは¹⁹⁰、その意味では他の徳よりも特権的な位置を占めているとされる¹⁹¹。思慮は魂を下方から向け変えるにあたっての知性作用と同一視されており¹⁹²、その作用を実際に働かせることが上昇の起点を成すからである。そして、前述の「似たものが似たものに」という原則を認めた上で、ある人が可感的事物から視線を向け変え、可知的な美の存在を看取することが出来る段階に至ったのであれば、そのこと自体が既に自己の変容という事態を含み込んでいる。それ故、プロティノスにとっての浄化は、『パイドン』で示される密儀(τελετή)のイメージと重ねて説明されている¹⁹³一方で、その内実は思慮を正しく働かせ、真に有るものとそうでないものとを峻別するという知性的な営みを含むプロセスを指すものであると考えられる。その最終段階において真の意味で美そのものを捉えるためには、魂も美そのものにならなければならないが、その段階の美はもはや認識の対象として我々の外に存するものではない。むしろ我々の魂に本来的に備わっていて既に持っているもの、そこへと回帰すべき可知的世界そのものである。プロティノスが、美を捉える段階の中で最も下層に位置すると見なす人々に関しても、美の考察を通して「知らずして持ち合わせているものの確信へと導かれねばならない」と述べるのは以上の理由によるのであり、また思慮をもって内なる美の存在に気付くことこそが、魂の向け変え(ἐπιστροφή)に始まる浄化、すなわち神への上昇の第一歩に他ならない。

¹⁹⁰ *Phd.* 69c2-3.

¹⁹¹ 20(I.3) 6,10-14.

¹⁹² 1(I.6) 6,12.

¹⁹³ 1(I.6) 7-.

プロティノスの思想は最終的に一者との神秘的合一を目指すものであるが¹⁹⁴、その段階は論理を超えたもの、論理に先立つものとされ¹⁹⁵、延いては知性による把握を含めた一切の認識を受け入れないという点がまさに一者との合一を神秘的ならしめる所以である。しかし、プロティノスは一者までに至る段階と知性にまで至る段階を明確に区別しており、後者の意味での上昇を、美的経験を介したディアレクティケーに続くものとして描くのである。その意味では、一者との合一に至る道のりは、その全行程にわたって認識を拒否するわけではない。可感的事物に備わる美、そして本来的なものとして我々に備わっている美は、範型としての美を原因者として持つものである¹⁹⁶。この事実を知るための手段として、哲学、ディアレクティケー、思慮という入り口は我々にとって常に開かれているのであり、可知的世界の段階に至るまでの道のりは決して論理、認識を超えたものと考えられてはいないという点で、そこから先に控える一者までの道のりとの間には大きな落差が指摘され得るだろう。

結

徳を備えることで神に似るとするモデルをプラトンのものと考えたとき、それは人間の内で最も優れたもののみがあくまで人間として実現する、という含意を予想させる。一方、美を介して神に似ると考えるプロティノスは、美に特有と言える可知的世界との連続性を踏まえ、独自の見解を提示するに至っている。すなわち、可感的世界のもので可知的世界に由来しないものはなく、可知的世界は美そのものであるという点であらゆる美しさの源泉である。また可知的世界に由来する魂を持つ限りで美に関係を持たないものはいないのであり、誰もが潜在的に神になることを保証されている¹⁹⁷。

¹⁹⁴ 20(I.3) 1,16-17.

¹⁹⁵ 9(VI.9) 10,7-9.

¹⁹⁶ ここまで、徳に関しては徳の範型と展開後の徳の間に断絶が認められることを前提として、その断絶を補完する概念としての美を扱ってきた。ただ、美の概念に関しても、範型としての美と模倣としての美の両方が認められる限り、何故そこには断絶が認められないのかを問う必要があるだろう。徳における断絶については、神にとって徳は必要なものではない、という点はその理由であった。すなわち、徳（例えば勇氣）はそれを要請するもの（例えば恐怖の対象）との関連で語られるが、神にとって後者の存在はあり得ない。ある意味で、徳は対象に依存するいわば他律的な概念と言えよう。そこから逆算して考えるに、プロティノスは美を自律的な概念として理解し、神にも認められるものとなしたという推測が成り立つ。

¹⁹⁷ 人間魂の諸段階に言及しつつ、最高段階を神と見なしている例としては、例えば 38(VI.7) 6,27-28 を参照。

プラトンは「神に似ること」を語る際に、多くの場合「出来る限り」という限定を付しているが¹⁹⁸、プロティノスは基本的にこれを削除した上で引用を行う¹⁹⁹。「出来る限り」とはあくまで神との断絶を前提とし、人間として生を送る限りで機能する句であって、徳を備えた生を超えた段階、知性以上のものとの一致を想定するプロティノスがプラトンの引用文中からこの句を削除することは自然であると言える。魂として人間を超え、美を契機として自己自身を顧み、美そのものになることがプロティノスの考える「神に似ること」、すなわち神になること、可知的世界へと回帰することなのであり、それが本来の自己へ戻ることと理解される限りでは、知性を備えた人間にとって、知を愛する営みの結果として「神に似ること」は十分に実現可能な選択肢と考えられているのである。

¹⁹⁸ Kalligas は、既に引用した *Resp.* 613b1 の他、*Resp.* 500d1, *Phdr.* 253a4, *Tim.* 69a1-2, *Leg.* 716c6-7 における例を紹介している。Kalligas(2014), 143 を参照。

¹⁹⁹ Rist(1964), 186-187 及び Kalligas(2014), 143 を参照。

結論

ここまで、観点を変えながらプロティノスによる可感的世界を対象とした探求の内実を確認してきた。そこで明らかとなったことの一つは、プロティノスが考える可感的世界の成立過程、及びそこに備わる構造が、どこまでもプラトン『ティマイオス』の記述を下敷きとして説明されていることである。しかしながらこのことは、プロティノスがプラトンの記述をそのまま受け入れ、字義通りの解釈を擁護したということの意味しない。プロティノスの時代に至るまでに『ティマイオス』の記述は、プラトン派によるものか、あるいは他学派かによるものかを問わず、多数の有意な批判的吟味に晒されてきた。プロティノスにおいて一見突飛なアイデアという印象を読者に与える、制作者及びアイデアと同定される知性原理、非受動的な質料といった諸概念も、もちろん哲学史における新奇性を有することは事実であるが、他方でその新奇性は決して彼以前の世代との断絶という点のみで強調されるべきではなく、むしろ彼以前の伝統と地続きのものとしても捉えることが可能だろう。

その一方で、プロティノスを「新プラトン主義者」としてラベリングする際に必ず持ち出される一者、知性といった高位原理の導入は、現代の読み手のみならず、彼の同時代人、延いては弟子のポルフェリオスを含むプラトン主義者にあっても即座には理解不能なものだったと伝えられる。ただこれらは決してプロティノスによる荒唐無稽な発想ではなく、またプラトン主義的立場に立った上での独断論の産物でもない。むしろ、同時代に至るまでの哲学的蓄積を十全に検討した上で、プラトン主義内外を問わず、学説としての妥当性を突き詰めた結果必然的に要請されたものとして構想されている。ここに哲学者プロティノスの対話的態度を見てとることが出来よう。

アイデア、あるいは形相の如き非物体的な原理を巡る論争は、学派ごとに措定する前提の齟齬を原因として、しばしば健全な議論の成立が危ぶまれるものである。プロティノスはその点を十分念頭に置き、読み手、あるいは論敵の多様性を十分に考慮した上で、自由に論の焦点を変更する書き手だったように思われる。当然プラトン派内部のプラトン解釈においてアイデア的原理の实在を説得する必要はなく、むしろ前提として扱われてよいはずである。しかしながらプロティノスは、他学派からの批判に対する際にもアイデア的原理という前提を強弁し、独断論を展開するわけではない。

このときのプロティノスの態度は、いわば柔軟かつ誠実である。つまり、他学派とその实在性のある程度まで共有している可感的世界のあり方を題材とし、他学派の学説に備わる根本的不備を指摘した上で初めて、その不足を補完する説明項として、アイデアの如き高位原理の存在に訴えかけるのである。非物体的原理とは異なり、可感的世界を対象とした探求は必然的に現象、経験との整合性を問われることになる。そして、現象、経験に最も

よく合致すると「思われた」説明が、理論としての精巧さを獲得することになる。またこの精巧さが確保され、我々が共通して被る現象、経験の大部分を整合的に説明し得るとき、その理論は真実らしさを獲得するだろう。プロティノスの時代に至るまでに、ペリパトス派、特にアフロディシアスのアレクサンドロスの可感的実体論は、この精巧な理論としての地位を獲得していただと想像される。実際、プロティノスの説明にも多分に流入しているペリパトス派由来の哲学語彙は、この当時の思想状況を物語っているようにも思われる。

プロティノスに言わせれば、この理論としての精巧さは可感的事物のあり方をうまく説明する一方で、場合によっては観察者を容易に納得させ、更なる根本原因への歩みを阻害してしまう要因でもあった。だからこそプロティノスは、このペリパトス派による精巧な可感的事物の分析にメスを入れ、その根本的な不備を指摘し、自身の構想する「新たな」可感的事物の理論を構築したのだと考えられる。

この可感的事物の説明は、物体に関わる現象を説明し得るものでありながら、いわゆる「自然学」という範疇には収まらない。その中では常に、可感的事物から切り離されたかたちで自立する非物体的な原因の存在が想定されている。すなわち、プロティノスにとって、可感的事物を対象とした考察の中には必然的に非物体的な原理の参照が組み込まれている。それ故、その構造を具に見て検討することは、それを作りだした高位原理の存在に気づき、また上昇するための契機を掴むことに他ならない。このように、プロティノスは可感的事物を切り捨てず、むしろ高位原理との結びつきを強調し、そこに整合的な説明を与える中で、自身の哲学を一部の人間に向けた内向きの教説とすることなく、万人に開かれた営みとして構想していたものと思われるのである。

参考文献

- Annas, J. (1999). *Platonic Ethics, Old and New*. Cornell University Press.
- Arruzza, C. (2011). Passive Potentiality in the Physical Realm: Plotinus' Critique of Aristotle in Ennead II 5 [25]. *Archiv für Geschichte der Philosophie* 93(1), 24-57.
- Barnes, H. E. (1942). Katharsis in the Enneades of Plotinus. *Transactions and Proceedings of the American Philological Association* 73, 358-382.
- Bréhier, E. (1928). *La Philosophie de Plotin*. Bibliothèque de la Revue des Cours et Conférences, Boivin.
- Bréhier, E. (1940). ΑΡΕΤΑΙ ΚΑΘΑΡΣΕΙΣ. *Revue des Etudes anciennes* 42, 53-58.
- Brisson, L. (2000). Entre physique et métaphysique: le terme ὄγκος chez Plotin dans ses rapports avec la matière(ύλη) et le corps(σώμα). In Fattal, M. (Ed.), *Etudes sur Plotin*, 87-111. L'Harmattan.
- Chiaradonna, R. (2002). *Sostanza, Analogia, Movimento*. Bibliopolis.
- Chiaradonna, R. (2008). Hylémorphysme et Causalité des intelligibles: Plotin et Alexandre d'Aphrodise. *Les Études philosophiques* 86(3), 379-397.
- Chiaradonna, R. (2012). Plotino su pensiero, estensione e percezione sensibile: un dualismo "cartesiano"? In Chiaradonna, R. (Ed.), *Il Platonismo e le Scienze*, 81-99. Carocci editore.
- Chiaradonna, R. (2014). Plotinus on Sensible Particulars and Individual Essences. In Torrance, A. & Zachhuber, J. (Eds.), *Individuality in Late Antiquity*, 47-61. Ashgate.
- Chiaradonna, R. (2015). Plotinus' Account of Demiurgic Causation and Its Philosophical Background. In Marmodoro, A. & Prince, B. D. (Eds.), *Causation and Creation in Late Antiquity*, 31-50. Cambridge University Press.
- Chiaradonna, R. (2021). Aristotle's Physics as an Authoritative Work in Early Neoplatonism: Plotinus and Porphyry. In Erler, M., Hebler, J. E. & Petrucci, M. F. (Eds.), *Authority and Authoritative Texts in the Platonist Tradition*, 163-177. Cambridge University Press.
- Chiaradonna, R., & Trabattoni, F. (2009). *Physics and Philosophy of Nature in Greek Neoplatonism*. Brill.
- Corrigan, K. (1996). *Plotinus' Theory of Matter-Evil and the Question of Substance: Plato, Aristotle, and Alexander of Aphrodisias*. Peeters.
- D'Ancona Costa, C. (1992). ΑΜΟΡΦΟΝ ΚΑΙ ΑΝΕΙΔΕΟΝ. Causalité des formes et causalité de l'Un chez Plotin. *Revue de Philosophie Ancienne* 10, 69-113.
- D'Ancona Costa, C. (2009). Modèles de causalité chez Plotin. *Les Études philosophiques* 90(3), 361-385.

- De Risi, Vincenzo (2012). Plotino e la Rivoluzione scientifica. La presenza delle Enneadi nell'epistemologia leibniziana dello spazio fenomenico. In Chiaradonna, R. (Ed.), *Il Platonismo e le Scienze*, 143-163. Carocci editore.
- Dillon, J. (1969). Plotinus, *Enn.* 3.9.1, and Later Views on the Intelligible World. *Transactions and Proceedings of the American Philological Association* 100, 63-70.
- Dillon, J. (1977). *The Middle Platonists*. Duckworth.
- Dillon, J. (1983). Plotinus, Philo and Origen on the Grades of Virtue. In Blume, H-D.& Mann, F. (Eds.), *Platonismus und Christentum: Festschrift für Heinrich Dörrie*, 92-105. Aschendorff Verlag.
- Dörrie, H. (1959). *Porphyrios' Symmetrika Zetemata*. Verlag C. H. Beck München.
- Ellis, J. (1994). Alexander's Defense of Aristotle's Categories. *Phronesis* 39, 69-89.
- Emilsson, E. K. (1988). *Plotinus on Sense-Perception, A Philosophical Study*. Cambridge University Press.
- Emilsson, E. K. (1990). Reflections on Plotinus' Ennead IV.2. In Theodorsson, S.-T. (Ed.), *Greek and Latin Studies in Memory of Cajus Fabricius*, 206-219. Acta Universitatis Gothoburgensis.
- Emilsson, E. K. (2007). *Plotinus on Intellect*. Clarendon Press.
- Emilsson, E. K. (2021). Sense-Perception, Reasoning and Forms in Plotinus. *Phronesis* 67(1), 99-130.
- Fleet, B. (1995). *Plotinus Ennead III.6*. Oxford University Press.
- Gerson, L. P. (2002). Plotinus Against Aristotle's Essentialism. In Wagner, M. F. (Ed.), *Neoplatonism and Nature: Studies in Plotinus' Enneads*, 57-70. State University of New York Press.
- Gourinat, J.-B. (2016). *Plotin. Traité 20. I, 3. Sur la dialectique. Introduction, traduction, commentaire et notes*. Vrin.
- Griffin, M. J. (2015). *Aristotle's Categories in the Early Roman Empire*. Oxford University Press.
- Hadot, P. (1988). *Plotin, Traité 38*. Cerf.
- Igal, J. (1982). *Plotino, Enéadas I-II, Introducciones, Traducciones y Notas*. Editorial Gredos.
- Igal, J. (1985). *Plotino, Enéadas III-IV, Introducciones, Traducciones y Notas*. Editorial Gredos.
- Kalligas, P. (1997). Logos and Sensible Object in Plotinus. *Ancient Philosophy* 17(2), 397-410.
- Kalligas, P. (2011). The Structure of Appearances: Plotinus on the Constitution of Sensible Objects. *The Philosophical Quarterly* 61, 762-782.
- Kalligas, P. (2014). *The Enneads of Plotinus: Vol. 1*. Translated by Fowden K. E. & Pilavachi N. Princeton University Press.
- Karamanolis, G. (2009). Plotinus on Quality and Immanent Form. In Chiaradonna, R. & Trabattoni, F. (Eds.), *Physics and Philosophy of Nature in Greek Neoplatonism*, 79-100. Brill.
- Leroux, G. (1974). Logique et Dialectique chez Plotin: Enneade 1.3(20). *Phoenix* 28(2), 180-192.
- Linguisti, A. (2007). La materia dei corpi: sullo pseudoilemorfismo plotiniano. *Quaestio* 7, 105-122.
- Linguisti, A. (2013). The Neoplatonic Doctrine of the Grades of Virtue. In Pietsch, Ch. (Ed.), *Ethik des Antiken Platonismus: Der Platonische Weg zum Glück in Systematik, Entstehung und*

- Historischem Kontext*, 131-140. Franz Steiner Verlag.
- Lloyd, A. C. (1955). Neoplatonic Logic and Aristotelian Logic: I. *Phronesis* 1(1), 58-72.
- Lloyd, A. C. (1956). Neo-Platonic Logic and Aristotelian Logic: II. *Phronesis* 1(2), 146-160.
- Lloyd, A. C. (1990). *The Anatomy of Neoplatonism*. Clarendon Press.
- Long, A. A. (2022). *Ennead II.4 On Matter*. Parmenides Publishing.
- Majumdar, D. (2007). *Plotinus on the Appearance of Time and the World of Sense: A Pantomime*. Routledge.
- Männlein-Robert, I. (2013). Tugend, Flucht und Ekstase: zur ὁμοίωσις θεῶν in Kaiserzeit und Spätantike. In Pietsch, Ch. (Ed.), *Ethik des Antiken Platonismus: Der Platonische Weg zum Glück in Systematik, Entstehung und Historischem Kontext*, 99-111. Franz Steiner Verlag.
- Narbonne, J.-M. (1998). *Plotin, Traité 25*. Cerf.
- Narbonne, J.-M. (2001). *La Métaphysique de Plotin*. Vrin.
- 西村洋平 (2014) 「プロティノスの性質概念をめぐって」『アルケー: 関西哲学会年報』22, 134-145.
- Noble, C. I. (2013). Plotinus' Unaffected Matter. *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 44, 233-277.
- Noble, C. I., & Powers, N. M. (2015). Creation and Divine Providence in Plotinus. In Marmodoro, A. & Prince, B. D. (Eds.), *Causation and Creation in Late Antiquity*, 51-70. Cambridge University Press.
- O'Brien, C. S. (2015). *The Demiurge in Ancient Thought, Secondary Gods and Divine Mediators*. Cambridge University Press.
- O'Brien, D. (1991). *Plotinus on the Origin of Matter*. Bibliopolis.
- O'Meara, D. J. (1980). Gnosticism and the Making of the World in Plotinus. In Layton, B. (Ed.), *The Rediscovery of Gnosticism, Proceedings of the International Conference on Gnosticism at Yale New Haven, Connecticut, March 28-31, 1978*, Vol. 1, 365-378. Brill.
- O'Meara, D. J. (2003). *Platonopolis: Platonic Political Philosophy in Late Antiquity*. Clarendon Press.
- Rashed, M. (2007). *Essentialisme, Alexandre d'Aphrodise entre Logique Physique et Cosmologie*. De Gruyter.
- Regen, F. (1988). *Formlose Formen Plotins Philosophie als Versuch die Regressprobleme des platonischen Parmenides zu lösen*. Vandenhoeck&Ruprecht.
- Rist, J. M. (1964). *Eros and Psyche: Studies in Plato, Plotinus, and Origen*. University of Toronto Press.
- Rich, A. N. M. (1954). The Platonic Ideas as the Thoughts of God. *Mnemosyne* 4th Series 7(2), 123-133.
- Ross, W. D. (1936). *Aristotle's Physics, A Revised Text with Introduction and Commentary*. Clarendon Press.
- Roux, S. (2016). Rendre raison du corps: Plotin et le problème de la corporéité. *Revue des sciences*

- philosophiques et théologiques* 100(1), 9-25.
- Rutten, Ch. (1956). La Doctrine des Deux Actes dans la Philosophie de Plotin. *Revue Philosophique de la France et de l'Étranger*, 100-106.
- Rutten, Ch. (1961). *Les catégories du monde sensible dans les Ennéades de Plotin*. Les Belles Lettres.
- Schiaparelli, A. (2009). Plotinus on dialectic. *Archiv für Geschichte der Philosophie* 91(3), 253-287.
- Schiaparelli, A. (2010). Essence and Cause in Plotinus' Ennead VI.7 [38] 2: An Outline of Some Problems. In Charles, D. (Ed.), *Definition in Greek Philosophy*, 467-492. Oxford University Press.
- Schroeder, F. M. (2004). The Hermeneutics of Unity in Plotinus. In Narbonne, J.-M. & Reckermann, A. (Eds.), *Pensées de l'Un dans l'histoire de la philosophie. Études en hommage au professeur Werner Beierwaltes*, 108-122. Collection Zêtêsis.
- Sedley, D. (2017). Becoming Godlike. In Bobonich, Ch. (Ed.), *The Cambridge Companion to Ancient Ethics*, 319-337. Cambridge University Press.
- Sleeman, J. H., & Pollet, G. (1980). *Lexicon Plotinianum*. Brill.
- Smith, A. (2017). *Ennead V.8 On Intelligible Beauty*. Parmenides Publishing.
- Sorabji, R. (2005). *The Philosophy of the Commentators 200-600 AD, A Source Book Volume 2: Physics*. Cornell University Press.
- Strange, S. K. (1981). *Plotinus' Treatise on the Genera of Being: An Historical and Philosophical Study*. Dissertation, The University of Texas at Austin.
- Vorwerk, M. (2001). Plato on Virtue: Definitions of σωφροσύνη in Plato's Charmides and in Plotinus Enneads 1.2(19). *American Journal of Philology* 122, 29-47.
- Wagner, M. F. (1979). *Concepts and Causes: The Structure of Plotinus' Universe*. Dissertation, The Ohio State University.
- Wagner, M. F. (Ed.). (2002). *Neoplatonism and Nature: Studies in Plotinus' Enneads*. State University of New York Press.
- Wilberding, J. (2006). *Plotinus' Cosmology, A Study of Ennead II.1(40), Text, Translation, and Commentary*. Oxford University Press.
- Wilberding, J. & Horn, Ch. (2012). *Neoplatonism and the Philosophy of Nature*. Oxford University Press.

初出一覧

本論文の執筆にあたっては、筆者による既発表の原稿、学術論文を以下の通り使用した。

第一章：書き下ろし（ただし、三田哲学会哲学・倫理学部門(MIPS)2020年例会で使用した発表原稿「プロティノスにおける『二重のエネルゲイア理論』再考」に基づく）

第二章：豊田泰淳(2022)「プロティノスの擬似質料・形相論」日本哲学会編『哲学』73, 331-348.

第三章：豊田泰淳（近刊、採録決定済）「非物的なものから成る物体の世界 —プロティノスによる可感的事物の理解について、『エンネアデス』第26論攷(III.6)を中心に—」新プラトン主義協会編『新プラトン主義研究』23.

第四章：豊田泰淳（近刊、採録決定済）「プロティノスにおける物体の問題 —嵩(ὄγκος)と性質の関係に着目して—」西洋古典学会編『西洋古典学研究』71.

第五章：書き下ろし

第六章：豊田泰淳(2021)「プロティノスの「神に似ること」と「美になること」—徳(ἀρετή)と浄化(κάθαρσις)の関係に着目して—」新プラトン主義協会編『新プラトン主義研究』21, 32-46.